RADIO-CITY FANTASY

街角のメルヘン

ジ・アニメ 特別編集



メルヘン of アニメーション フィルム

小林七郎 メルヘンランド

名場面コラージュ

スタッフズ メルヘンワールド
描き下しイラスト集

天野嘉孝 書き下し ポスター

首藤剛志 書き下し 思い出の中のメルヘン

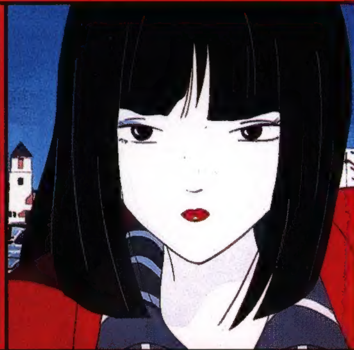
定価1200円

表紙イラスト／天野嘉孝

RADIO-CITY FANTASY

街角のメルヘン

CONTENTS





街かどのメルヘン

コンクリートとコンクリートの
間から　わずかにのぞいた空
ビルとビルの隙間に　残された
小さな小さな緑と花の色
そこで　ふたりは出会った……



イラスト／天野嘉孝


新宿メルヘンタウン
美監 小林七郎

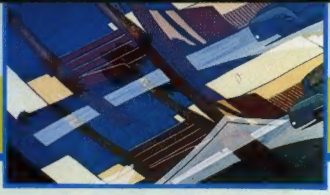
MÄRCHEN OF ANIMATION FILM

「街角のメルヘン」
フィルム・ストーリー

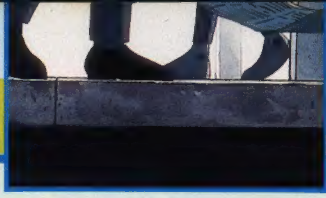


★ビデオアニメ『街角のメルヘン』は、映像と音楽による新しいメルヘンの世界を作り上げた。東京の副都心新宿を舞台に、浩と裕子の心に広がるメルヘン・ワールドを描いて、誰の心にも生きている優しさの世界をひき出してくれる。『街角のメルヘン』を、フィルム全カットを使って紹介しよう！









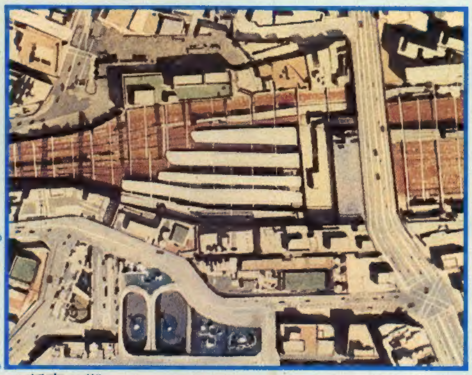
PART 1 春霞

はるがすみ——

四季の中でも、春は命の季節。草や木や虫たちが、長かった冬の眠りから覚めて、陽の光の恵みを全身に感じとろうと、ぼんやりとかすんだ空にむかって、大きく背伸びをする。それは、人間にとっても同じ——コンクリートに囲まれた都会にも、春らしい風の吹く日には、見なれた街角も明るく彩るかのよう。そんな日に、浩と裕子は出会った。

裕子と浩と……

電車が走る。ようやく春めいてきた新宿の街。ほこりっぽい人ごみの中に、改札口を飛び出した浩がまぎれこむ。西口地下道から中央公園へ。人工の中に、わずかに桜の花の香。浩は、地下道で裕子とぶつかった。それがふたりの出会い。地下道のうす闇の中に、ポスターの極色彩……。

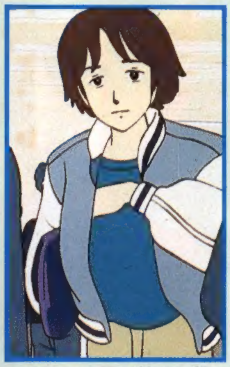


▲新宿の街

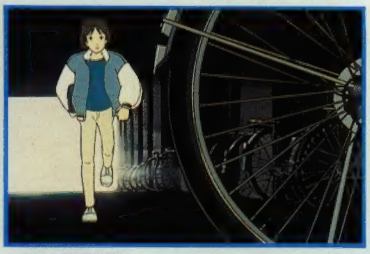




▲浩の影が映る



▲改札口を駆け抜ける浩



▲西口地下道



▲シンボル・パターンの前



▲地下道へ





▲ぶつかるふたり、舞うポスター

▲明暗のコントラストの中を走る裕子と浩

▲反対から裕子が駆けてくる







▲どこからかポスター類を盗んだ裕子が駆けてくる



▲翌日もまた



▲バイト先へ急ぐ浩



▲「また、あんたかい!?」

一冊のノート

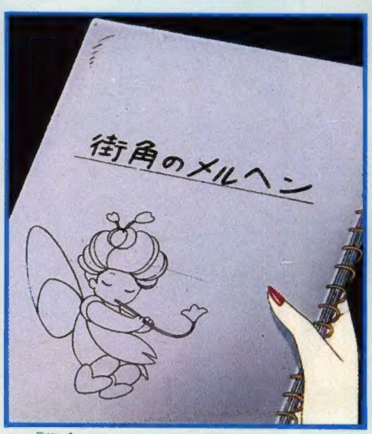
翌日も、浩は西口の地下道を走った。自作の絵本出版のための資金作りに、アルバイトをしているのだ。浩の足音が地下道の壁に響く。そして――またも衝突。あわてて走り去る浩の後に、一冊のノート。



▲再びぶつかるふたり



◀ノートにひきつけられて…

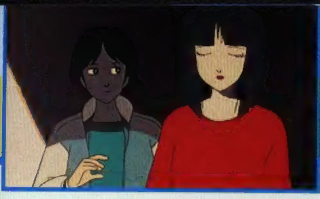


▲『街角のメルヘン』ノート





▲浩を見送ってノートを手にする



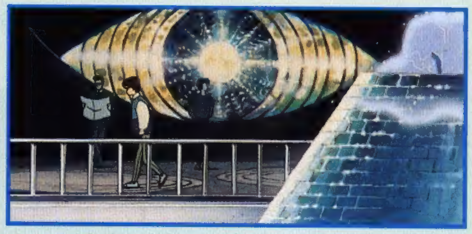





▲あせりと絶望



▲なかなか見つからない



▲ノートを捜して歩いてゆく浩

失くしたノート

浩は大切なノートを失くしたことに気づく。地下道のコンクリートの上を、ゴミの吹きだまりの中を、浩は"街角のメルヘン"を捜して歩いた。そして、また出会った少女——裕子。彼女の手に、浩のノートが…！



▲「あ、昨日の…」「おとといも！」



▲裕子が浩の前に立った



▲裕子はそしらぬふり



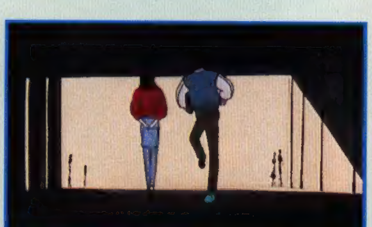
▲「あっ!?　あーッ!!」



▲その手に浩のノートが…！



▲地下道の出口へむかおうとする裕子



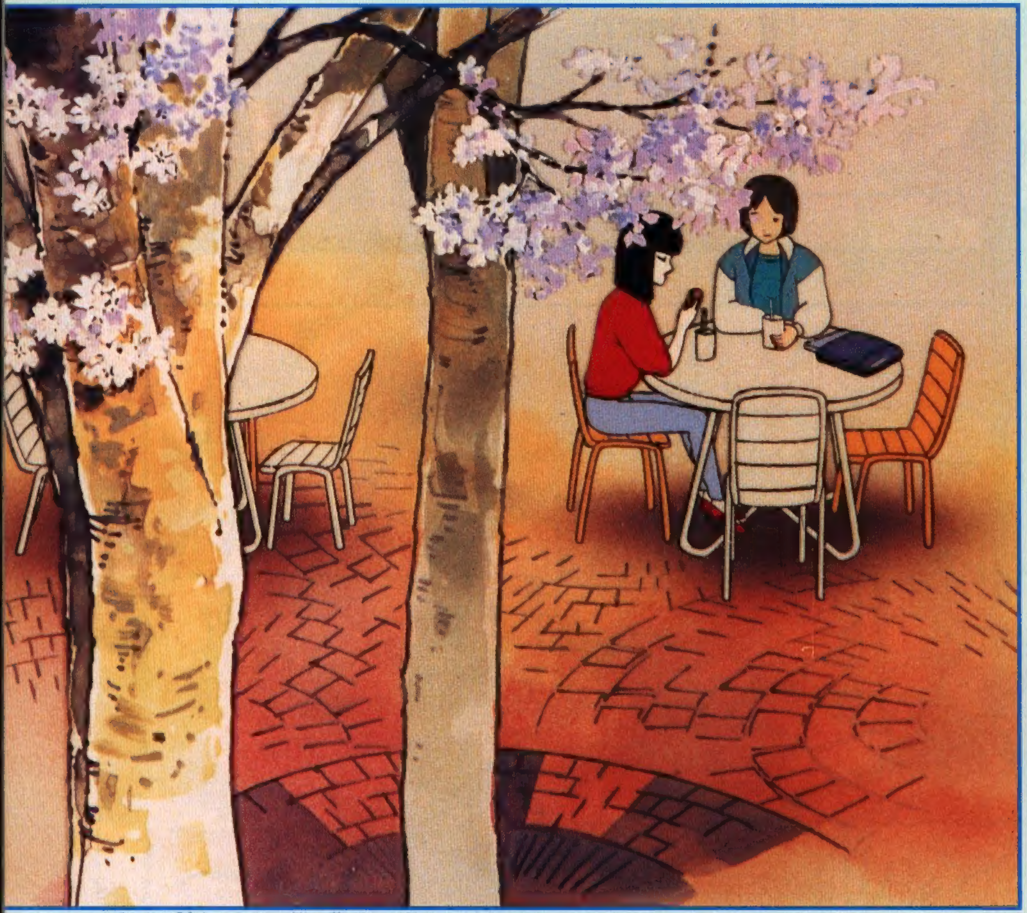
▲「オレのノートだ!!」



◀ハンバーガーショップを指す裕子



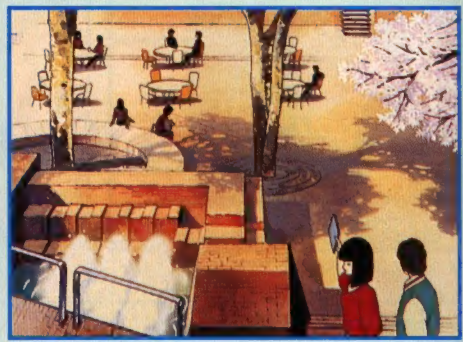




▲初めて話すふたり。桜の花びらが舞う



▲新宿中央公園――春



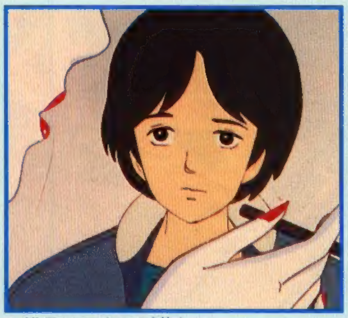
▲陽ざしも暖い



▲裕子に見とれてしまう浩。チロリと見返す裕子



▲ガラスを流れる水のむこうにふたり



▲裕子の口もとが美しい



▲霞の空へ煙が昇る

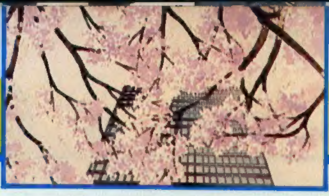
公園・花吹雪

桜の吹く中央公園。見上げれば霞の空と高層ビル。そして、そんな中でも春を歌う桜、花吹雪。浩のノートに書かれた言葉が、思いがけず裕子の口をつく。"この街には春がないっていうけれど…本当はあるんです"



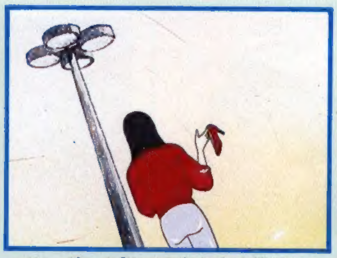
▲裕子はタバコを出して……



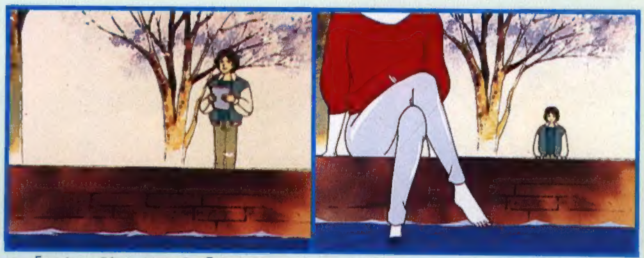





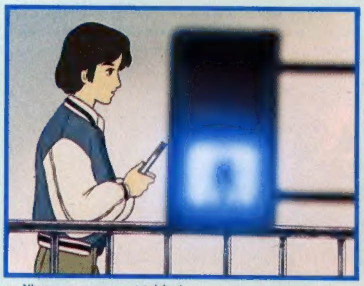

▲ゆっくりと階段を上る



▲サンダルを脱いで歩き出す裕子



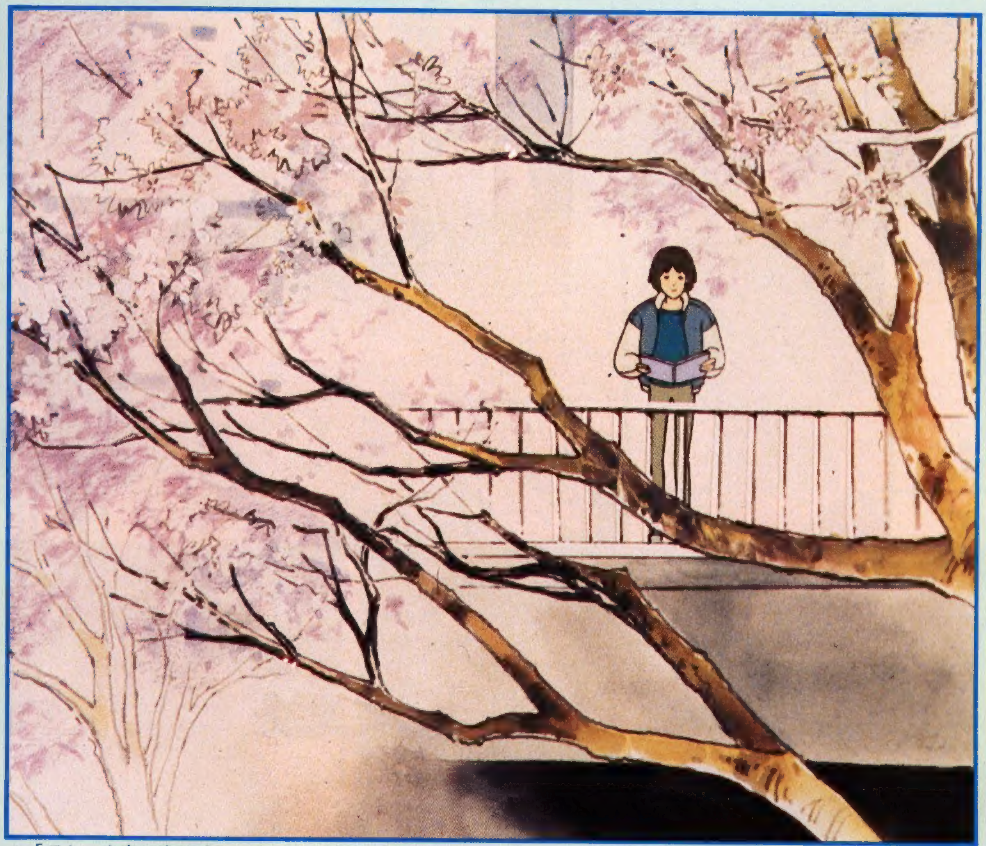
▲「これ、読んだの？」「うん」



▲浩のメルヘンは続く

春の国へ…………

浩の書きたいのは"街のメルヘン"人工の中の花、並木——自然物のない街。でも、浩は思っている。本当は"春"があるのだと。どこかに、コンクリートやアスファルトに追われた妖精が住んでいるのだと……。



▲「でも、本当の春は確かにあるんです」





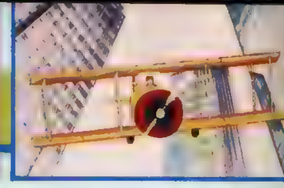
▲「さっ！　行こう」



▲浩は裕子を見つめている

◀不思議そうに顔を上げる裕子の耳に爆音





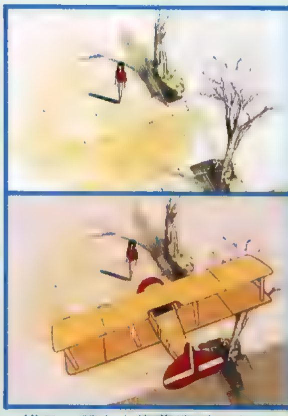
PART 2 花信

はなだより――

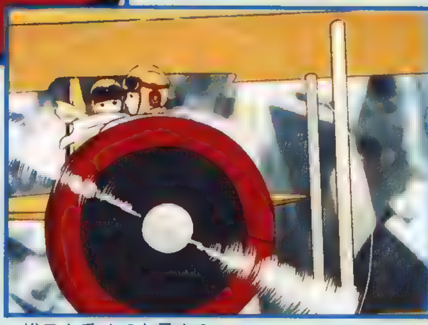
街に春を運んでくるのは、いったい誰なんだろう。どこかに花の香をまとった南からの列車？　砂ぼこりと紙くずを巻き上げて過ぎる風？　大都会のざわめきすら優しくかすませてしまう春の空…⁉　土手のつくしでもなく、山々の青い光の肌でもなく、草の萌える匂いでもなく…でも、やはり春は街を包んでくれる。春の生まれる国は、すぐそばに……⁉



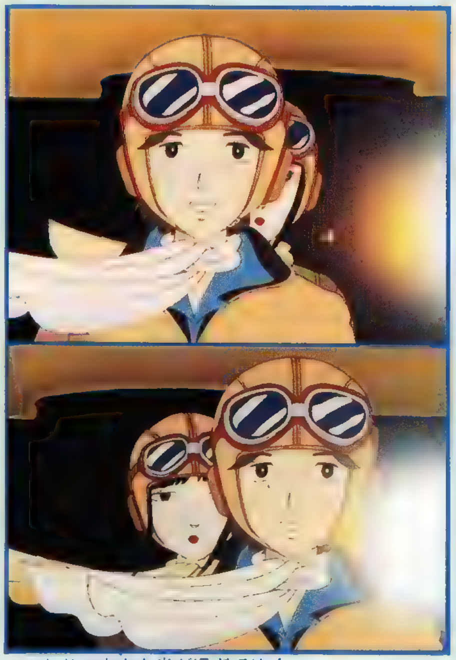
▲浩はパイロット・スタイル



▲裕子の頭上を複葉機がゆく



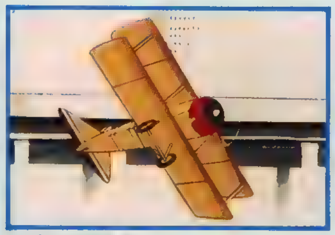
▲裕子を乗せて上昇する



▲ふたりの左右を光が過ぎてゆく



▲光と闇――地下道へ！



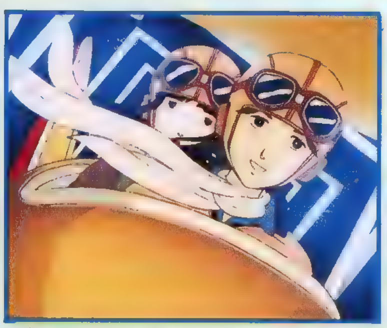
▲ビルの間を飛ぶ



▲新宿上空

夢への飛行……

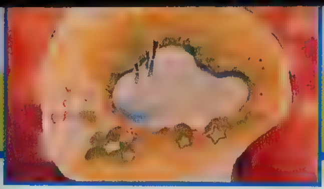
小さな複葉機に乗って、妖精たちの住む国へ行ってみよう。そこは、昔、大地を駆け、空気の中を舞い、山々の峰から峰へと飛んでいた妖精たちの棲み家。さあ、春の国へと夢の空路を飛び立とう！



▲花の音がしてくる



▲まわりが明るくなって

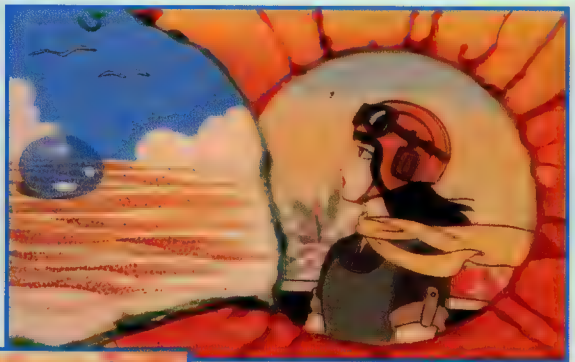




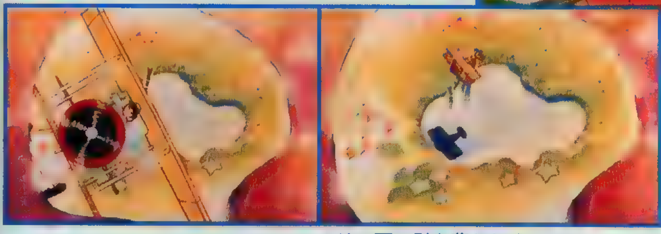








▲"春"を見る裕子



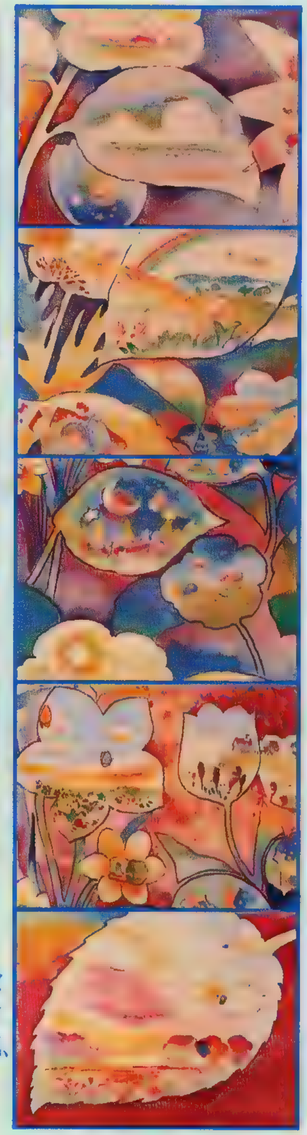
▲池の面に影を落として…



▲花の香が舞い上る

花と風と妖精と

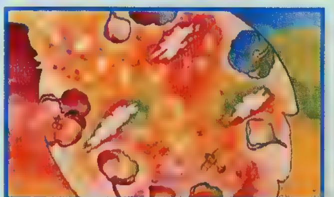
光が春を生み、春が草木を育て、やがて花が咲き、妖精たちは春を歌う。どこまでも、柔らかい光に満ちた空と、花びらのベッドをゆする風、空と地上を結びつける虹のアーチ。誰もが知っていた。本当の春！



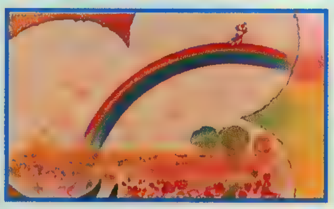
▲花に宿る春



▲不思議そうにあたりを見る裕子



▲花の中をゆく複葉機



▲妖精がアーチをすべる

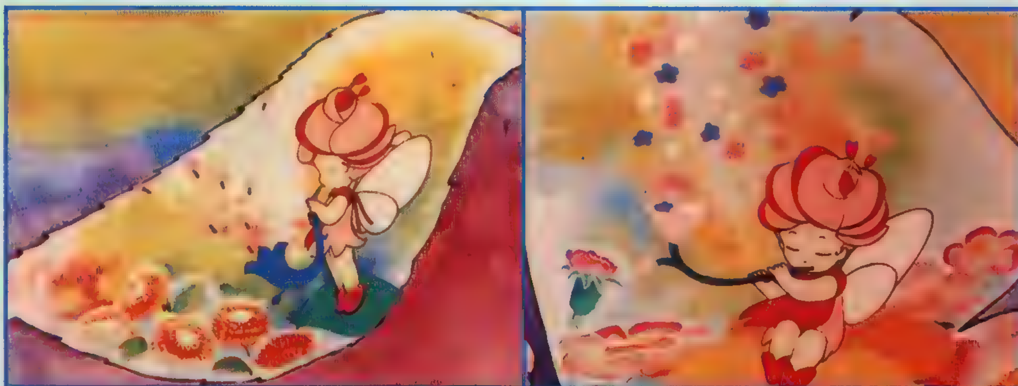


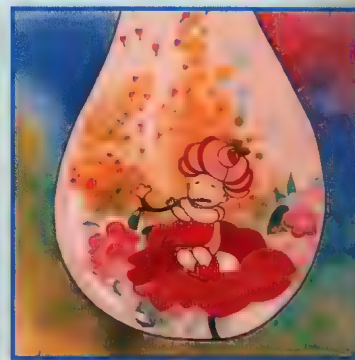
虹のアーチをくぐって七色に染まる▶

Märchen of Animation Film

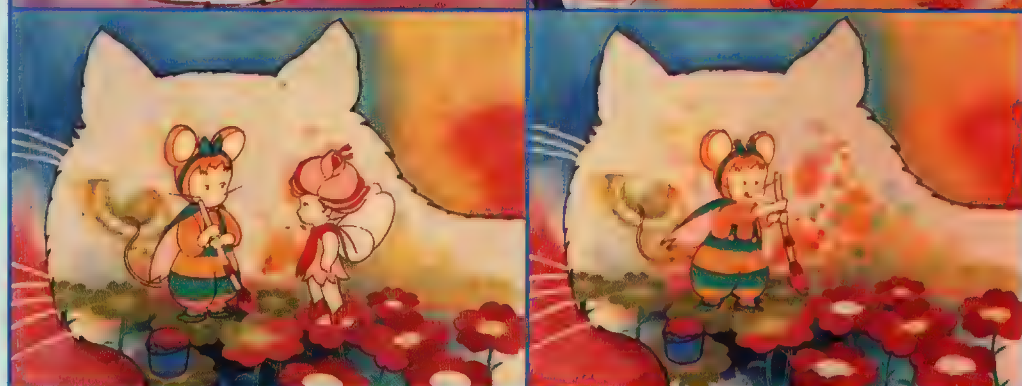








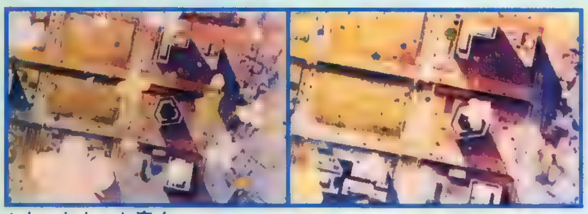
▲花笛を吹く妖精



▲「この上は、どんな所なの？」「そりゃもうひどい所」

春を運んで……

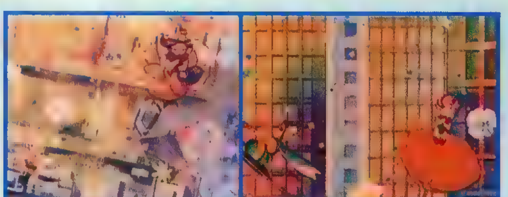
妖精が春の曲をかなでる。曲にあわせて、ネズミは花に色を塗る。でも、この上は、本当の春を忘れてしまった街。固いコンクリートが、柔らかくて温い土を閉じこめた世界。妖精は悲しげに、上に目をやる……。



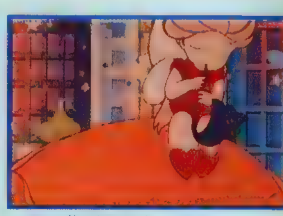
▲もっともっと高く



▲ビルの街に、妖精は春を運ぶ



▲街を春が包んで…

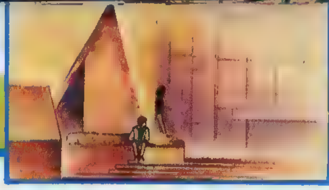


▲星や花が街にあふれる



◀すべてが春の色に塗られた



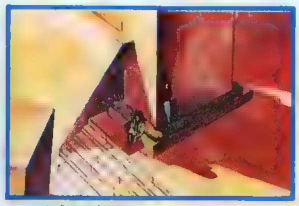




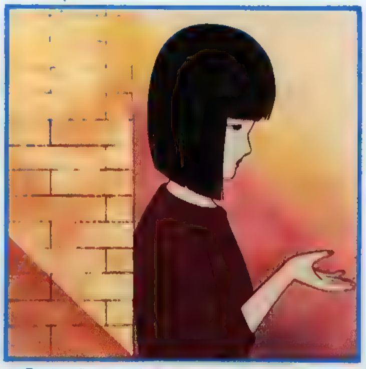

▲ふたりに花びらが散る



▲街の地下へ



▲「そうかな……」



▲「バカだね。春を人に分けようなんて」



▲立ち上る裕子

ビル街の春風

裕子は思う。この街の地下には、春の国なんてない。そこには、駐車場、地下鉄、その周囲を縦横にはうパイプやダクト——でも、それでも…。裕子と浩は、初めて名のりあった。ビルの街の春の一日。





▲ふたりは、お互いの名を知る



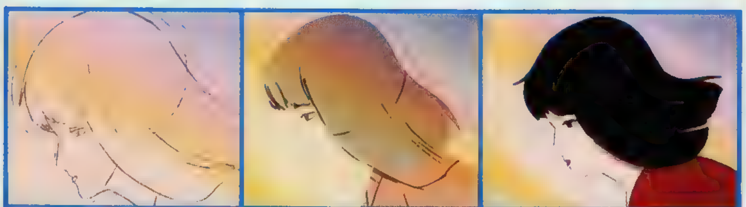
▲「私、裕子」



▲走り去る裕子



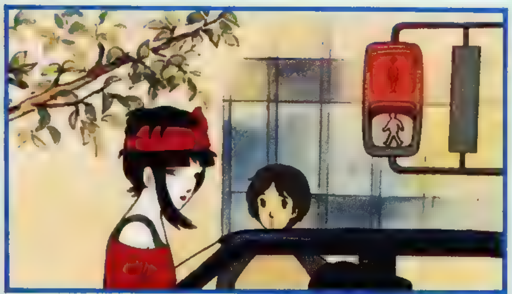
▲ノートに裕子の顔



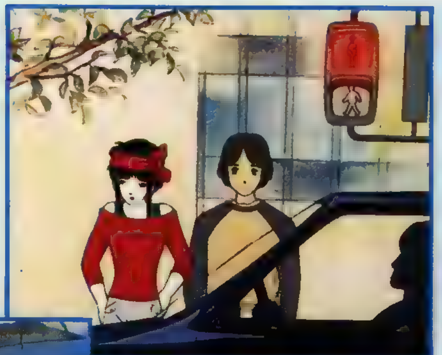
▲浩の目に映った裕子のイメージ



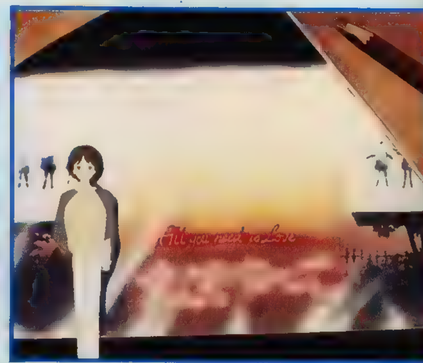




▲浩はオロオロ



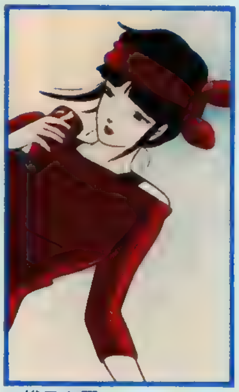
▲赤信号で渡ってしまう裕子



▲浩は裕子を待つ







▲裕子も躍る

春から夏へ……

名前以外は、裕子のことはわからない。しかし、浩にとっては、それで十分だった。季節は、春から夏へとむかい、ふたりは、同じ季節を生き、街は、昨日と変わらぬ明日を迎える。そして……。



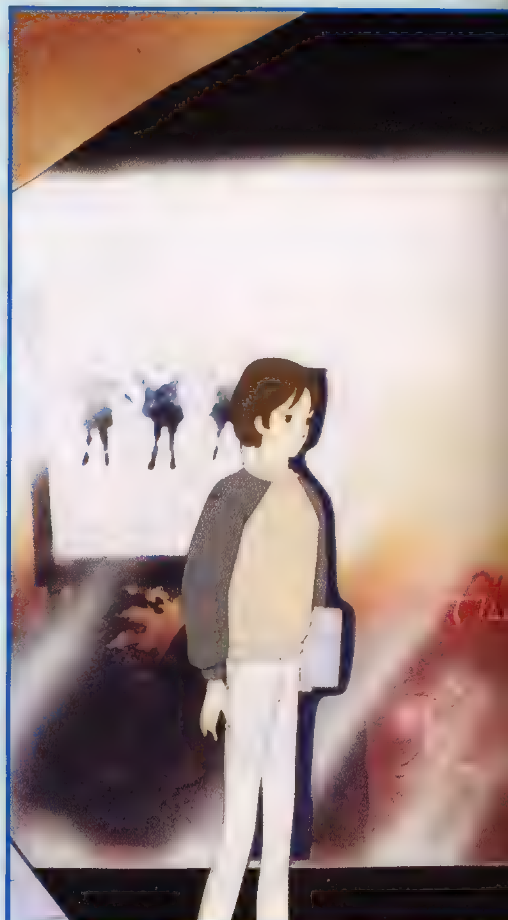
▲平然としている裕子

▼躍るローラーズ

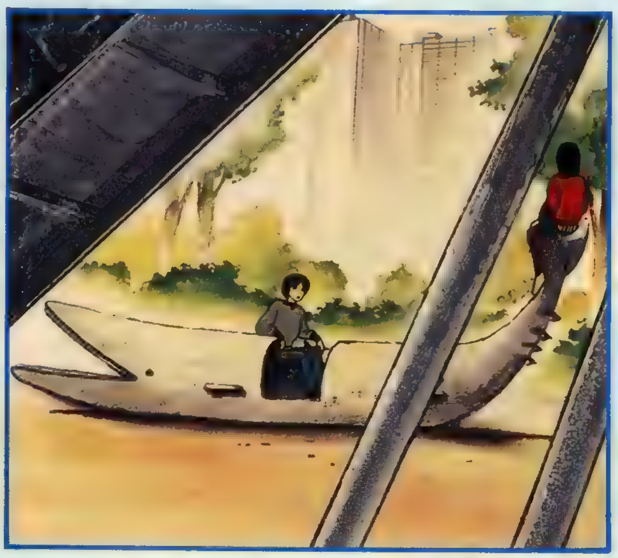




▲裕子キラキラ



▲浩と裕子の奇妙なデート

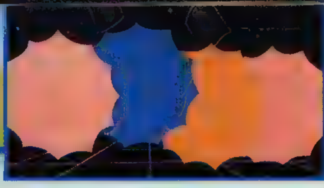


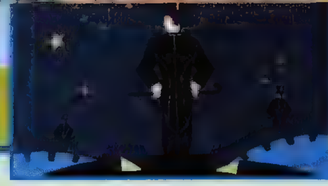
▲何か話しているふたり

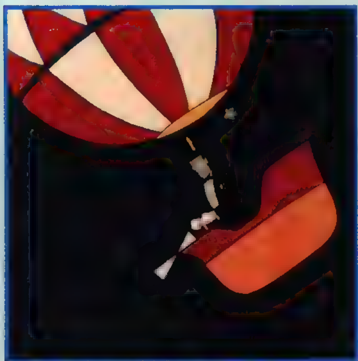




◀クジラのベンチ





▲高い所の好きな博士



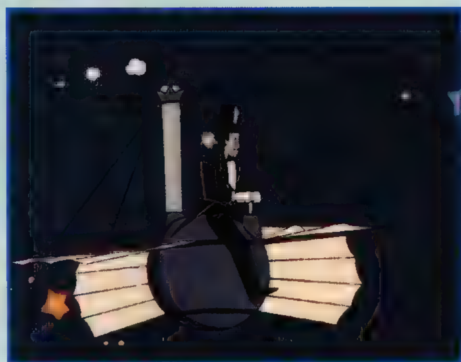
▲久々の星空に目を上げる

PART 3 星座

せいざ——
星々からの便りは、夏の夜空から降る淡い光。高層ビルの間から、わずかにのぞく四角い空に、さまざまなメッセージ。いつもは、肌にからみつくような都会の空気さえ、夏の夜空の星は、涼風に変えてくれる。はるか高みへの憧れは、こんな時に生まれるのかもしれない。手をのばして、瞳をこらせば、そこは星たちのパーティ会場。

星空への憧れ

浩のメルヘンは、夏の夜空へ。高いビルの上に住む博士たちは、なおも高みを目指して飛ぶ。気球が、風に乗る船が、空中をゆく自転車が、星の輝きにむけて出発する。でも、本当に星空へ行きたいと思ったのは…。



▲研究の成果の飛行機械



▲翼が夜空にあざやか

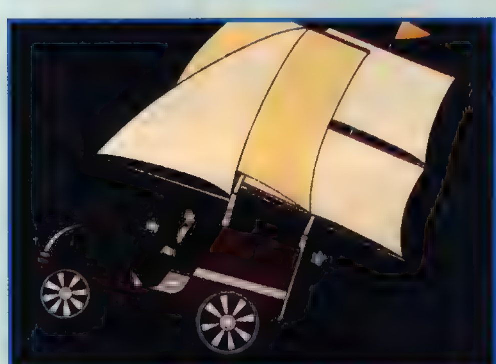


▲高く、高く…





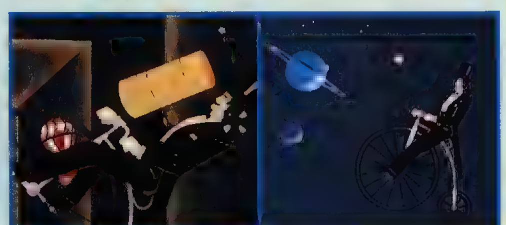
▲浩は、物語を続ける



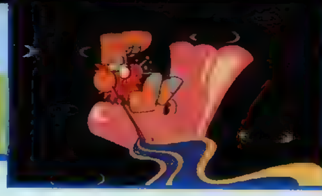
▲帆に風を受けて



▲ビルの間を上昇してゆく博士たち

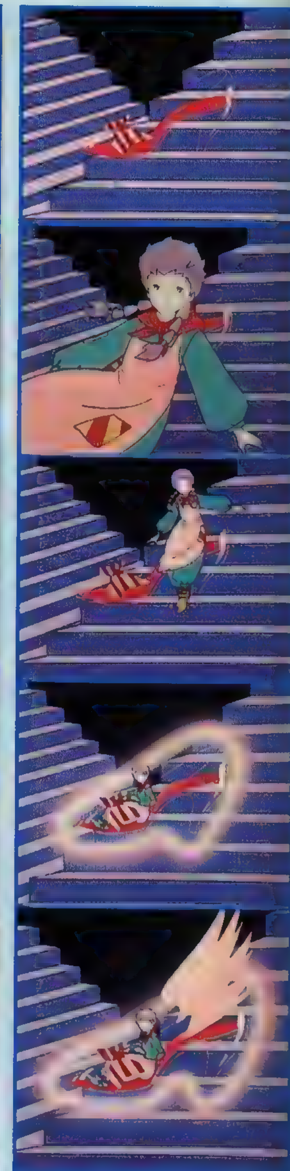


▲さまざまな機械







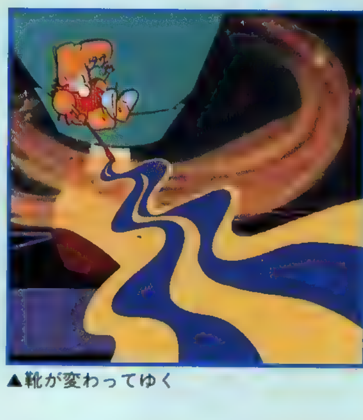


▲靴みがきの少女は、靴の精といっしょに夜空へ飛び立つ。ガラスのハイヒールが翼を広げて…

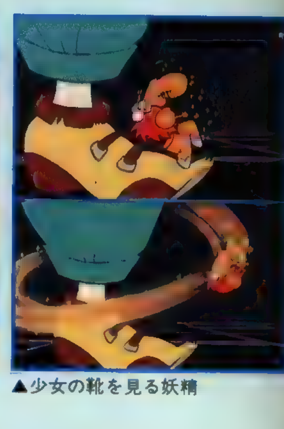


夏空夜間飛行

ビルとビルの間――うす闇の中に、靴みがきの少女がひとり。少女は靴の精とともに、空へと飛ぶ。少女のみがいた靴は、小さな飛行機。白い翼が濃紺の夜空にはばたき、街はすぐに目の下。



▲靴が変わってゆく



▲少女の靴を見る妖精

◀妖精は少女に魔法をかける

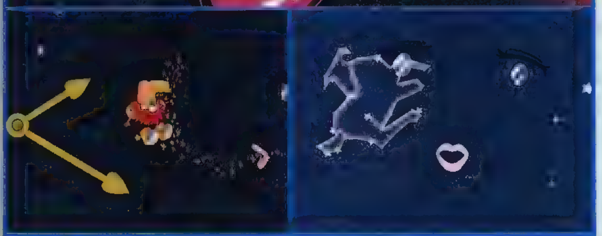








▲ガラスの靴は、どんどん昇る



▲星をめぐるひと時

星をめぐる道

星々は少女を歓迎する。ヤギ座、水ガメ座、魚座――星をめぐり、時をめぐり、少女の靴は飛ぶ。ミルキーウェイはコースター、星空はダンスパーティの会場。少女は躍り、星は歌う。めくるめく光の歌。



▲ミルキー・ウェイをすべる





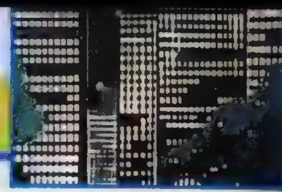


▲星座が少女を歓迎する



◀星座と博士たち





夏のおわりの

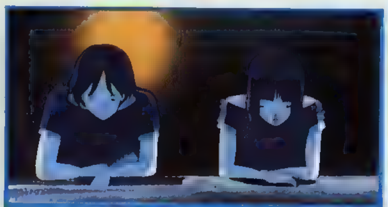
裕子は、ふと自分のサンダルを見る。でも…、"サンダルに翼はない"。そこへ、チンピラふたり。浩は、全身でふたりに立ちむかう。衝撃、口の中に血の味……。チンピラから逃れた浩の体は、ひどく熱い。



▲ふたりは夜空を見ている



▲「サンダルに翼はない」



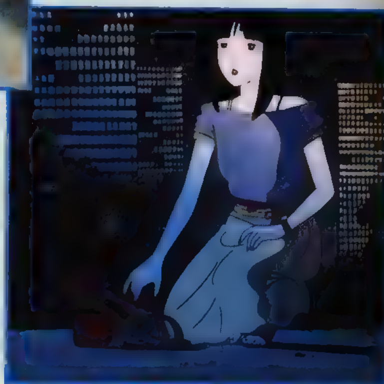
▲逃げきって、息をはずませる



▲闘う浩



▲チンピラふたり



▲天気うらないのサンダル



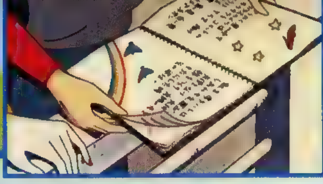


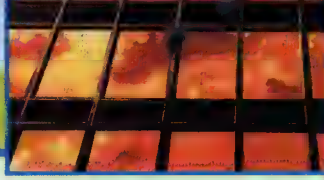
▲「12時のシンデレラ…、みじめ」



▲「やったね」「うん」

◀「シンデレラは、いつだってシンデレラさ」



PART 4 秋風

あきかぜ──

あのギラギラとした太陽の光がうせて、都会の空気もわずかに透んでくるひと時。赤とオレンジと紫の夕焼けに、点々と灯を飾ったビルがシルエットとなって浮かぶ。どこかで見たような、なぜか懐しいような──そんな景色、そんな時間。いつもは、色あせて見える地下道の壁さえ、浸みこんで来る茜色を映して……。今──この街は秋を迎える。


▲木々の葉は紅を混じえて…


▲ふたりは、いつもの場所へ


▲秋の花の咲く公園


▲走っていくふたり

▼地下道をぬけていくふたり



涼風の吹く頃

浩の絵本が、いよいよ出せる。街を吹きぬける風の中で、ふたりの頬が輝く。春に出会って、同じ夏を過ごし、今は秋の入口。青々とした桜の葉が、今は紅をまといはじめている。浩は、裕子に新しい話を語る。



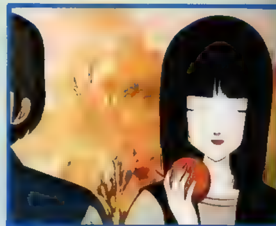




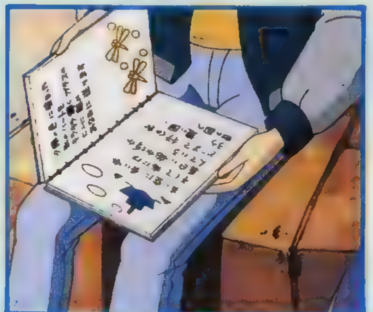
▲「けっこう楽しみにしてるんだけどな…」

夕焼けの都会

いつもの公園――浩は、ノートに書いた話をする。隣の裕子のナシをかむ音――サク。でも、どこか別の所に心を飛ばせている裕子に、浩は言う。"目を閉じて、心を楽にして"ふたりは、お話の中へ……。



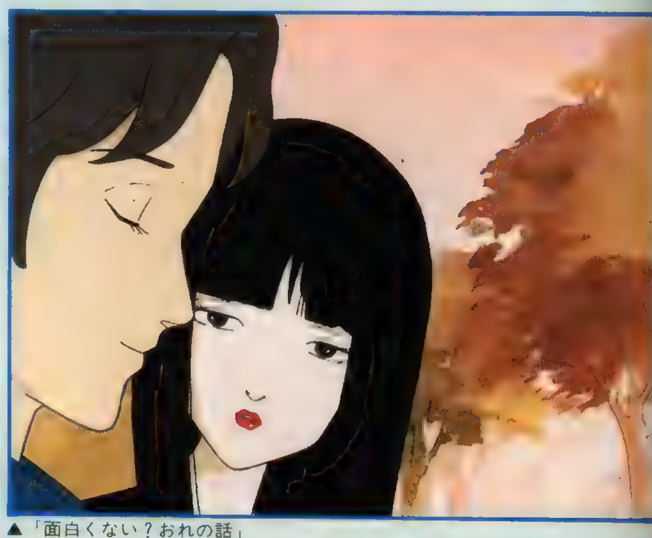






▲ノートが閉じられる

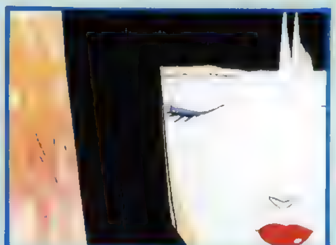
▲浩は、いつものように話を…



▲「面白くない？おれの話」



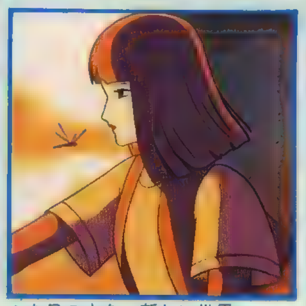
▲「あっ!?　いつか見たことある」



▲裕子は目を閉じる



▲手をひかれて走る裕子

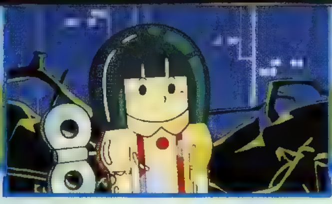


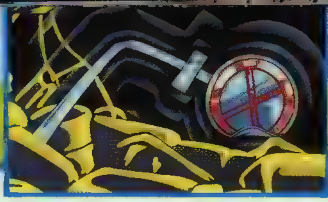
▲夕日の中を、新しい世界へ

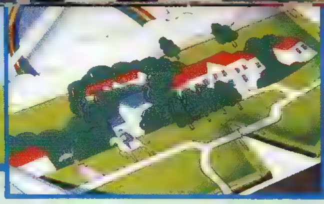


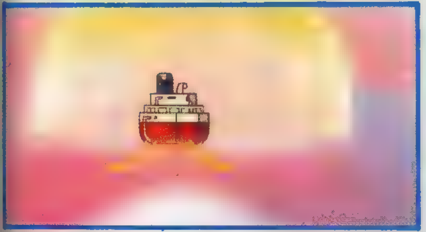
▲浩は走る







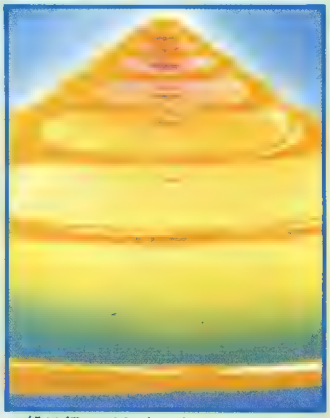




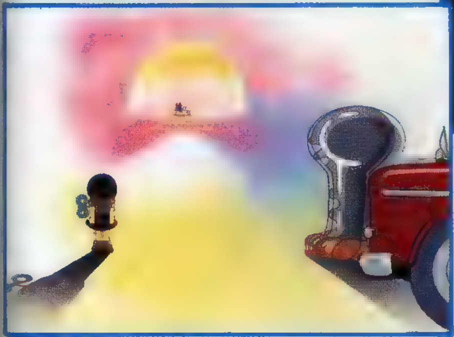
▲夕日の中に消えてゆく船



▲人形は涙を流す



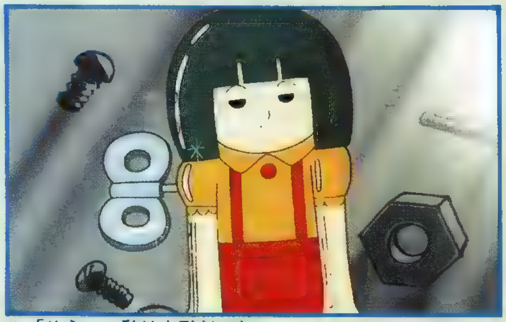
▲船は行ってしまった



▲遠くを見つめて人形は立ちつくす

こわれた人形

また、人形をおいて船が出てしまった。海のむこうに、夕日を浴びて消えてゆく船を見送って、人形はつぶやく。"私は、こわれた人形"。それは裕子だったのか、それとも…。人形は、闇の中で遠い国を夢見る。



▲「そう…、私は人形だった」



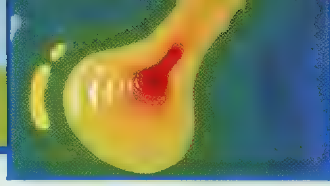
▲汚れたポスターを見つめる人形

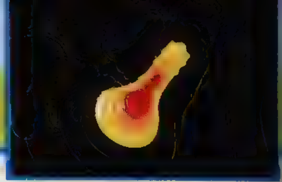


▲「いってみたい」「ここがそうさ」

人形は、どこか知らない所へ…▶

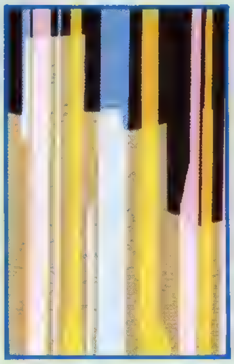








▲あのポスターもまた



▲光は空へ



▲電球、自転車のホイール



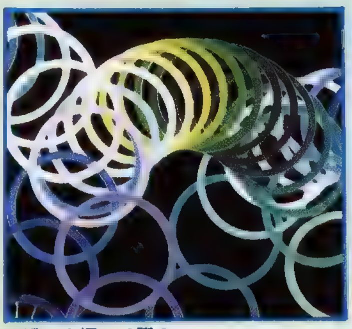
▲それぞれが光を放つ



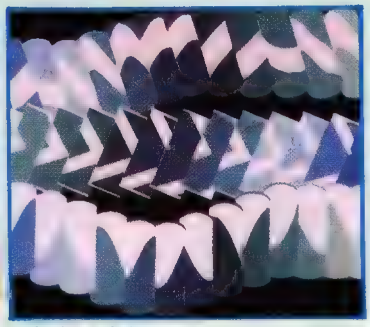
▲それぞれの輝きが、闇の中を彩る



▲空へ昇る光の束



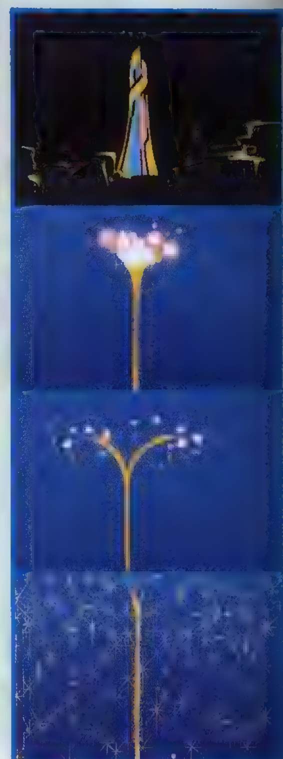
▲明るく輝いて躍る



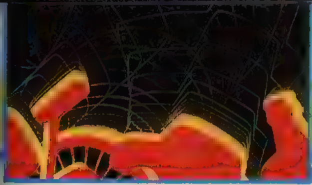
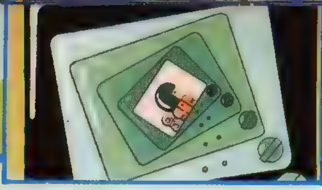
▲光が形を変え

夢に見た地へ

捨てられたテレビが、空カンが、光を放ちはじめる。ここが、人形の夢見た見知らぬ国、すてきな世界。オモチャのロボットが、そう言った。捨てられてしまっても、そこに集まった彼らは、みんな輝いていた。



▲空へ昇って開く光の華

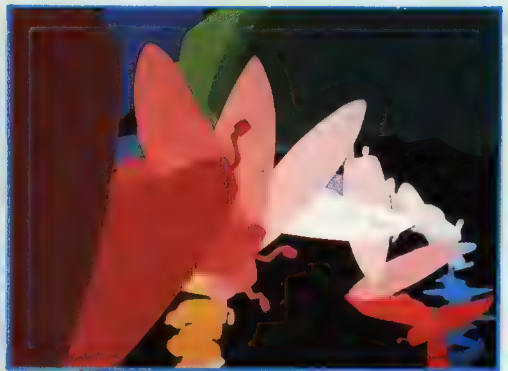


PART 5 夕暮

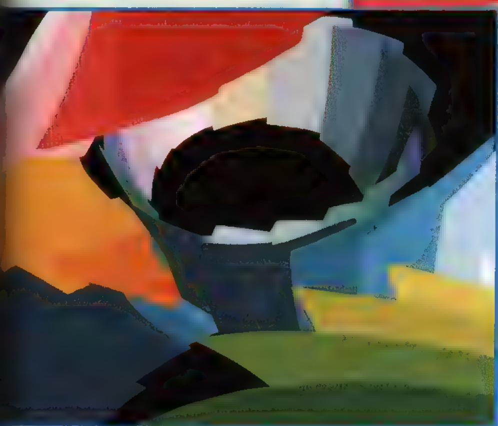
ゆうぐれ――

紅と紫と――やがて、それらを包みこむ濃紺の中で、光は光と出会い、風と水を染め、静かに時の流れを演出する。忘れていた景色や、夕食を告げる母の声や、歌いながら帰る友だちの声を、知らず知らずに思い出している。心は躍り、光のトンネルを抜け、誰かの存在を心で知る。裕子と浩――ふたりは、その日、同じ夢の中にいた。


▲飛び立つオモチャたち

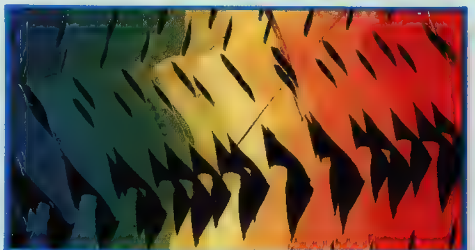

▲光が変化する


▲回転する光の渦

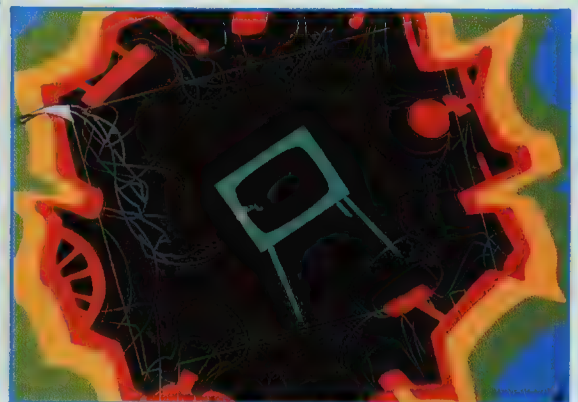

▲世界は次々に変化する

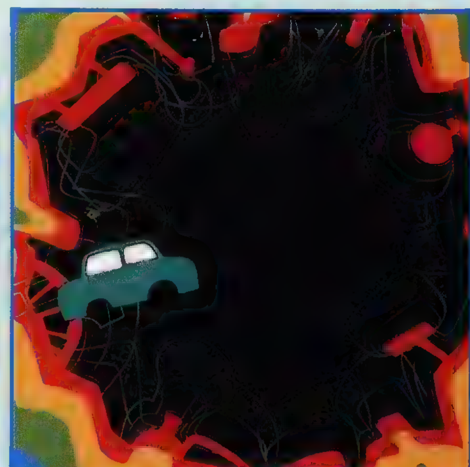
忘れていた歌

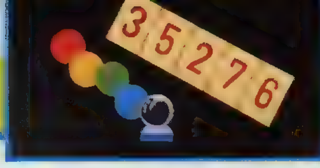
万華鏡、イルミネーション、光の渦。人形のまわりは、輝きはじめ、輝きはひとつになり、躍り、たわむれる。はずむ自転車のホイール、飛び立つオモチャたち、テレビが歌い、光の図形が広がる。

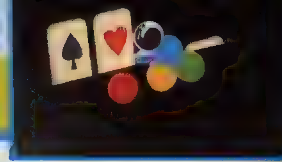

▲光に変わる空ビン


▲それぞれが躍る


▲中心にむかってゆくテレビ


▲オモチャの自動車が飛ぶ





踊る人形たち

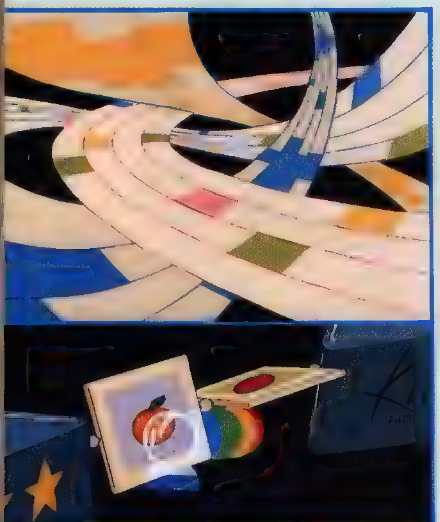
人形は少女に変わる。しなやかに、ロボットと踊る。めくるめく光、軽やかなダンスの輪。ここが、人形の夢見た国、すばらしい世界。少女の行手に現れる、さまざまな図形は、すべて光の輪に溶ける。



▲ロボットと少女は踊る



▲人形は少女に変わる



▲まるでオモチャ箱



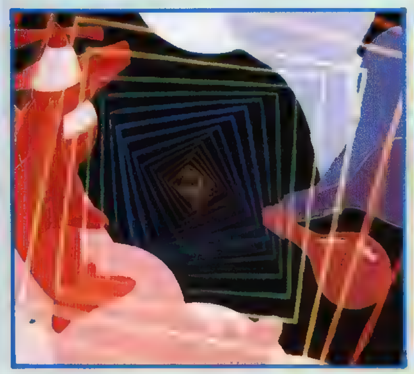
▲上へ昇ってゆく



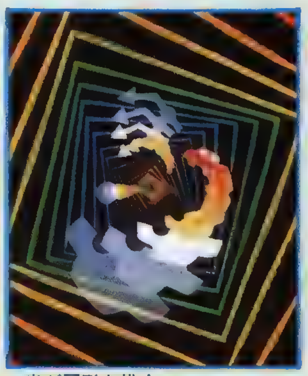
▲踊るロボット



▲人形とロボット



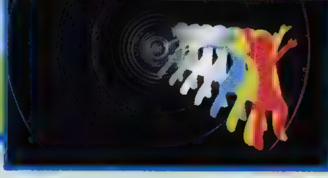
▲電球が回転

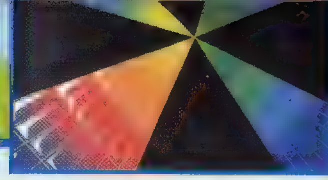


▲光が図形を描く



▲回るホイール







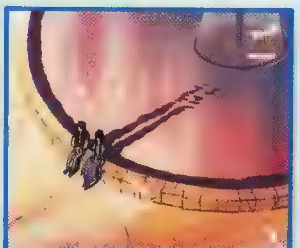
▲踊り続けるふたり

いっしょの夢

裕子は目を開ける。まだ、まぶたの裏に、光のダンスパーティが見えている。"見えた…、私にも" つぶやきのむこうに、微笑んでいる浩の顔。浩は、裕子にノートをさし出す。"いっしょの夢を見た記念"。



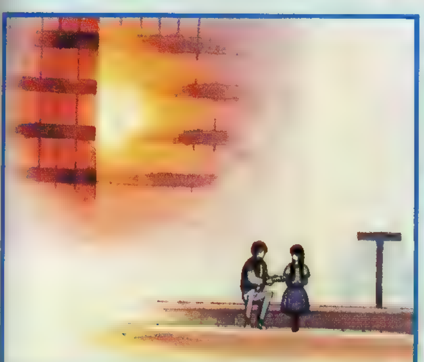
▲輝きがめぐる



▲公園——赤トンボが飛ぶ



▲さらに高く



▲「いっしょの夢を見た記念」



▲ノートをさし出す



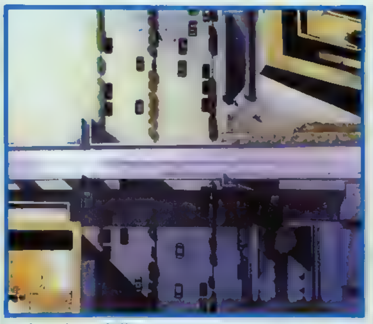
まだ夢の国が見えるようだ▶







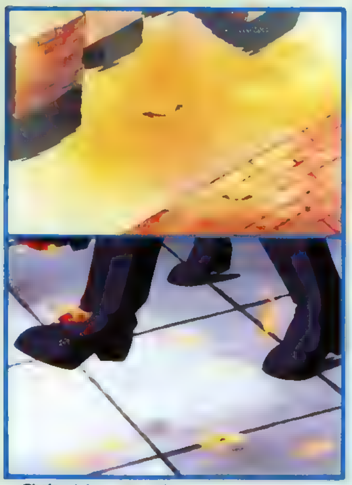
▲木々に枯葉が…



▲冬にむかう街



▲暴走族が裕子に話しかける



▲警察が走ってゆく

木枯し舞って

街路樹が葉を落とし、風の音が冷たく響く。ビル街に、忍びよる冬の気配。裸になった樹々が、ふるえる。今年の秋の最後の木の葉が、やせた梢にしがみついて、ノートを抱いた裕子を見下ろしている。



▲浩と裕子



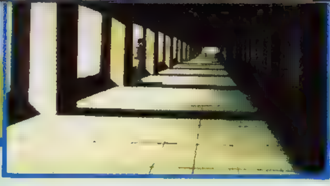


▲裕子の背に冬の風



▲地下道に消える裕子

◀浩のノートを抱いて



PART 6 木枯

こがらし――

北からの風は、ビル街を悲鳴を上げて駆けぬけ、わずかに木々を飾っていた枯葉を散らす。やがて、コンクリートの上を覆っていた木の葉も、どこかへ消えて街に冬が来る。人々は、背を丸め、コートの衿をあわせて、急ぎ足で通り過ぎ…。そんなある日、裕子が浩の前から消えた。浩には、この街が、決して来ない春を待つ、凍った街に見えた。

冬の始め…………

浩は、いつものように裕子を待っていた。地下街の、大きなポスターの前、いつものように、壁を背にした浩を裕子が見つける。手に抱いたノートに、ちょっと早くなった鼓動。その時、裕子を人影が囲む。

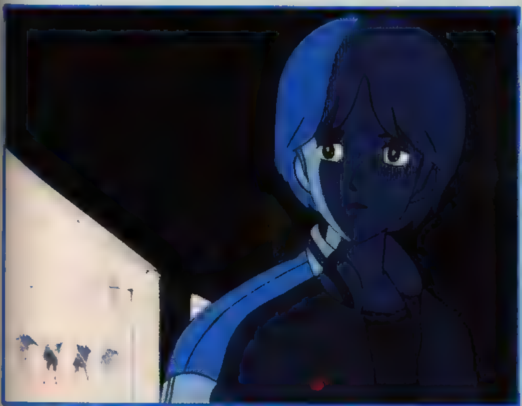

▲ポスターを背に立っている浩


▲浩を見つける

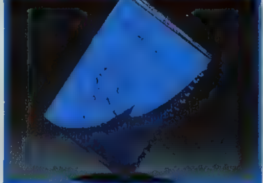

▲わずかに目をふせて



▲本をかかえ裕子がやってくる


▲おかしな気配に浩は振りむく

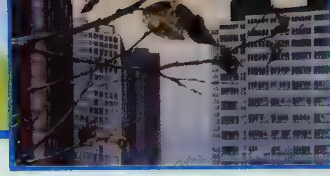

▲裕子を囲む警察


▲ノートが落ちる

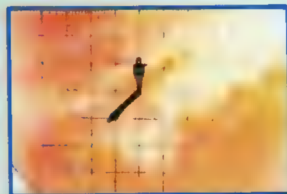

▲警察の肩ごしに浩を見る


▲ノートを拾う裕子

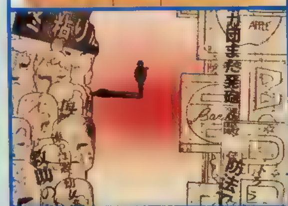

▲思わず微笑みが浮かび、ノートを抱く



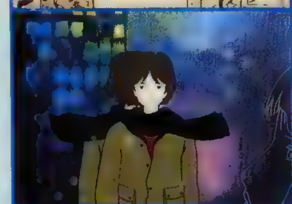


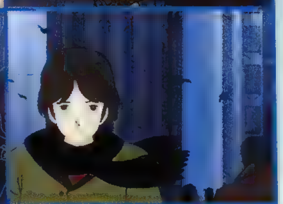




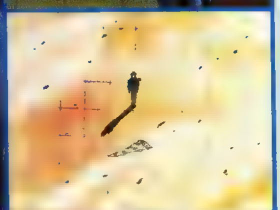


















▲浩は、裕子が連れ去られたことに気づかない

枯葉舞う日々

その日から、裕子は浩の前から消えた。浩は、冷たい風と雨の中、街を歩く。行く先は、浩にもわからない。木枯しに背を押されるように、裕子と会った地下道を、公園をゆく。浩の心も、古枯しの季節。

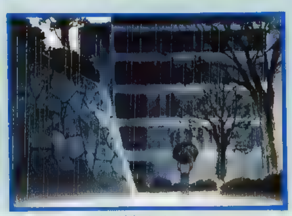


▲立ちつくす浩





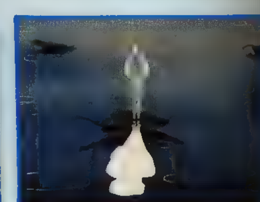
▲街は冬――浩の心の中にも木枯しの悲鳴



▲冷たい雨が浩を打つ



▲裕子を捜す浩



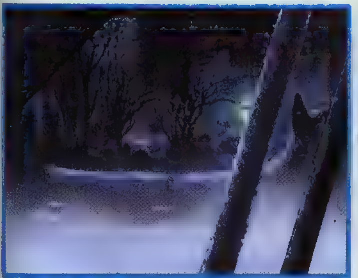
▲冬の雨の中







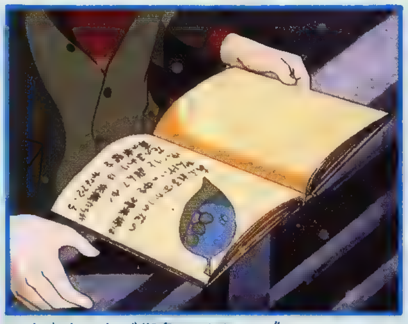




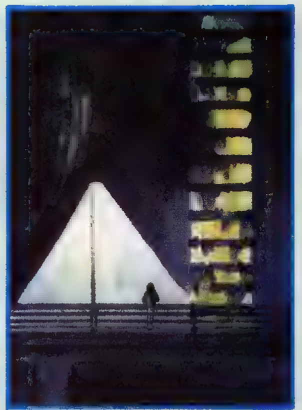
▲白くなる公園



▲公園に雪が降る



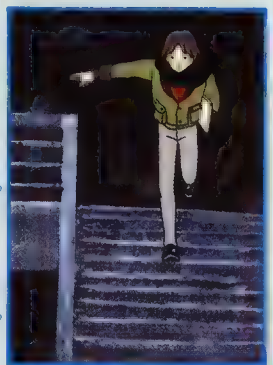
▲出来上った〝街角のメルヘン〞



▲夜の街を歩く浩

凍てついた街

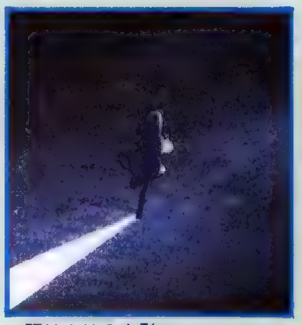
浩の本〝街角のメルヘン〞はできた。しかし、それを読んでくれるはずの裕子はいない。そういえば、浩は、裕子という名前しか知らない。それさえ、本当の名前なのかどうか……。浩の心は、冬の寒さに凍てつく。



▲駆け出す浩



▲ハッとして立ちどまり



▲駆けぬける人影



▲浩の前にコウモリが…



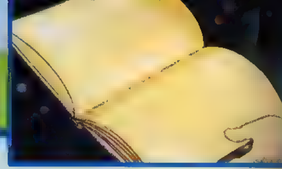
▲立ちどまる





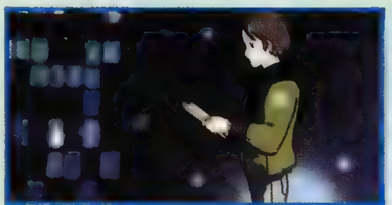
▲身を乗り出して見る浩







▲人形をひきずって歩く少女。悲しげな人形



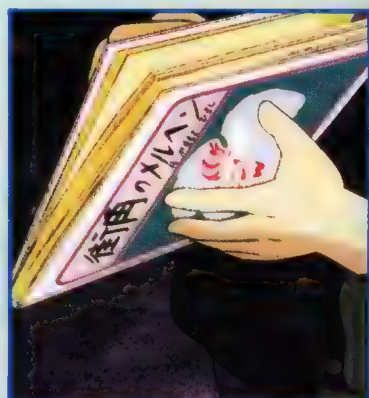
▲絵本を見る浩



▲花ビラのような雪の中

雪の中の人形

風が絵本のページをめくり、雪が色彩をうめつくしてゆく。暗くたれこめた雪雲のように、ビルとビルの間にも、陽光を拒絶したような闇。その中を、走りぬけていく人影——思わず駆け出す浩に、雪が吹きつける。



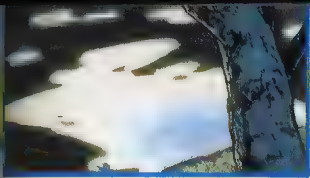
▲本を閉じる

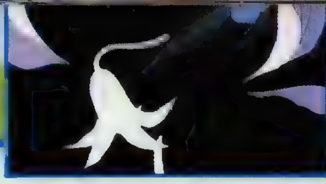


▲凍ってゆくビル街——そして



◀雪の中に寂しそうな人形——ひとり






PART 7 陽光

ようこう——

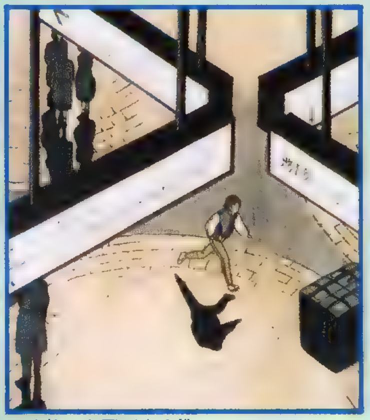
冬が去ると、陽の光は生きかえる。コンクリートとアスファルトで武装した街は、ちょっと場違いな春の陽差しの中で、それでもわずかに微笑む。走り出してみれば、頬を過ぎる風はやわらかく、足もとのコンクリートさえ、やさしくリズムを繰り返す。去年と同じ春の風、去年と同じ桜の花——再びこの街に、春が帰ってきた。

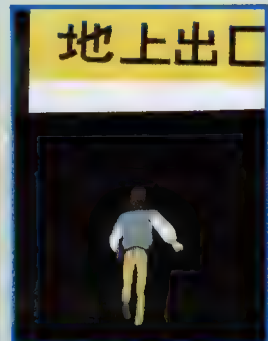
花ぐもりの街

雨が上がると、陽の光の中に、小さな陽炎。駅のコンコースに響く電車の音も、心なしか軽い。浩は走る。去年のあの日と同じように、改札口を抜け、西口地下道のうす闇の中に入り、そして再び陽炎の中に……。

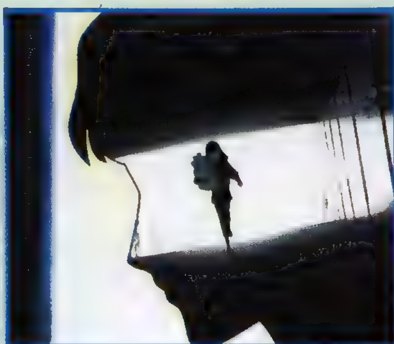

▲地下道を走る


▲去年のあの日と同じ道


▲改札口を飛び出す浩

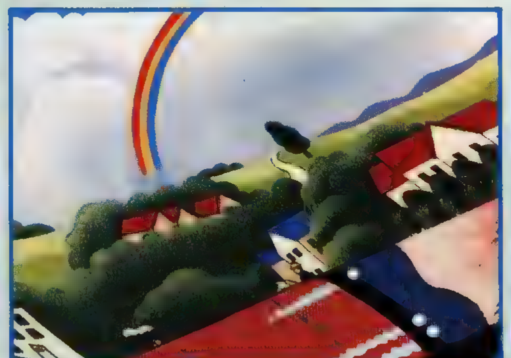


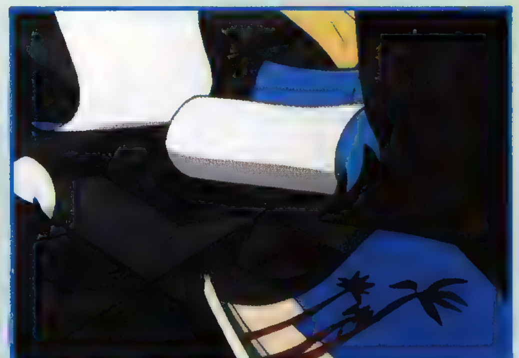
▲公園にむけて走る浩


▲走って来る裕子のイメージ


▲浩は"あの日"を思い出す


▲思い出にむけて走る


▲一枚一枚が目に浮かぶ


▲裕子の持っていたポスター







▲浩のノートを手に

陽の光浴びて

陽の光は、公園にも降り注ぎ、小さな花だんの花や、噴水の水面を温める。花に囲まれたベンチに、裕子は座っている。手にした〝街角のメルヘン〟――その1ページ1ページのむこうに、あの日の思い出。



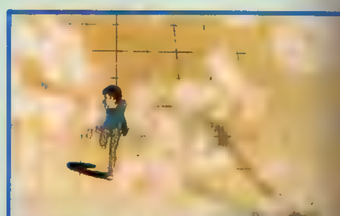
▲花のむこうに裕子

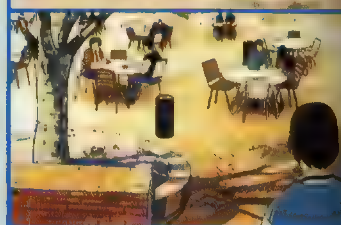


▲期待の目で公園を見る浩



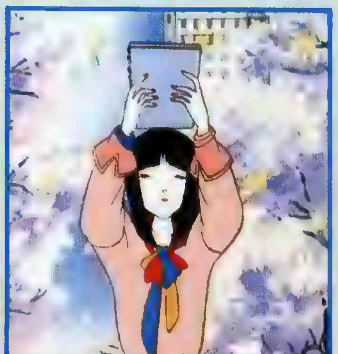
▲思い出す裕子





▲桜の下を浩が走る



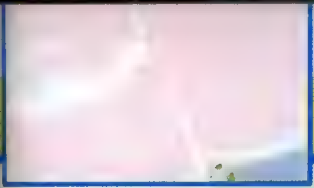


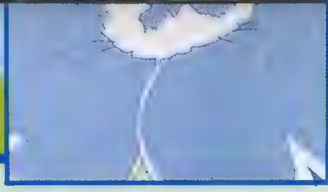
▲ノートを手に



▲「この街に春はないというけれど……」

◀春の妖精に変わる裕子



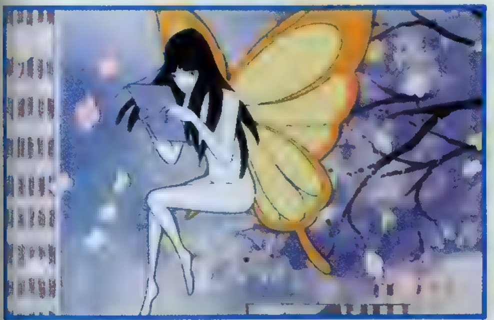






花詞……ひとつ

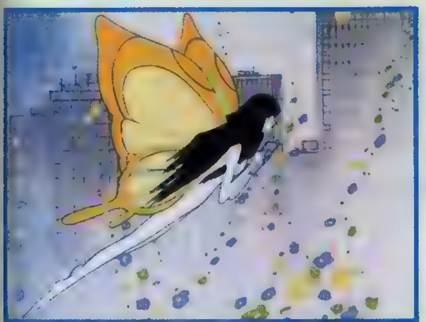
花びらの中を、裕子の心が翔ぶ。風に舞う花は何？　桜、コデマリ、カスミ草。羽を広げれば、そこは春の空、街角に生まれ出た小さな春の息吹の中。裕子の心は、浩のノートといっしょに本当の春を見る。



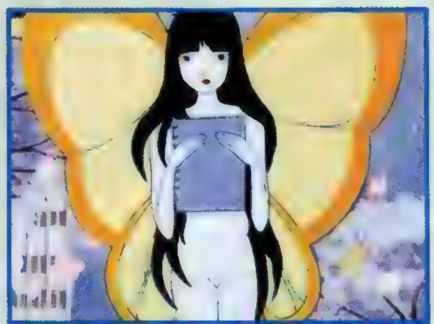
▲花が降り注ぐ



▲空へ舞う裕子



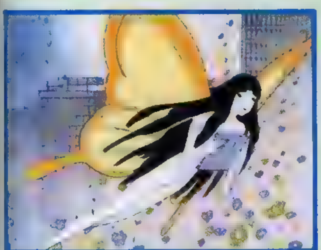
▲かすむビル街



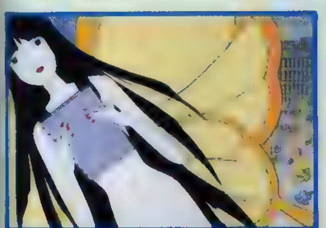
▲ノートを抱いて飛ぶ



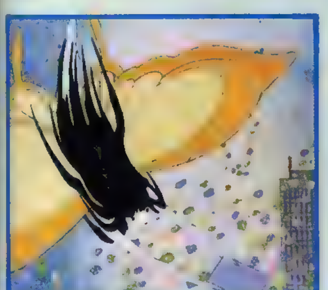
▲浩のノートに見入る裕子



▲さらに高く



▲うれしそうな裕子の表情



▲春の妖精は飛ぶ

青空と陽の光、そして花、花▶

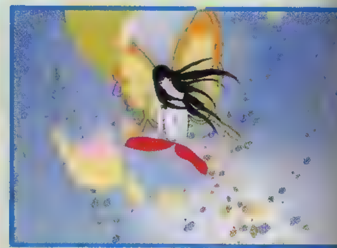




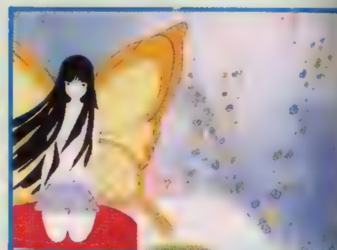




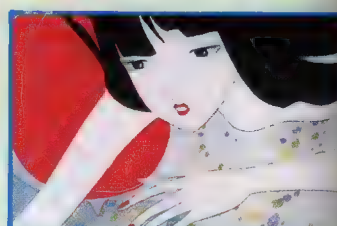
▲花の中の微笑み――裕子の心もまた春



▲花の上に休む裕子



▲風が髪をなでて…



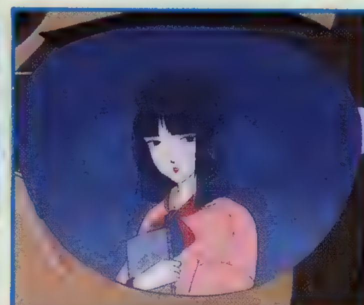
▲落ちていく裕子と花ビラ



▲思い出のクジラ

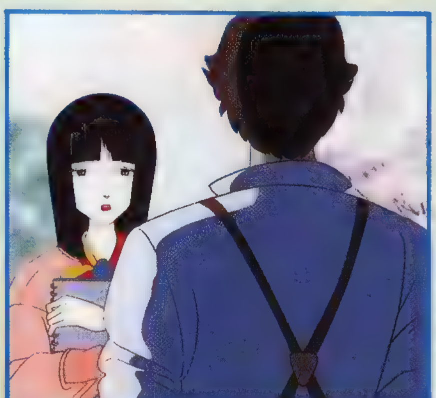


▲行きすぎる裕子



▲サングラスに映る裕子





◀▲首を横に…

新しい日へと……

春の旅は終わった。裕子の耳に、聞きなれた街のざわめき――クラクション、電車の車輪の音、人々の声。呼びかける昔なじみの誰かに背をむけて、裕子は歩きはじめる。胸にはしっかり抱いた浩のノート。



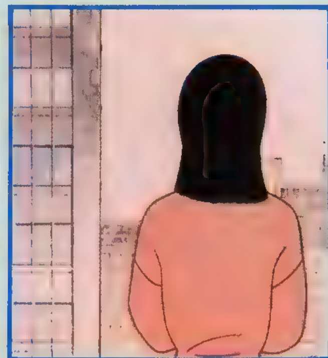
▲羽は燃えつき、裕子は落ちる



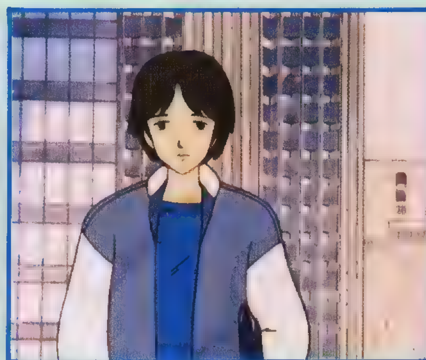




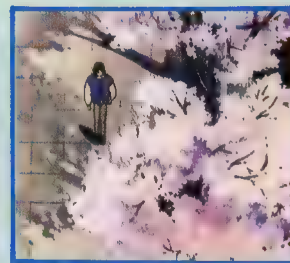
▲気づかずに歩きすぎる



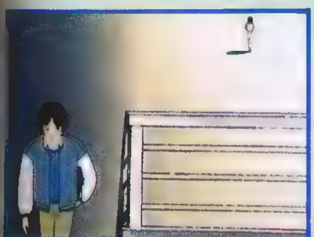
▲裕子は地下道へ



▲浩は公園へ



▲浩は春の街にひとり

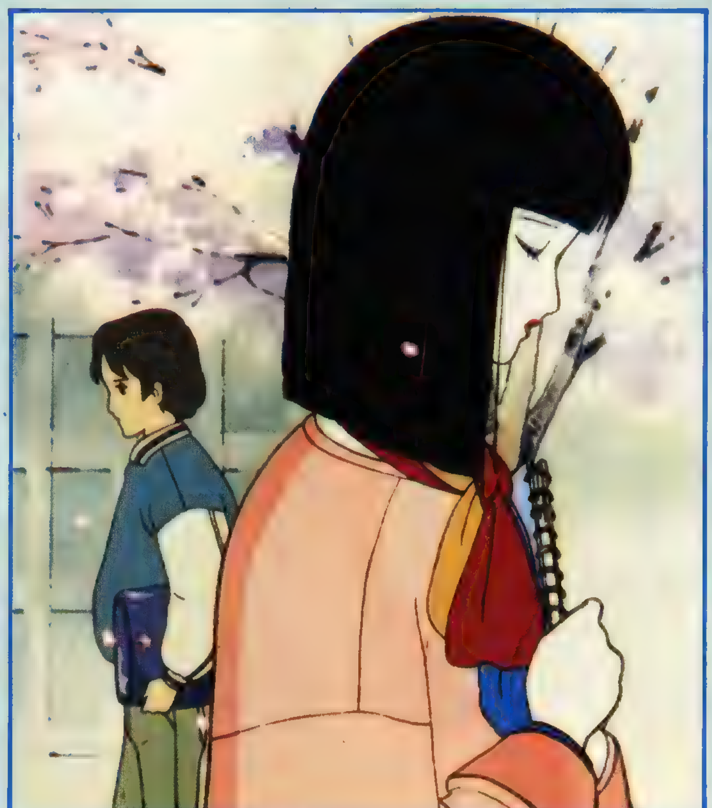




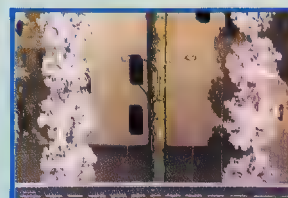
▲歩道橋を上る浩



▲裕子の後ろ姿



▲大通りのこちらとむこうを行き違うふたり





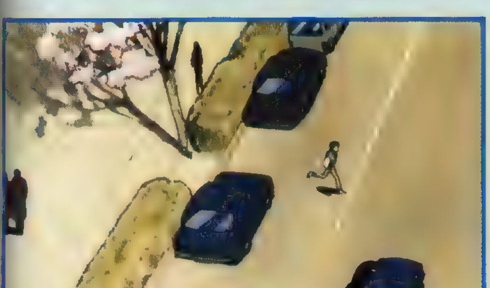
▲桜の咲く大通り



▲歩いてゆく浩



▲歩道橋から



▲再び、めぐり来た春のある日…

もう一度……春

あたりを見まわせば、そこは去年とは違った街。忘れてしまったものを思い出してみれば、そこは本当の春。もう一度、取り戻した何かを胸に、歩きはじめた裕子の背に、懐しい人の懐しい声。

走り出す浩——満面に笑みが浮かぶ▶



Staff's Märchen World

アニメスタッフの描くイメージ 街角に広がるメルヘンの世界！

★『街角のメルヘン』の作画スタッフに、それぞれのイメージをイラストにしてもらった。一枚のイラストの中に、スタッフの心の中のメルヘン・ワールドが生きている。スタッフからあなたへの、やさしいメッセージ……。



イラスト／天野嘉孝



風の中——とばされてゆく木の葉　舞い上る心　聞こえてくる忘れかけていた歌
このまま空へ飛び出せたら　木の葉といっしょに　どこか知らない国へ行けるかも
白々としたコンクリートの上を　また　冷たい風の吹きぬける音

イラスト／天野嘉孝



いつか時が過ぎ　心に負った傷がいえてきて
小さな子どもだった頃を　すなおに思い出せるようになる日——
その時には　今聞いている音も　少しは違っているかもしれない
その時には　今見ている風景も　鮮やかな色に変わるかもしれない
そんな日を　そんな時を　信じて……

イラスト／天野嘉孝



花…花　クルクル　クルクル　花車まわって　春の匂いどこからかただよう
花…花　白　赤　うす紫　私のゆく道を飾る　この道　どこへ続いているの!?
イラスト／田中平八郎



私の前を　駆けぬけていった女の子　あれは誰!?
小さな公園で　日暮れまで遊んだ子
赤い風船がほしくて　学校の桜の木にのぼった子
いつか　ふたりとも大人になって
忘れるともなしに　忘れてしまった子…

イラスト／桜井利行



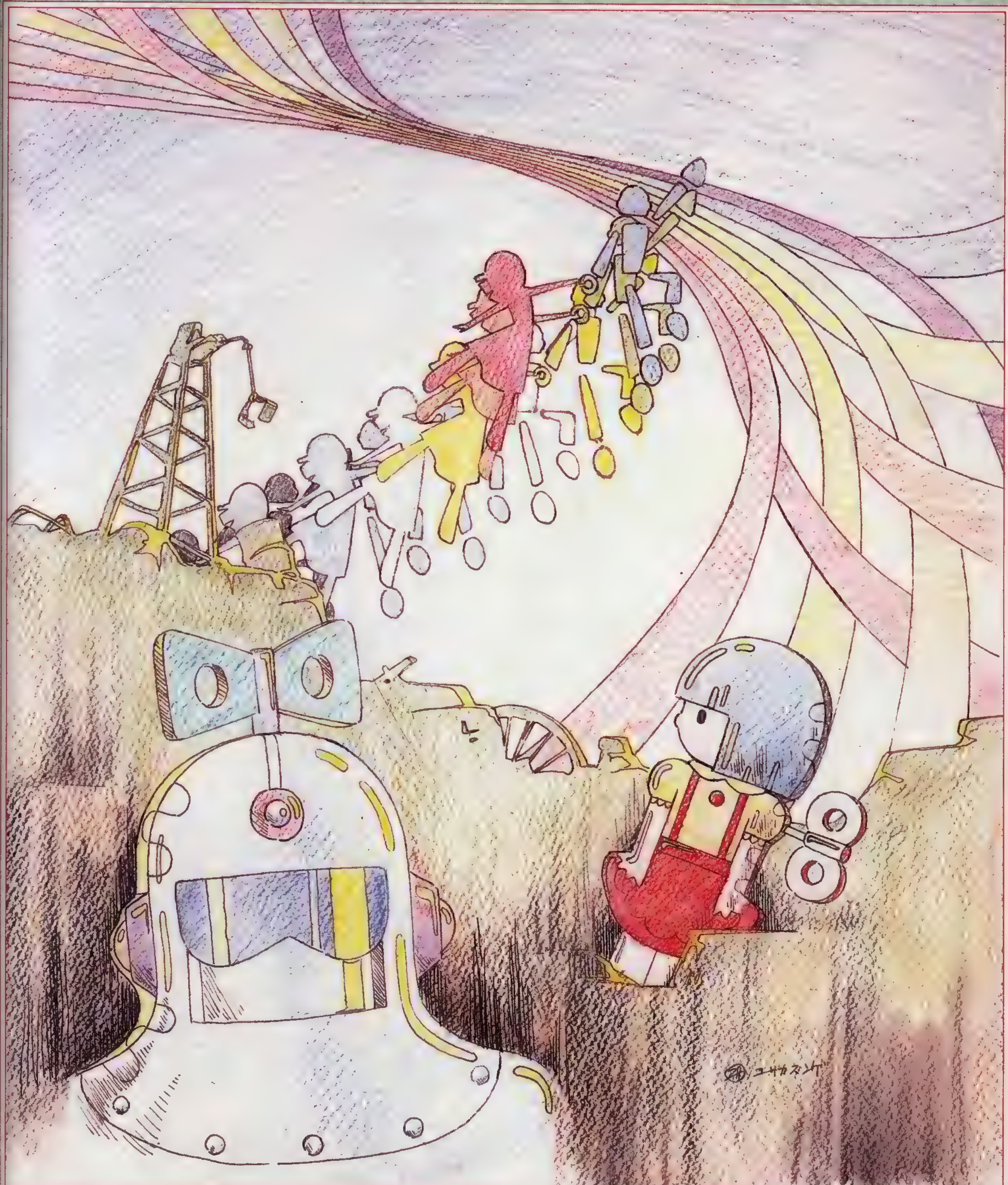
街にこの冬初めて雪が降りました
いつもはうす汚れたコンクリートの街も
今日は白い雪の衣裳をまとって
どんより曇った空の下で輝いています
でも――それも今日だけ
明日になれば雪は故郷の北の空へ還って
また灰色のコンクリートとアスファルトの街
霰　雪　北風
カラカラに乾いた街角の冬

イラスト／桜井利行



海へ出ようと　風を待っていました
わずかに西によった北の風　白い帆をふくらませてくれる優しい力
波の上をゆこうと　風を待っていました
北の国から南の島へと　私の小さな舟を出しましょう
でも　いくら待っても　風は来ません
もう　何年という時を　この海に突き出した岬で過ごしているのに

イラスト／桜井利行



心の翼広げれば　きみも飛べる　世界中のどこへでも　過ぎ去った時代　これから来る時代へも……！

イラスト／遊佐和重





走り出しなさい　今この地から　走り出しなさい　顔を上げて　朝の光のまぶしさをきみにあげるから

イラスト／斉藤真理子



小さなオレンジ色のハンカチで　額の汗をふいて　ふと見上げた空に入道雲　今日の気持ちはトロピカル
イラスト／松本小百合

いつかこの道て誰かに出会う　きっと夕焼け空の下……
いつかこの道を誰かと歩く　きっと陽の光のまぶしい春の午後　そして　日々はふたりの上を過ぎてゆき　ハッピーエンド
イラスト／天野 嘉孝



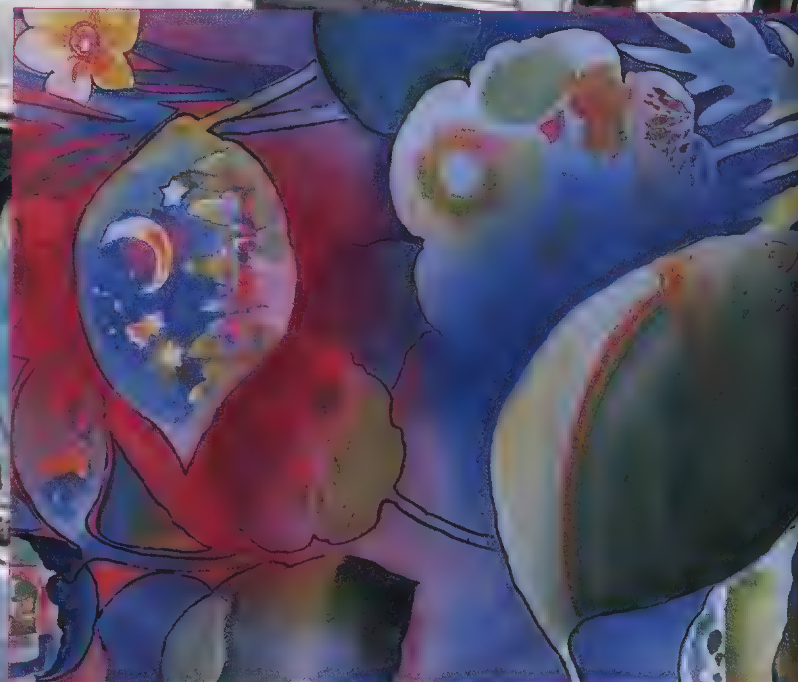
名場面コラージュ

★メルヘンと現実、夢の国と都会——それぞれのシーンを一枚の絵にしてみよう！

[illegible]新宿という大[illegible]から生まれるメル[illegible]をみせる作品。小林七[illegible]氏の[illegible]氏のキャラクターが生み出す印象的[illegible]、まとめてみよう。



▲ハイト先へ急ぐ浩



▲[illegible]に広がった花の園







▲[illegible]たり



▲裕子は浩のノートを拾う







▲浩と裕子の出会い。メルヘンの始まり



▲春の国へと複葉機が飛ぶ



▲夜の中央公園

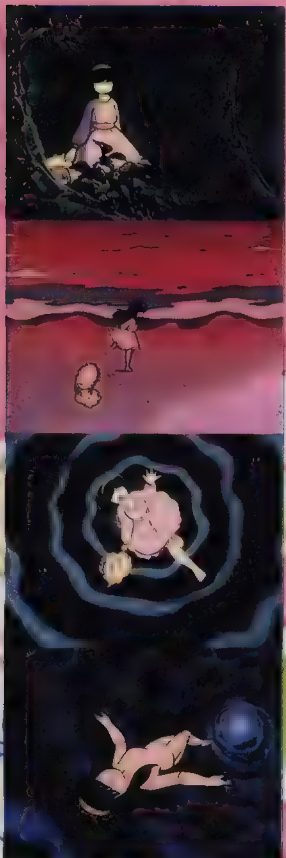


▲博士たちは高く高く……

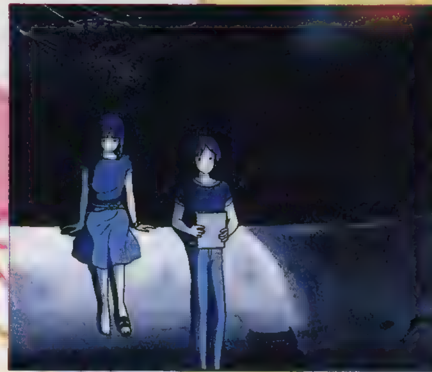


▲裕子をノートにスケッチする浩

名場面コラージュ



▲冬のイメージ



▲浩と裕子の日々



▲夏――日差しの下で



▲チンピラとのケンカ

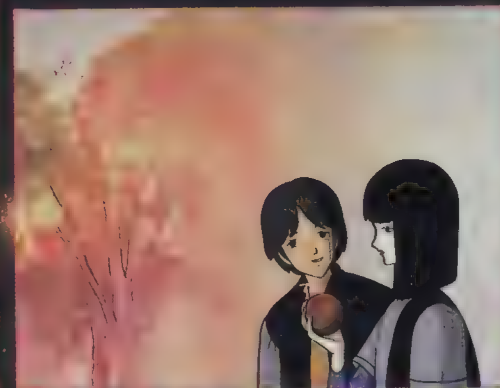
いつもは見えないものが見える時もある

街から追われた動物や妖精が
人に知られずに住む春の国
高いビルの上から　なお高く高く
夜空へのチャレンジを続ける博士
ガラスの靴に白い羽
夜空のダンスパーティー
置き去られた人形の見る夢の世界
浩のノートからは　街のメルヘンが
次々と生まれては消え……
春　夏　秋　冬――季節はめぐり
浩と裕子は　同じ夢の世界へと入る

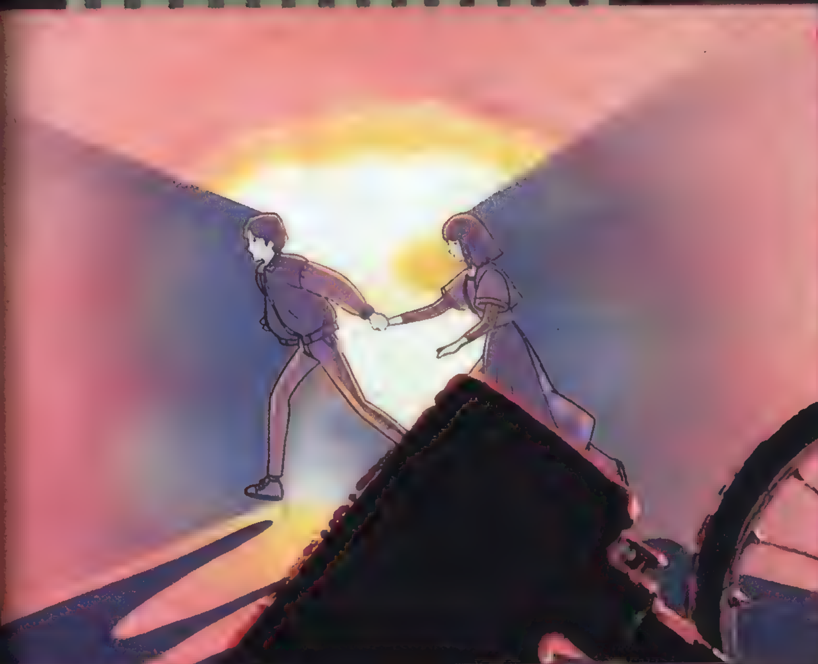


▲ガラスの靴が高く昇ってゆく

名場面コラージュ



▲秋[illegible]



▲[illegible]メルヘンの世界へ[illegible]



▲再び春が[illegible]る街

浩の知らないうちに裕子は街から消えた

本[illegible]な街路樹を[illegible]に[illegible]した[illegible]
[illegible]は雪[illegible]れて街を[illegible]と[illegible]れる
[illegible]の中で[illegible]も 吹きすさぶ風の[illegible]
街は凍てつき[illegible]その柱と化すビル
裕子が[illegible]から消えて[illegible]
今日で何日がたったのだろう
浩のメルヘンも 寂しさに満ちて
裕子の面影を そこに求める
街はやがて春を迎え
コンクリートの間に花が[illegible]
[illegible]新しい時のはじまり[illegible]



▲果て[illegible]



▲浩の[illegible]裕子のイメージ



▲[illegible]

BLUE PRINTS

設定資料集

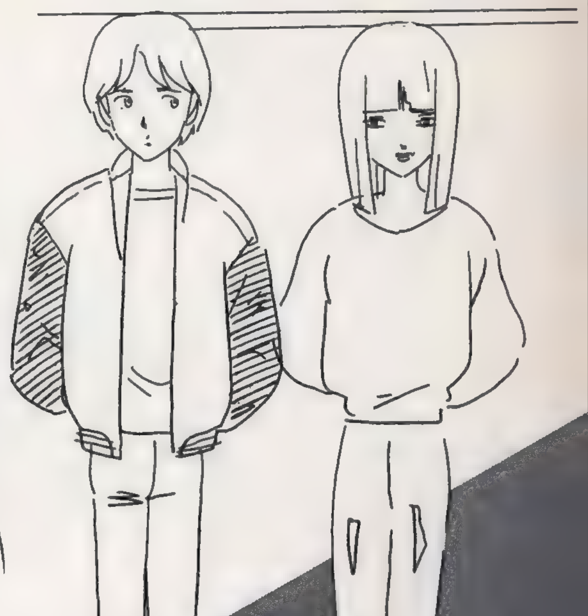
★『街角のメルヘン』のキャラクターの原設定、さらにシーズンにあわせたファッション、小道具など、全編にわたるデザインを紹介！現実の街、季節を考慮した浩と裕子、メルヘンの世界に、自由に想像を広げたファンタジックなキャラクター——それらの対称も楽しんでほしい。『街角のメルヘン』の〝心〟がここにある!!



MAIN CHARACTER



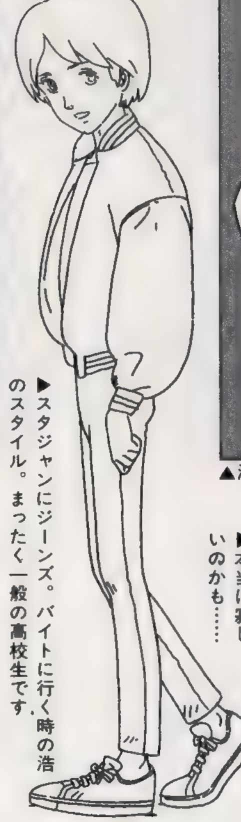
▶天野嘉孝氏のイメージ・スケッチ。裕子の春のスタイル。初期のボードより。



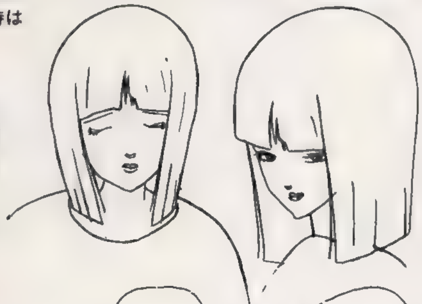
▲浩と裕子の基本設定。ふたりとも18歳、高校3年生。ファッションも、ふたりの性格をよく表している。

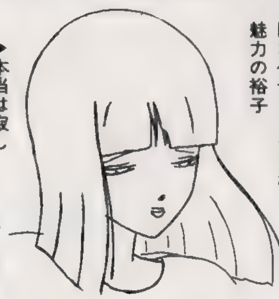
BLUE PRINTS


▲浩の表情集。普段は優しいが、いざという時はやっぱり男の子！


▶スタジャンにジーンズ。バイトに行く時の浩のスタイル。まったく一般の高校生です。


▲浩と裕子。出会って間もない頃


▶裕子は、これで案外表情豊富か。本質はナイーブです


▶本当は寂しいのかも……


▶コケティッシュな魅力の裕子


▶ファッションは、少しばかりダサイのです

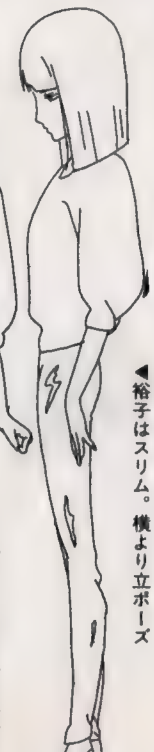

▶浩。後方より


▶浩の立ちポーズ。横


◀タバコを吸う裕子


◀優しい目の浩

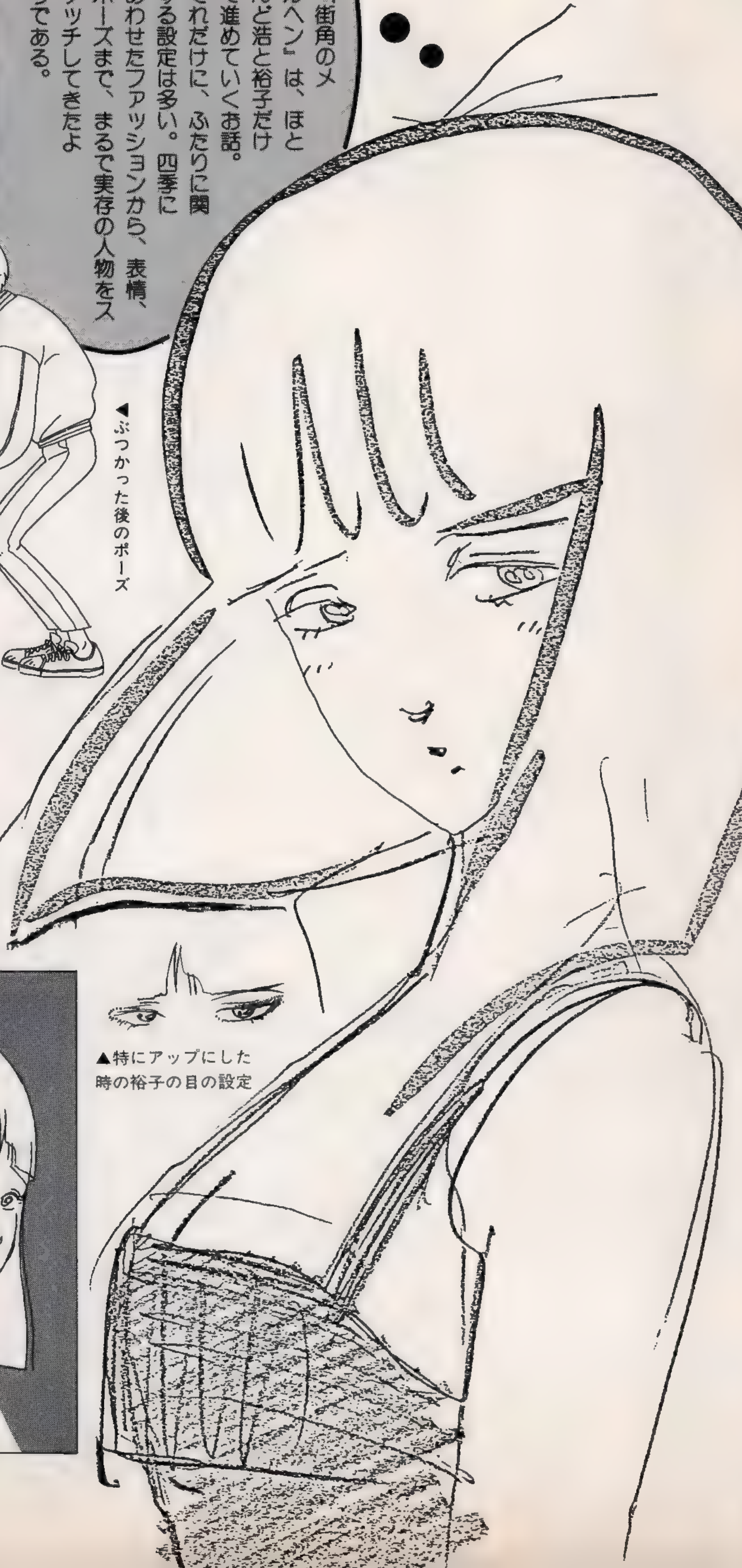

◀つっぱりとはいえ女の子です

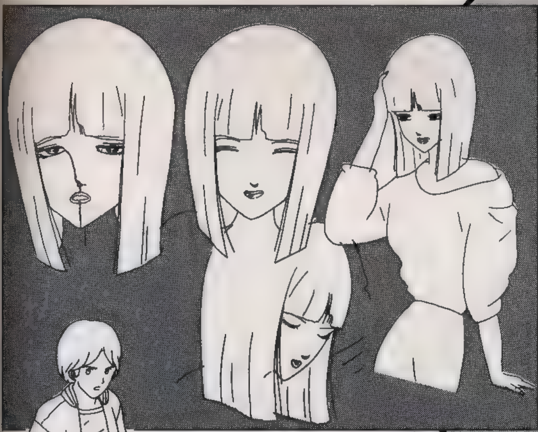

◀裕子はスリム。横より立ポーズ


◀立ちポーズ。後方より

MAIN CHARACTER

『街角のメルヘン』は、ほとんど浩と裕子だけで進めていくお話。それだけに、ふたりに関する設定は多い。四季にあわせたファッションから、表情、ポーズまで、まるで実存の人物をスケッチしてきたようである。



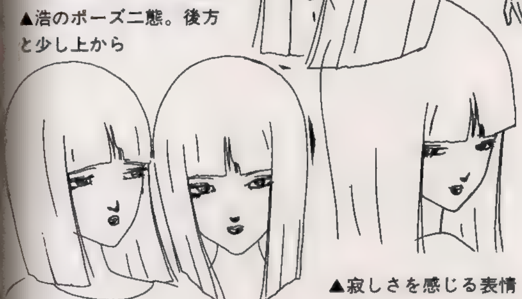


▲裕子の表情・ポーズ集



▲浩のポーズ二態。後方と少し上から

◀ぶつかった後のポーズ

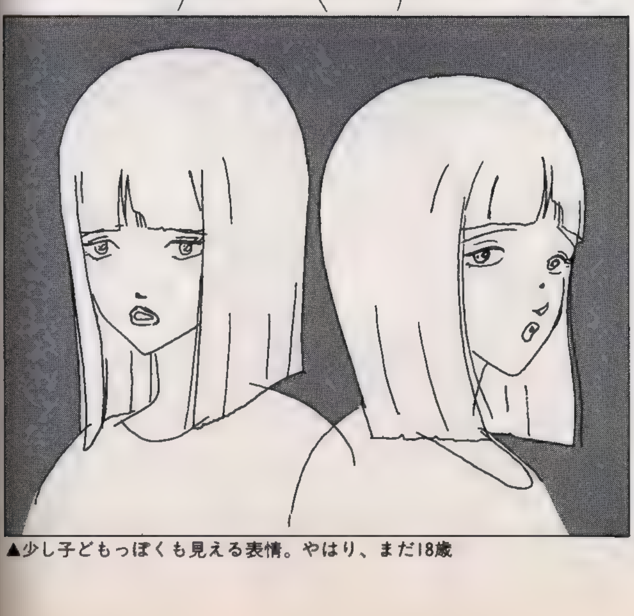


▲寂しさを感じる表情



▲裕子の顔のアップの設定。目の表情にも注目

◀裕子。ふし目がちの目と、ストレートヘア



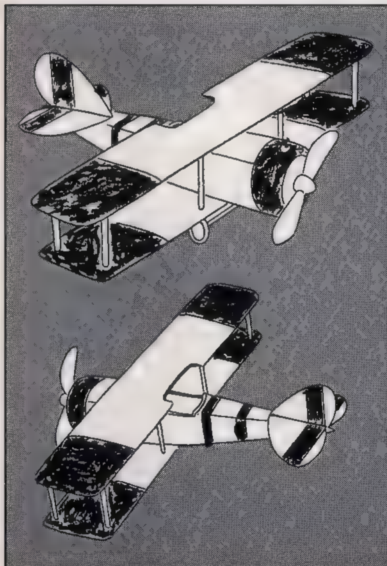
▲少し子どもっぽくも見える表情。やはり、まだ18歳

▲特にアップにした時の裕子の目の設定

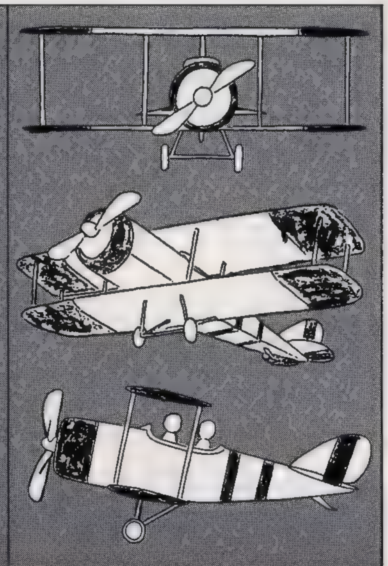
◀裕子のイメージより。ファッションは夏のムード

BLUE PRINTS





▲複葉機。アンティックなイメージの機体



▲春のメルヘンに登場する複葉機



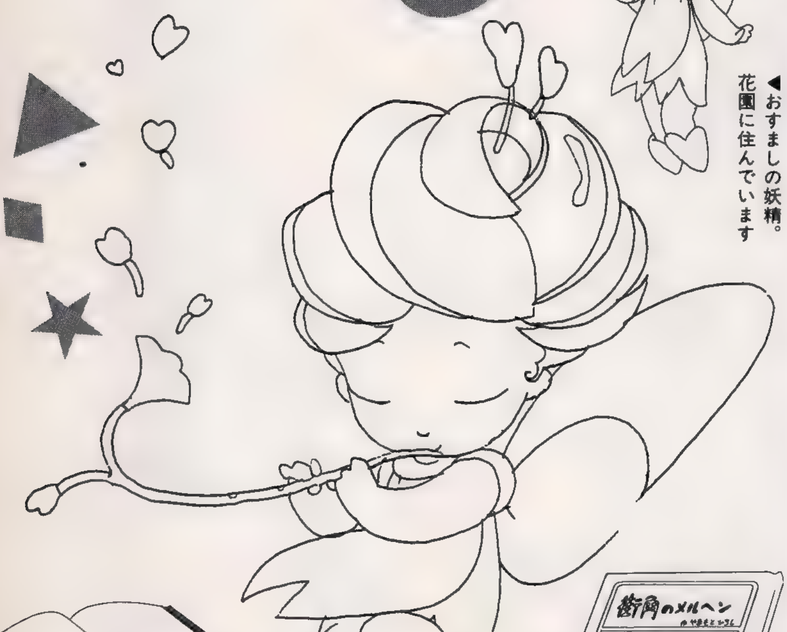
▲羽はチョウのよう

▲春の妖精。後方

▲春の妖精と笛

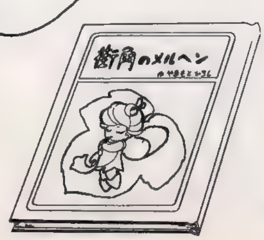


▲おすまし妖精。花園に住んでいます

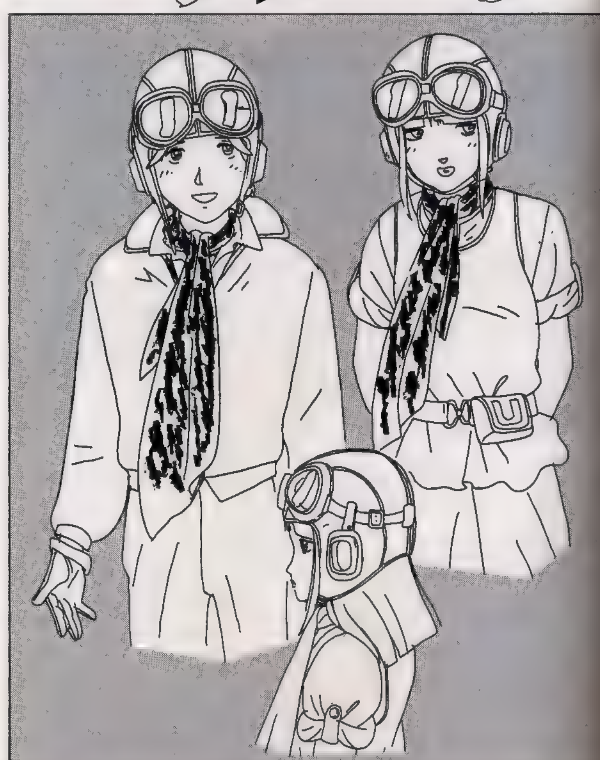




▲浩の絵本。開いたところ



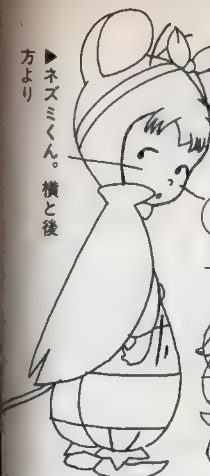
▲浩の絵本の表紙です



▲裕子と浩の飛行服スタイル。マフラーと飛行帽が複葉機にピッタリ

SPRING

春のシーンは、高層ビルの間に咲く桜の花と、ふたりがおとずれる春の国。ほこりと、騒音の街と、花の咲き乱れる春の国が、コントラストを見せてくれる。登場するキャラも親しみやすい。



▶ネズミくん。横と後方より



▲体の動きも感情を表す



▲春の国で、花に色を塗るネズミくん。大きな絵筆がかわいいのです



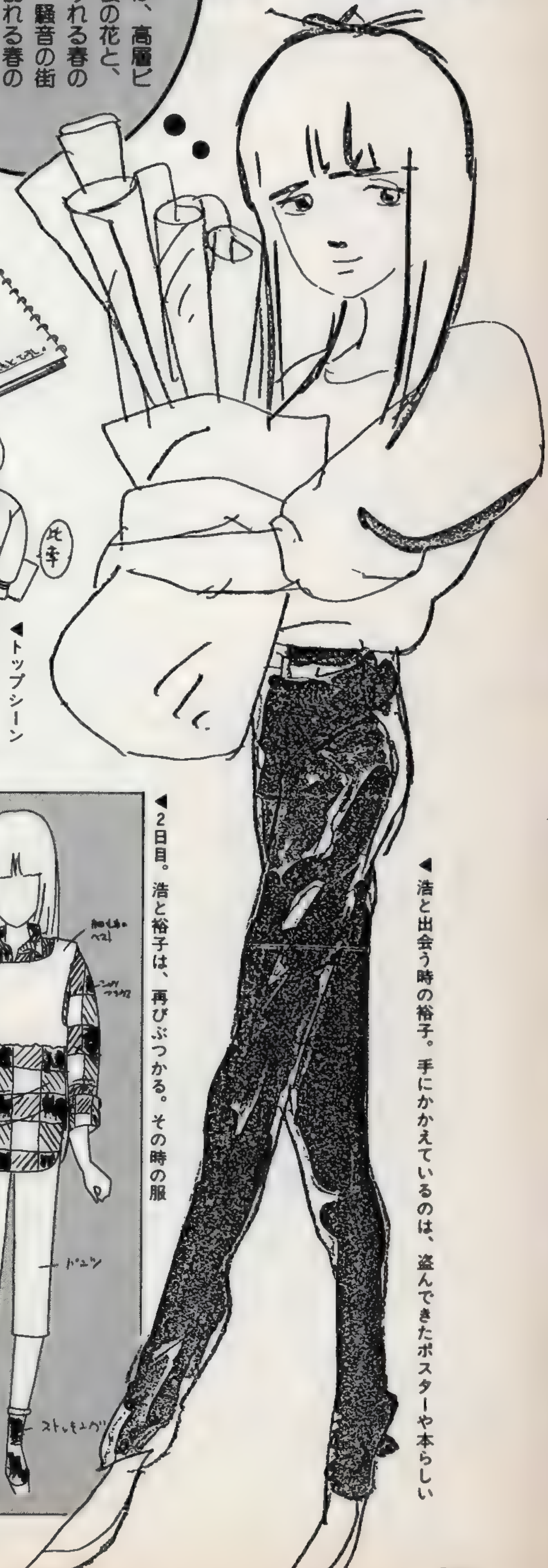
▲浩のノート



▲ノートの中



◀トップシーン



◀浩と出会う時の裕子。手にかかえているのは、盗んできたポスターや本らしい



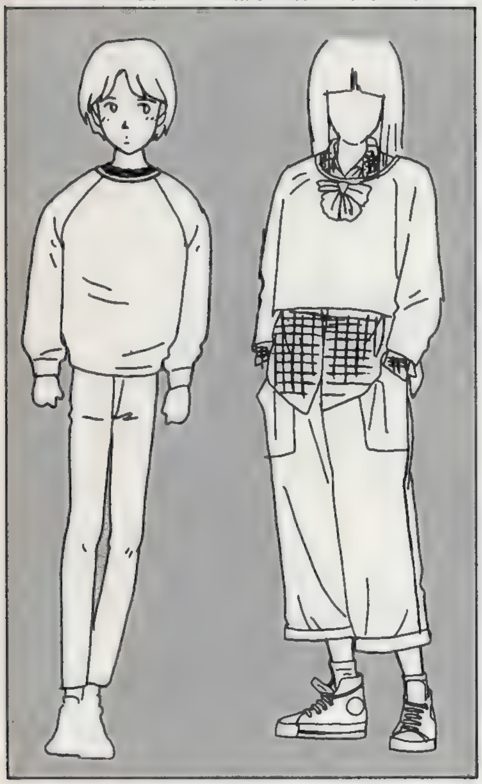
▲最初に地下道で出会う時のふたりのファッション



◀2日目。浩と裕子は、再びぶつかる。その時の服

BLUE PRINTS

▼カット129.公園の下での裕子と浩のファッション



▼夏の公園での裕子

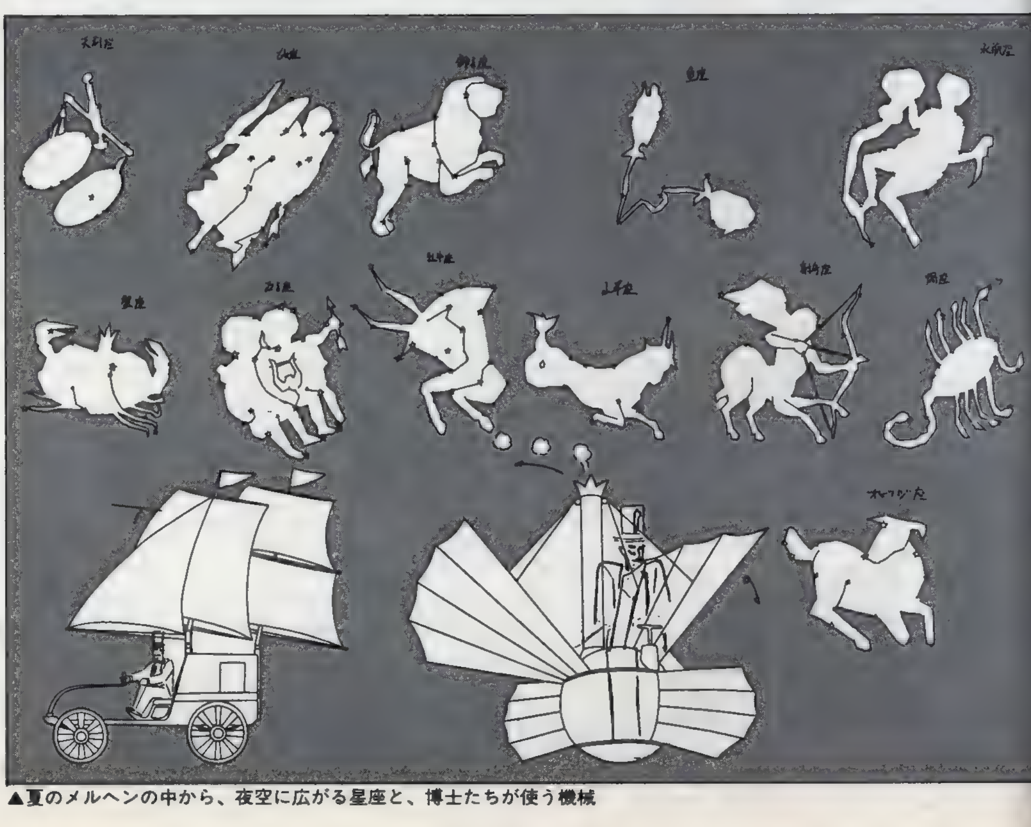






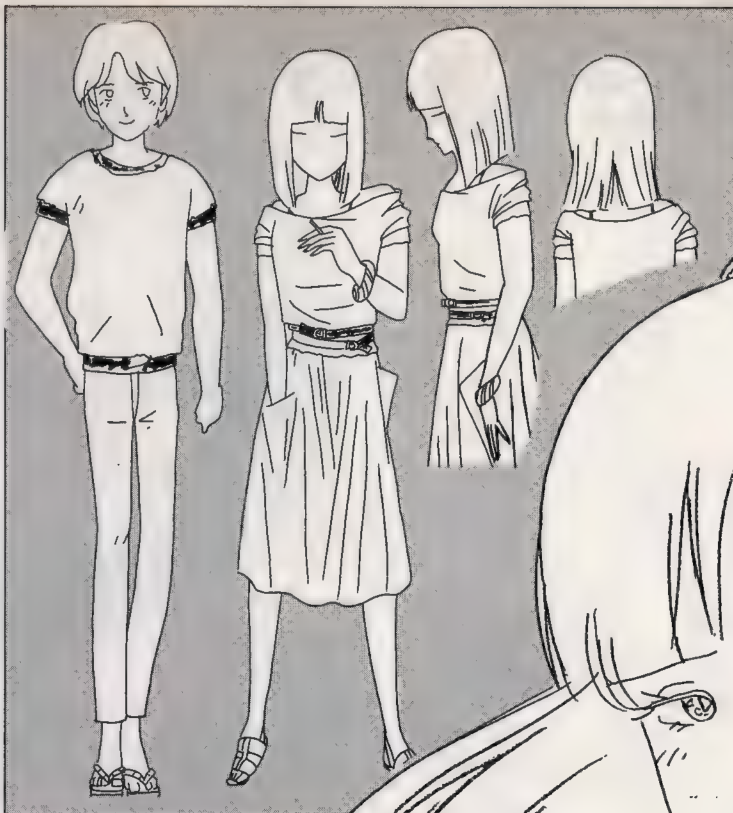
●空へ飛ぶガラスの靴





▲夏のメルヘンの中から、夜空に広がる星座と、博士たちが使う機械

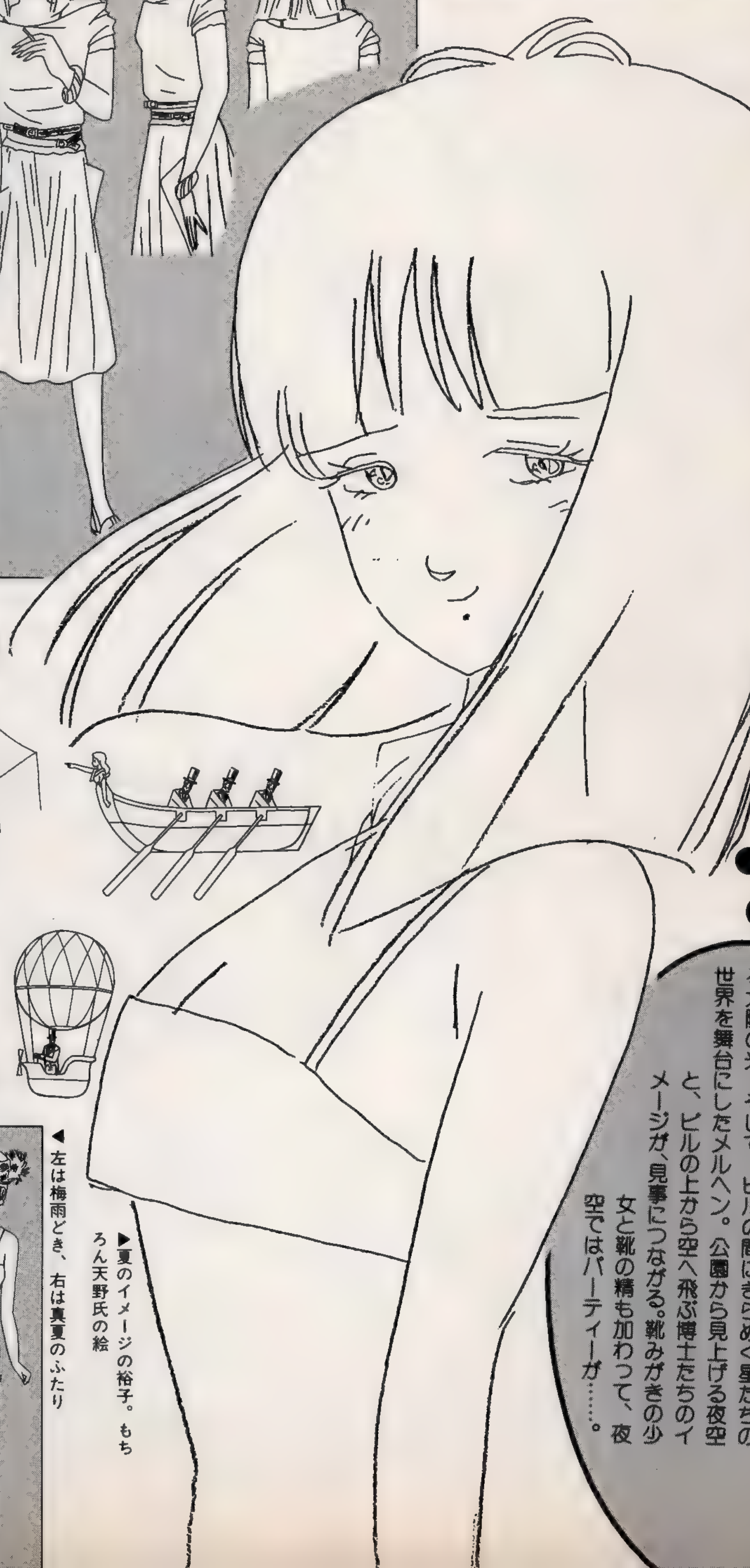
SUMMER



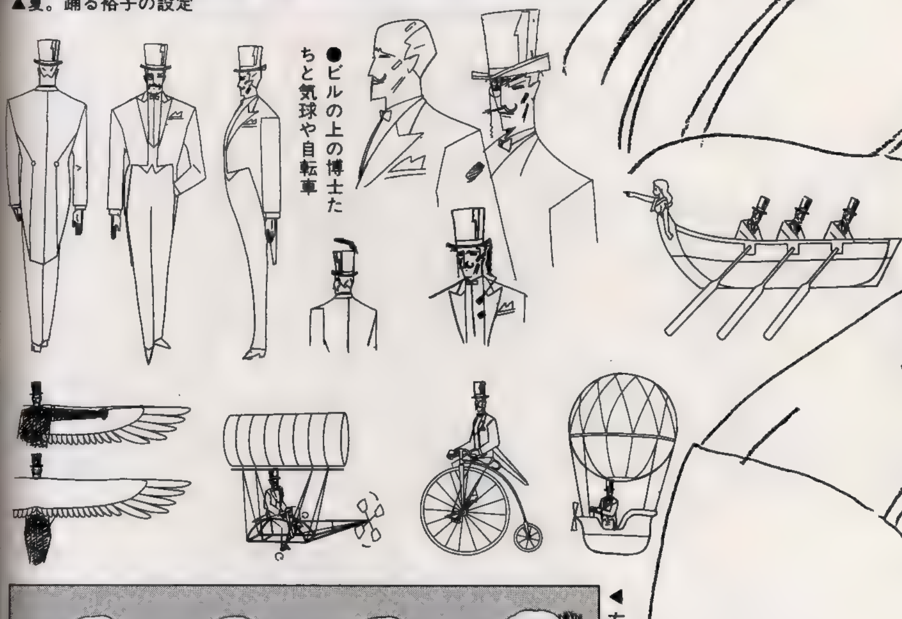
◀夜の公園でのふたり。



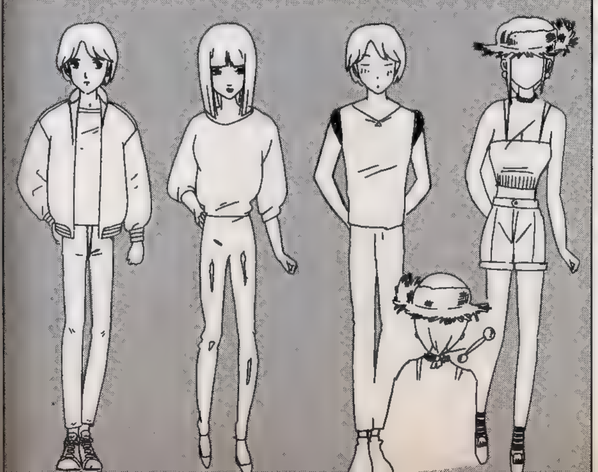
▲夏。踊る裕子の設定



▶夏のイメージの裕子。もちろん天野氏の絵



●ビルの上の博士たちと気球や自転車



◀左は梅雨どき、右は真夏のふたり

●夏は、都会の若者たちや、行きかう車、照りつける太陽の光。そして、ビルの間にきらめく星たちの世界を舞台にしたメルヘン。公園から見上げる夜空と、ビルの上から空へ飛ぶ博士たちのイメージが、見事につながる。靴みがきの少女と靴の精も加わって、夜空ではパーティーが……。

BLUE PRINTS

秋 AUTUMN

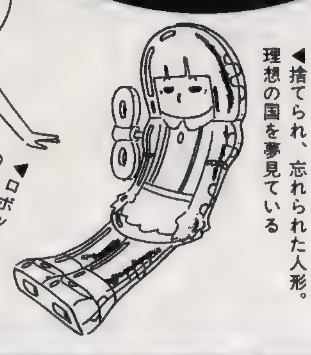


▲人形は、ロボットの言葉で、自分たちみんなが輝いていることを知る。そして、女の子の姿に…





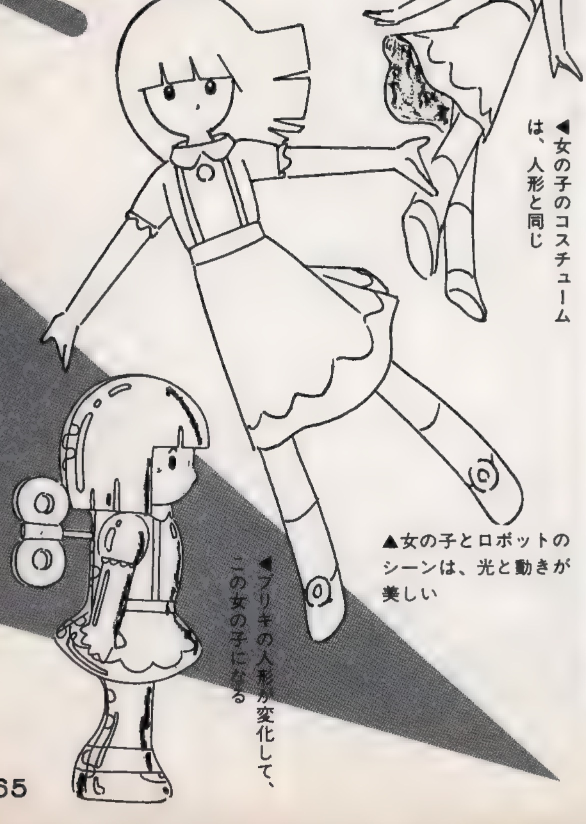
▲ロボットと踊る女の子。ポーズ集より



▲捨てられ、忘れられた人形。理想の国を夢見ている



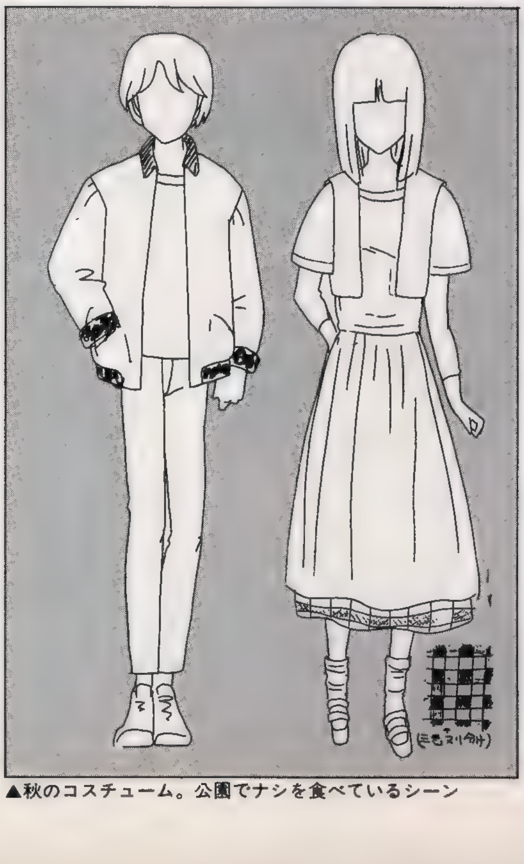
▲ブリキの人形。横からのポーズ



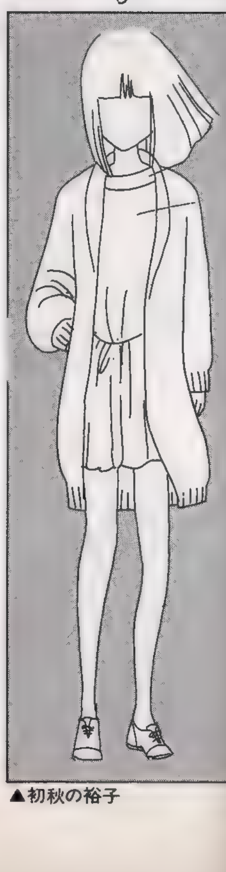
▲女の子のコスチュームは、人形と同じ

▲女の子とロボットのシーンは、光と動きが美しい

▲ブリキの人形が変化して、この女の子になる



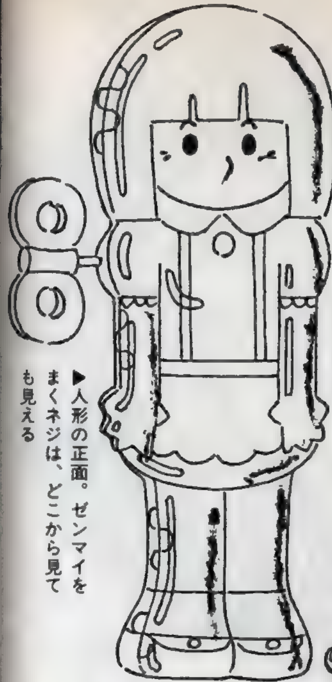
▲秋のコスチューム。公園でナシを食べているシーン



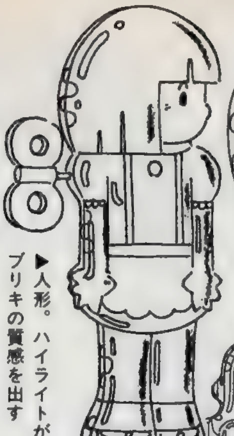
▲初秋の裕子

AUTUMN

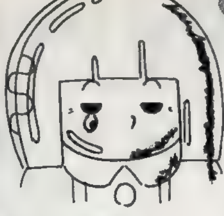
秋は、色づきはじめた木々の葉と夕日、そして、忘れられた人形や、オモチャ、空カン、テレビたちのメルヘン。ブリキの船が海をゆき、夕日がその航跡を染め上げる。浩と裕子が、初めて同じ夢を見た日だ。裕子は、その記念に浩のノートをもらう。



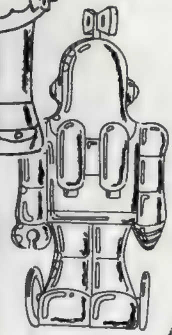
▶人形の正面。ゼンマイをまくネジは、どこから見ても見える



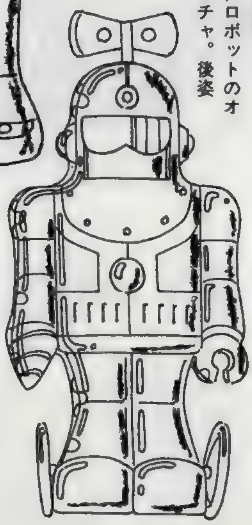
▶人形。ハイライトが、ブリキの質感を出す



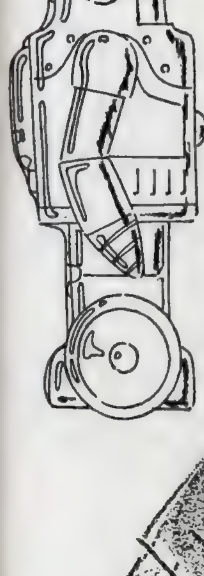
▲人形の顔アップ



▶ロボットのオモチャ。後姿



▲人形と躍るロボット。やはりブリキ製



◀ロボットの側面

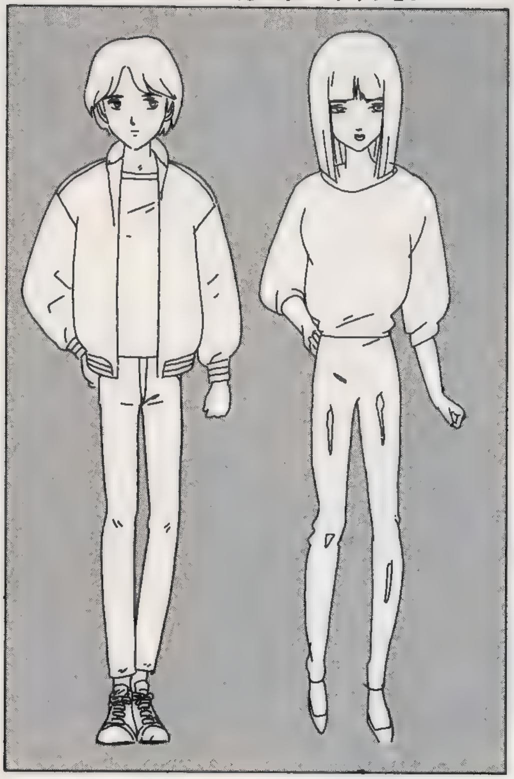


▲秋のイメージの裕子。ゆったりしたトレーナーと、レザー風のパンツがよく似あう

BLUE PRINTS

WINTER

▼裕子と浩が"同じ夢"を見た時のファッション



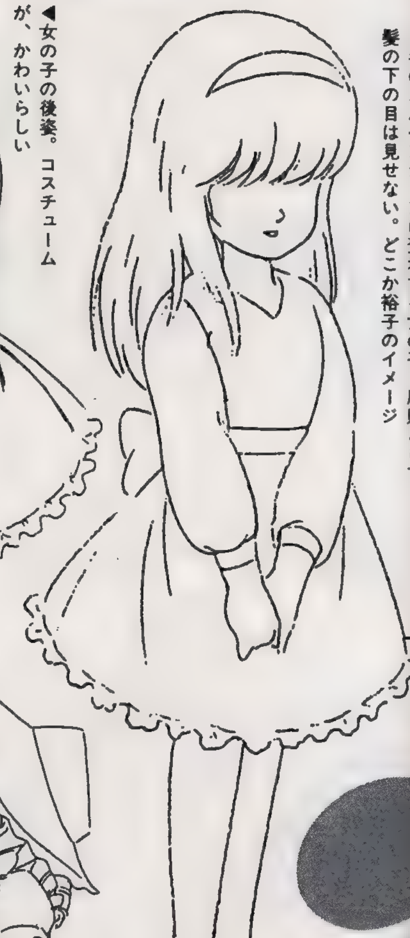
◀浩の方。マフラーなし



◀浩の後方。フードの上からマフラー



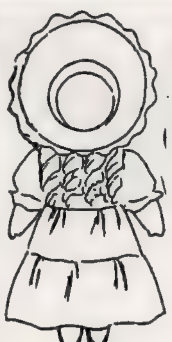
◀冬のメルヘンシーンに登場する女の子。原則として、髪の下の目は見せない。どこか裕子のイメージ



◀女の子の後姿。コスチュームが、かわいらしい



◀人形の後姿



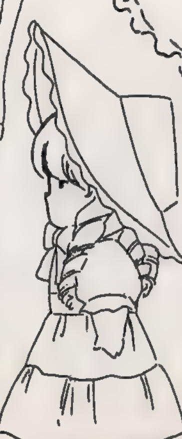
◀冬の雨の中、裕子を捜す時の浩

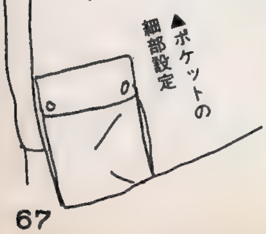


◀女の子の側面。ロングの髪をヘアバンドでとめている。どことなく不思議なムードを持つ



▶女の子が持つ人形。カールした髪とボンネット、フリルつきのスカートといった服





▲ポケットの細部設定



▲ヤッケ風のウェアの浩

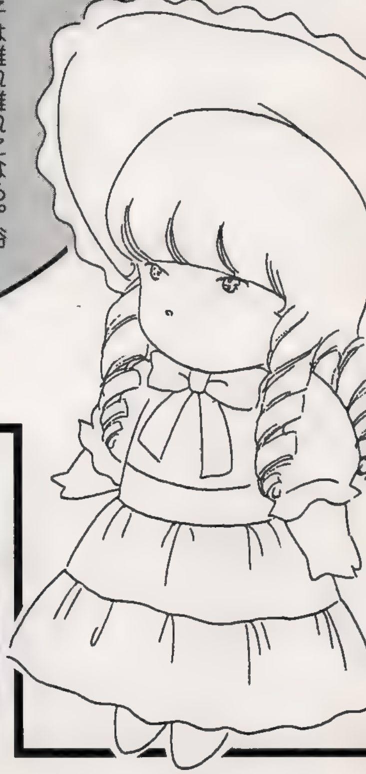
WINTER

冬は、浩と裕子は離れ離れになる。裕子は、警察に補導され、それを知らない浩は、街中を捜して歩く。そして、浩の心のような木枯が、雪が街に降り、浩はますます寒さを感じる。そんな中に見た幻——それは小さな女の子と氷の柱となったビル、飛びまわるコウモリの群。大切なものを失った浩にとって、メルヘンの世界も寒々としたものになったのだろうか。

女の子は、雪の街を歩き、その周囲が春に、夏に、秋に変わる。まるで、浩と裕子の一年——。少女は天から落ち、雪の中には少女の人形が置き忘れられている。浩の手にした絵本は、すべてのページが空白——冷くて寂しい冬のメルヘン……。



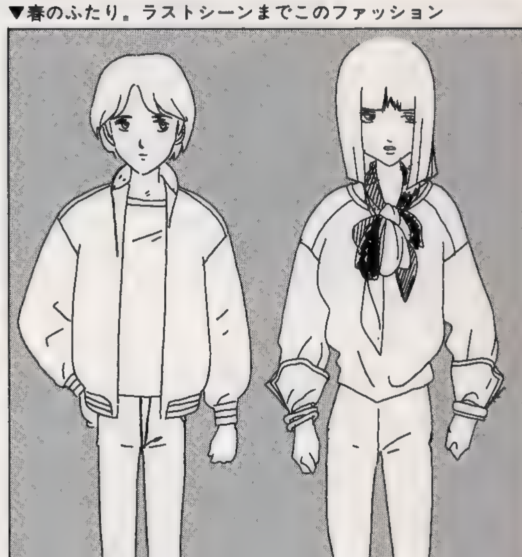
▲冬の裕子のイメージ。マフラーとジャンパー、スリムなパンツスタイル



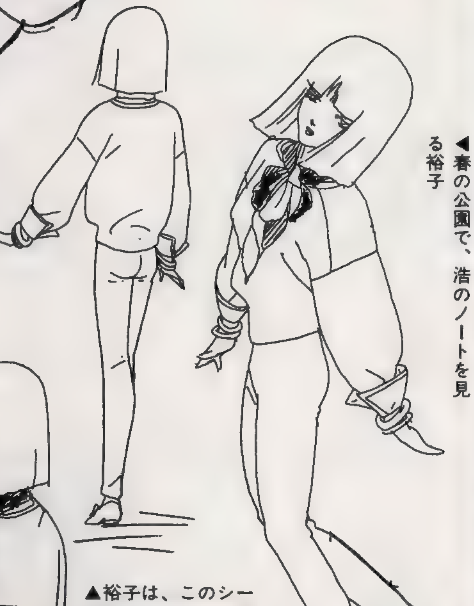
◀雪の中に忘れられている人形

再び 春 SPRING

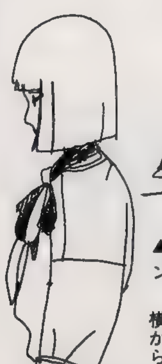
▼春のふたり。ラストシーンまでこのファッション



◀春の公園で、浩のノートを見る裕子



▲裕子は、このシーンで浩の世界を見る



◀同じシーンの裕子を横から

やがて、再びめぐって来た春の光が、雪を追いはらい、花を咲かせる。裕子と浩は、あの日と同じように街へ出る。公園で本当の春を感じる裕子、なお裕子を捜しつづける浩。そして、浩の目に裕子の姿が映った時、また新しいメルヘンの世界が広がる。

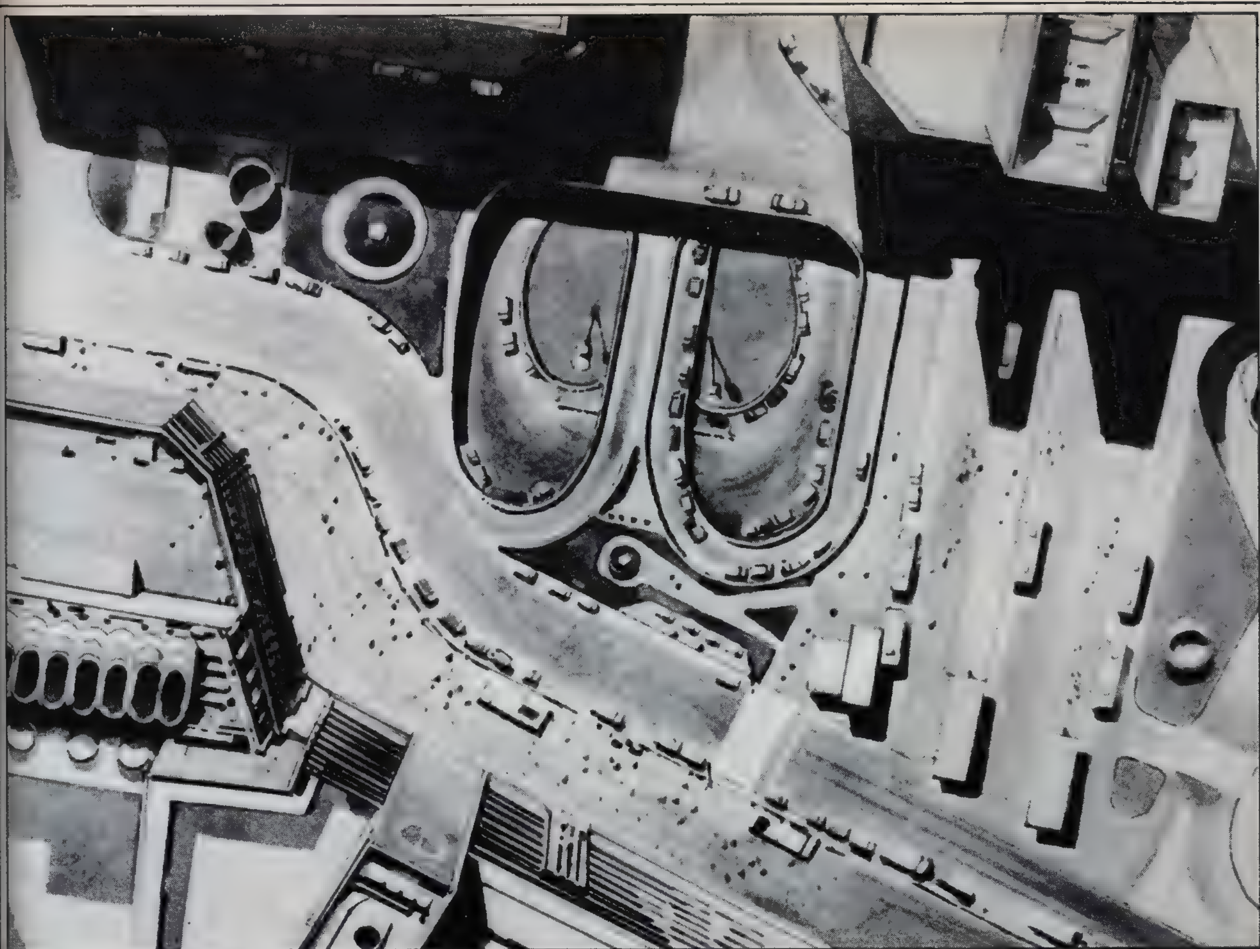
シーン分析

絵コンテ/AR台本にみるメルヘン演出法





●『街角のメルヘン』は、大きくわけて四季——春夏秋冬に分けられる。そして、それぞれに現実のシーンとメルヘンのシーンがある、それらの演出、画面について研究してみよう。



▲冒頭。新宿駅の大俯瞰図

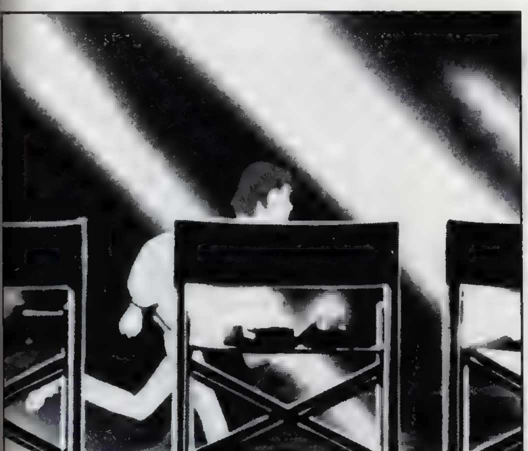
新宿副都心の春——人と車と

★物語の冒頭。浩と裕子の出会いへのプロローグである。国電が止り、人々がはき出され、思い思いの方へ散っていく。

新宿の大俯瞰から駅の混雑へと……

『街角のメルヘン』のトップシーンは、新宿駅を中心にした大俯瞰図である。春の陽差しの中の都会が、眼下に広がる。カメラは、上空からグングン降下して、駅へ焦点をあわせる。電車がホームに入り、人々がはき出される。その人々の足——。

BGMは『ベスパップ・スカウト』、電車が入ってくると、SEがカットイン、カットアウトで挿入される。



▲浩にカメラはついていく

画面は、改札口の混雑から、浩につけられる。BGMが再び始まり、浩は西口地下道へ。浩につけられるカメラは、浩の動きにつれて、都会の人々のさまざまな行動を写す。電話をかける人、急ぎ足で歩く人——浩とは何の関りもない人の描写が、浩の孤独性を表している。

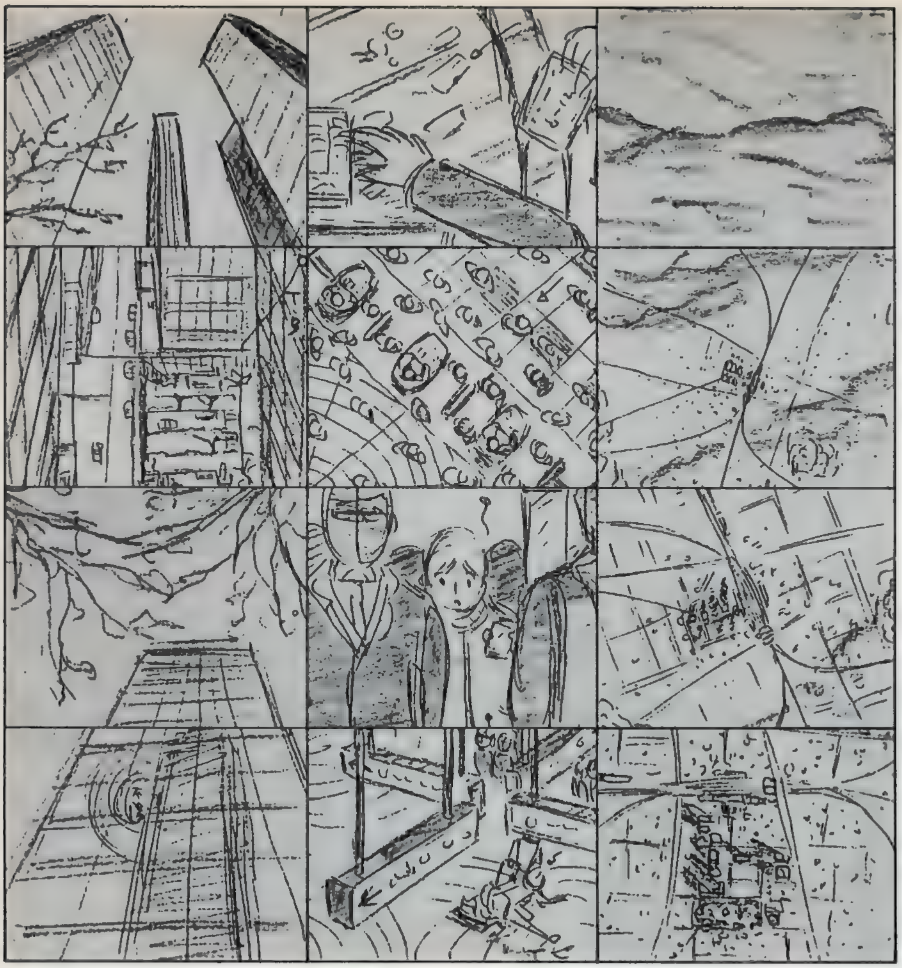
浩と裕子の出会いのシーンは、この後。地下道でぶつかるのだが、外からの光と、地下道の暗さが、白と黒のコントラストで美しい。そして、翌日も同じように、同じところでふたりはぶつかる。日常の中のちょっとした変化——。そして、裕子の手にした浩のノートからタイトルが出る。

カメラが外へ出るのは、ノートを捜す浩が裕子と初めて話しをするシーンだ。新宿の春のまん中へとカメラは入っていく。桜、少しかすんだ空、陽差しをガラスに受けるビル——という具合に、リアルなシーンが浩と裕子の歩みにつれて展開する。

あまり奇抜なアングルはなく、そのためにすなおに物語にとけこめるシーンだ。



▲人ごみをかきわけて走り出す浩



シーン分析

自然な風景描写

ここは、現実の春である。ビルの街の中に、人工的に植えられた桜がピンクの花をひらいている。桜を手前にそそり立つビル、公園に咲く花花――このシーンは、メルヘンへの導入部といえるだろう。

この後、浩と裕子は、小さな複葉機に乗って春の国へ行くのだが、その美しい自然の描写に対して、ビルをバックにせいいっぱい咲く花は、メルヘンシーンをひときわひき立て、また、現実の世界での生命のたくましさを見せてくれる。

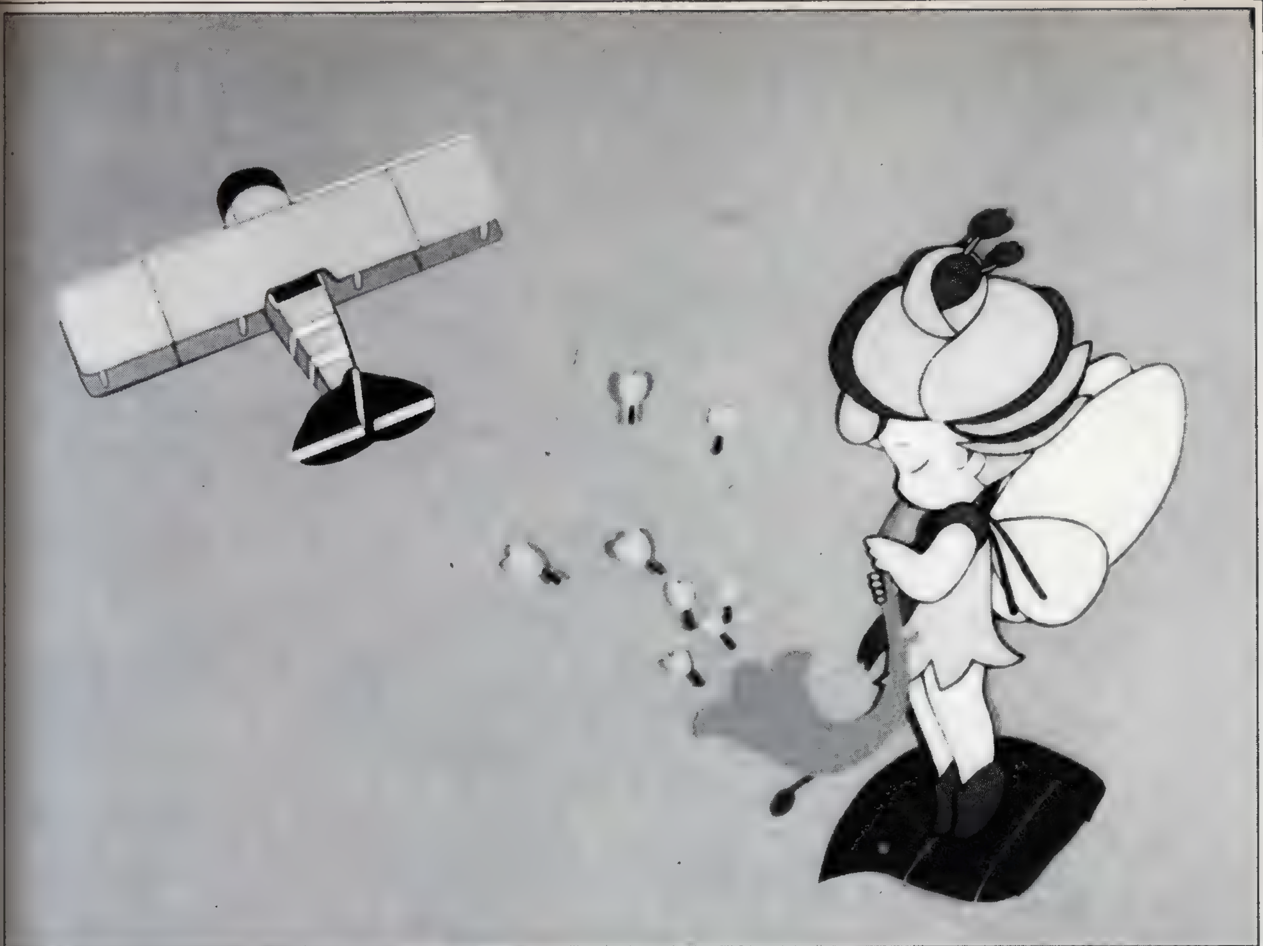


▲春の新宿。ビルも春のイメージ

66	レンガの滝 桜の花びらが浮いている。	裕子	「(口にほうばっている感じ)今日、走ってなかった……」
67	流れる水 水ごしにテラスの浩と裕子が見える	浩 裕子 浩 裕子	「今日は仕事ないから」 「学生じゃないんだ」 「高校三年……バイトしてるんです」 「三年……」
68	浩と裕子 浩、裕子をじっと見て、信じられないという感じ。ハンバーガーを口に放りこむ裕子。ハンバーガーを食べる裕子。その食べる勢いにあっけにとられながらうなずく浩。	裕子 浩 浩 浩	「おんなじだ……」 「三年?……なの……?」 「このあたりに住んでるの……キミ?」 「学校は?」
69	裕子の横顔 浩を見て笑う。	裕子	「ん? フッ……」
70	浩と裕子 裕子、シェイクを飲みはじめるチラリと浩を見て、再びシェイクを飲みはじめる裕子。しばらく裕子を見つめている浩。バツが悪そうにシェイクを飲む浩。	浩	「どこ?」
71	流れる滝 花びらがすべり落ちていく。		
72	浩と裕子 裕子、シェイクをテーブルに置く。裕子、ポケットからタバコとライターを出す。ン!と見る浩。		

“春の国”の温いイメージ！

★最初のメルヘンシーンは、水彩画——それも、絵本のようなイメージ。現実からメルヘンへの移行シーンも楽しい。



▲花笛を吹く妖精と複葉機（フィルム・コラージュ）

複葉機のゆく国は 一面のお花ばたけ

西口から中央公園に舞台は移り、やがて春のメルヘンのシークエンスに入る。『街角のメルヘン』の中でも、やわらかい水彩画タッチの画面は、この部分の特徴。

ハンバーガー・スタンドから、ふたりは公園の入口近くへ。浩は歩道橋の上、裕子はその下を裸足で歩いている。

浩は、自分のノートを読み上げながら言う。

「さっ、行こう！　春の国」

現実的に描かれたビルの上空から、黄色いブリキのオモチャ風の複葉機が降りてくる。メルヘンの導入部としては、かなりユニーク。また、飛行機が現実の街中を飛ぶシーンも、ファンタジックである。地下道を抜けていく時の光、さらにすべて春の色で包まれた春の国——この飛行は、現実からメルヘンへの飛行である。



▲走り去る裕子

春の国には、花笛を吹く春の妖精と、花に美しい色を塗るネズミがいる。春の妖精は、地上——現実の世界に、本当の春をわけてあげたいと思う。

妖精の吹く笛にのって、花たちが空へ舞う。蝶も鳥も、はるか上にあるコンクリートとアスファルトに固められた世界へと上昇する。やがて彼らは歩道の敷石のあいだから、ハンバーガーショップの人工の滝の中から、道路の側溝の中から街中に広がっていく。

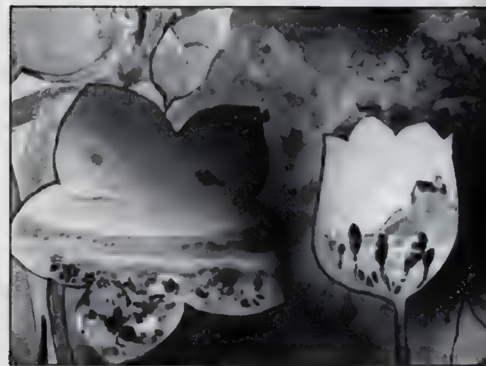
街の中を舞う花、ビルを飾る花吹雪。蝶にひかれた車に乗った妖精が、虹の尾をひいて上る。現実には、本当の自然が失われていく世界に、優しさの作り出した春の息吹。



▲この街の現実の地下の姿。暗闇を走るネズミ



シーン分析



▲淡いタッチの春の国

優しさのシーン

誰もが、一度は想像するような、広い広い野原と一面の花。誰かの心の中の〝春の部分〟を絵にすると、このような、カラーインクと水彩の淡さが輝くような画面になるのかもしれない。

そして、導入部と同じように、妖精の車が、現実の街の中に春をふりまいてゆくシーンは、不思議にリアルなイメージなのだ。メルヘンと現実の融合が、この不思議な、心を弾ませるシーンとなって〝春〟を彩どっている。

カット	内容	人物	セリフ
97-21	虹の橋の前をゆく複葉機 その虹をすべり台のようにすべりおりてゆく妖精。		
97-22	舞い上る花々 妖精が花の上で草の楽器を吹いている。		
97-23	別の妖精が別の楽器を吹いているが、不思議そうに上を見つめる。		
97-24	花の色を塗っていたネズミにたずねる妖精。 手を休めて上を見て話すネズミ。	妖精 ネズミ	「(裕子の声) ねえ、この上はどんなところなの……?」 「(浩の声) そりゃもう、ひどいところ」
97-25	花のすき間から見える現実世界 桜の花びらが一枚、ぬけ落ちてくる。	ネズミ	「(浩の声) ほんとうの春が来ないんだから……」
97-26	その花びらが涙にかわっていく。		
97-27	涙の中でかなしげな目つきで上を見つめ、演奏している妖精。 妖精のアップ。	妖精	「(ポツリと) ほんとうの春をわけてあげたい…」
97-28	涙が葉の上で大きくはじけ、輝く。		
97-29	草の楽器から、花が舞い上る。		

夏の夜——灯と星空に彩られ

★夏のシークェンスは、夜の公園。都会ではめずらしく晴れた星のいっぱい見える夜空。高層ビルの窓の灯が美しい。



▲メインの舞台の公園。ふたりがクジラのベンチで話している

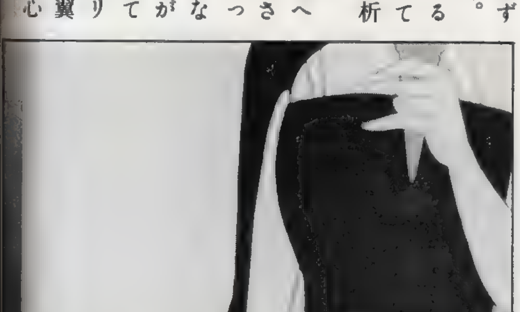
高層ビルの街角に季節の移りかわり

春から夏の間には、季節の移りかわりの小さなシークェンスが入る。初夏の躍るロックンローラー族。ツツジの咲く公園、アジサイに雨のしずく、カサをさして歩く人の列、濃くなっていく影の色、プールへ走る子どもたちなど。そして、夏——夜の中央公園に恋人同士の影。

浩は、公園から見えるビルを見ながら、その上に住んで、高い所を目指す博士たちの話を始める。

カメラが、ビルの下からずっと上へ上へとなめていく。そしてメルヘンの世界へ入るのだが、その部分は後にして現実世界の夏の方を先に分析しよう。

メルヘンシーンから現実へは、街灯とガの飛行が挿入される。すでに人影のなくなったベンチが並び、石の小さなベンチに腰かけていた裕子が立ち上る。そして、空を見てから小石をける。そして、裕子のセリフ「でも、私のサンダルに翼はない」が、見ている人の心にしみるシーンである。



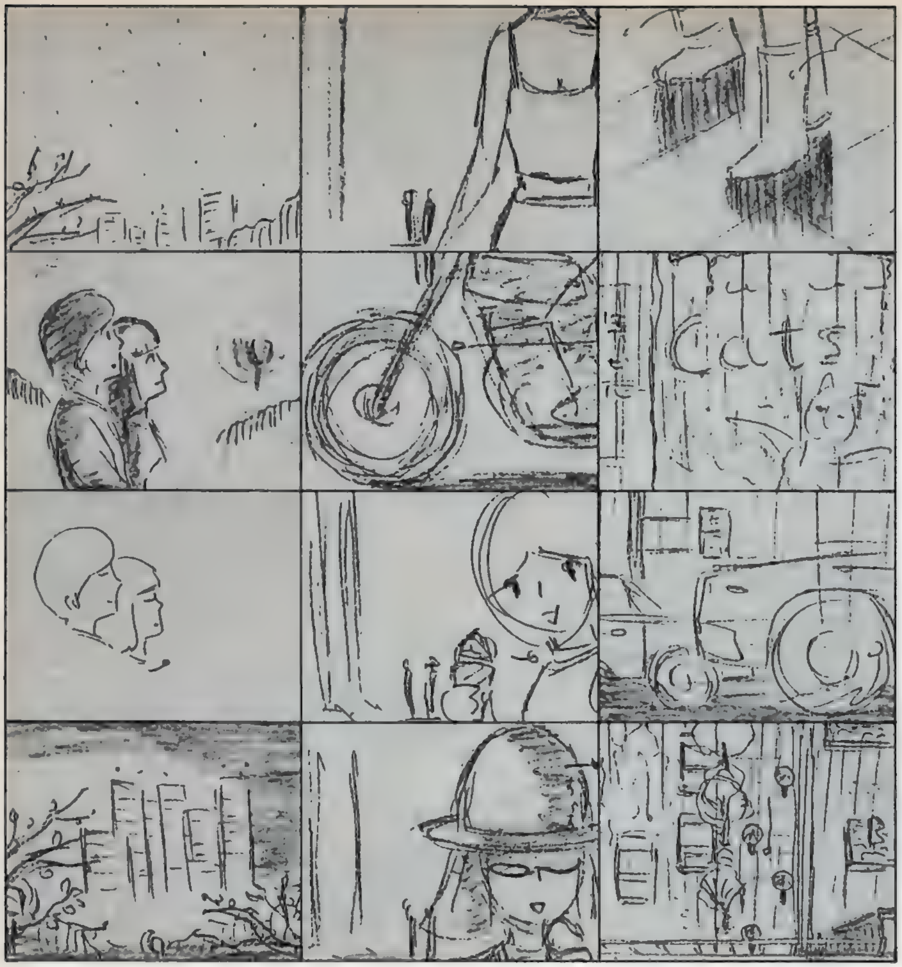
▲夏の夜の公園

裕子は、自分のサンダルをけり上げて天気占い。時間を間違えた夕立(?)のイナビカリ、落ちてくるサンダルと、このへんは裕子の心情がわかりはじめるところだ。

そして、この作品の中では、めずらしいアクション・シーン。チンピラ風のふたりにからまれた裕子を助けようと、浩が体当りをくわせ、倒れたチンピラをノートでなぐる。決して、かっこよくないのに、浩の裕子に対する気持が嬉しくなってくるシーンだ。



▲公園は、共通の場所



シーン分析

光と影の表現…

左のコンテは、春から夏への部分と、夏の夜の一部。裕子のファッションや、街の描き方が季節を表している。また、道路を通ってゆくバイクや車、カサをさした人などが、都会のムードをかもし出す。

淡々と街のあちこちを描きながら、時の移りかわりを表現する演出、そして、木々の葉や、光などの微妙な違いを描く美術がさえている。

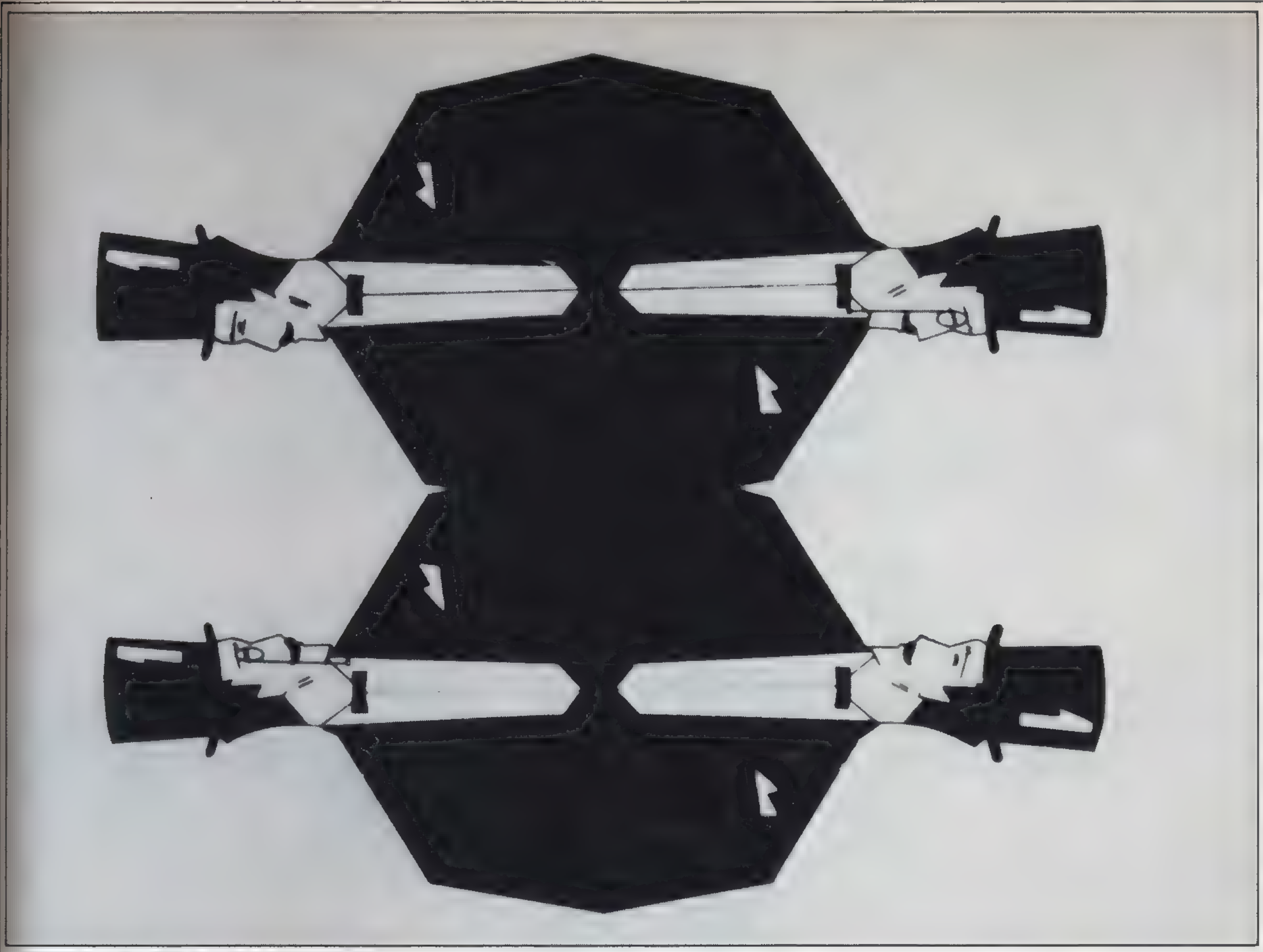
夏の夜の、めずらしく晴れた空の下の公園のシーンへ、スムースな展開を見せている。



▲ビルの窓

178	ビル街。 木々と時計。		(SE)チャイム
179	ビル街を見ている浩と、ちょっと寂しそうな裕子。 裕子、足を見て。 目を閉じる裕子。 浩、裕子の足もとを見て。 同じ。	裕子 浩 裕子	「12時か……」 「まるでシンデレラだ」 「シンデレラ……か……」 (M)「百合コレクション」
180	裕子のサンダルのない足。 ス～とさがる足。	裕子	「(さみしそうに)12時のシンデレラ……みじめ」
181	ン？となる浩。 裕子の方を見る浩。	浩	「んッ……？」
181	さびしそうな裕子の横顔。		
182	裕子をじっと見つめる浩。 水道の蛇口より水滴が落ちる。		(SE)ピチャーン
183	浩、ぐっと手を握り、パンと後ろのクジラで勢いをつけ──。		
186	裕子の前に飛び出す。	浩	「シンデレラは、いつだってシンデレラさ！」
187	裕子、ピクリとして、 そして、ゆっくり顔を上げて 上目づかいで浩を見る。 ほほえむ裕子。		
188	浩もふっと笑顔になる。	浩	「ね！」
189	ちょこんとうなずく裕子。		

高いところが好きな博士たち



▲幾何学的な画面°ニッコリする博士たち

★浩が公園で語るメルヘンは、高層ビルの屋上から、さらに高く高く昇ろうという博士たちと、靴みがきの少女のお話――。

夜空へ夢をはせて 銀河のパーティー

ビルの屋上に住む博士たちは、一年に一度、高く昇る研究の発表を行う。ある博士は気球を使い、ある博士はボート、さらに自転車や翼――それらをつけた博士たちが、空へとむかう。このあたりのシーンは、ファンタジックでいて、ユーモラスだ。それぞれが負けまいと、抜きつ抜かれつの競走をする博士たちの動きは、ギャグとはまた違った楽しさがある。

そして、そのビルの下に、靴みがきの少女がいる。カメラは、真上から少女と、とてつもなく大きな靴をとらえる。靴は、ピカピカに光り、次の靴と交替する。少女は、本当は星の世界へ行きたいのだ。



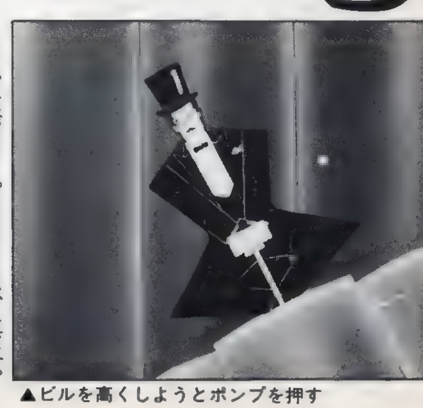
▲夜空に広がるメルヘン

画面は、全面星空となり、少女の目と口だけがそこに浮かぶ。そして靴の精の登場。靴の精は、靴たちに生命を与える。成金の靴は葉巻をくわえてタップを踊り、サーファーギャルの靴はサーフィンを楽しむ。汗を流して走るスポーツ靴、雨の中をはねて遊ぶ女の子の雨靴。優しさとユーモアのあるシーンだ。

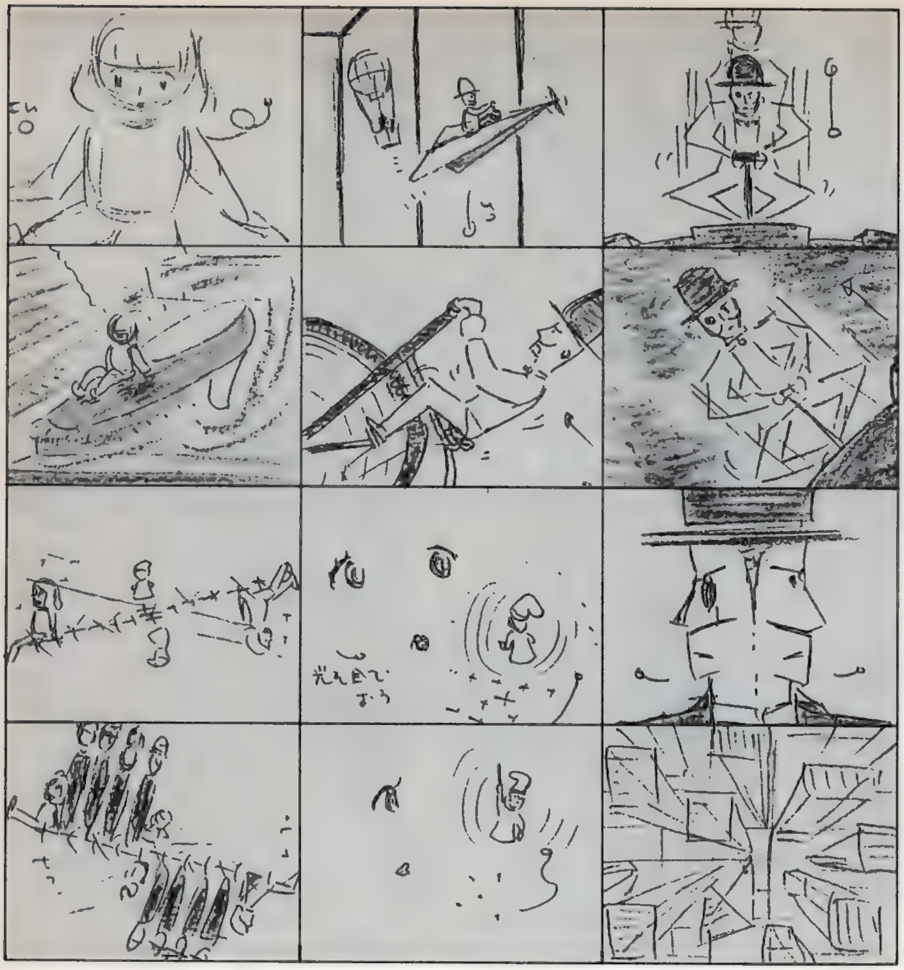
靴の精は、ガラスの靴に少女を乗せて、星空へと飛んでいく。上昇してゆく少女の顔のアップは、とてもかわいらしく輝いている。

星空の散歩を楽しむ博士たち。ペーパームーン風の月、太陽、たくさんの模様に飾られた木星、リングをまとった土星など 星の世界を舞台にしたメルヘン・ワールドである。

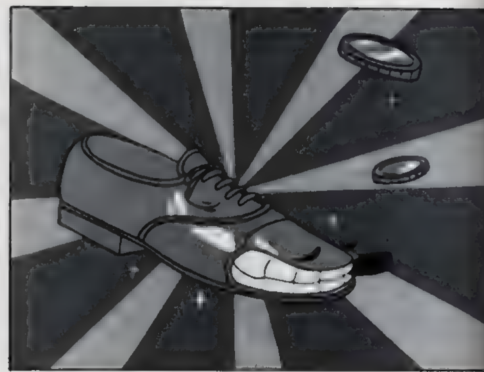
BGM『ムーンライト・コースター』にあった動きが楽しい。



▲ビルを高くしようとポンプを押す



シーン分析



▲輝きだす靴

ユーモラスに…

靴みがきの少女は、もしかしたら裕子かもしれない。そんなふうに思わせる導入部である。しかし、あまり細かいことは考えずに、BGMのリズムと、博士たちのユーモラスな競争、そして、少女と靴の精が旅をするファンタジックな星空を見ているだけで充分。

ちょっとアンティックな博士たちと、シンデレラを思わせるガラスの靴、銀河や土星を遊園地のように見たてたシーンなど、夏のメルヘンシーンは楽しさがいっぱいである。

149-24

スーと空を見上げる少女。その想いが、美しく輝く夜の星になる。		
目を閉じる少女。	少女	「（裕子の声）わたしも行きたい……」
光が彗星のように流れる。	靴の精	「（浩の声）いっしょに行こう」
振りむく少女。	少女	「えッ……？」
少女の前、再び光がINして、パッと靴の精の姿となる。		
靴の精、フワリと舞い上る。		
フワフワと下へおりてゆく靴の精。	靴の精	「ぼくと」
妖精を見送る少女。		
少女のボロ靴のまわりを、ゆっくりとまわる妖精。		
つぎのあたっているところを、ステッキでおしてみる。		
今度は、早いスピードで靴のまわりをまわりはじめる妖精。		
ステッキで宙に絵を描くように上昇してゆく。		
タップを躍る成金靴。		
葉巻からは、金貨の煙が立ちのぼる。		
再びINする靴の精。		
波のりしているサーファーギャルの靴。		
汗を流しながら走るスポーツ靴。		
雨の中を飛びはねて遊ぶ女の子の靴。		
輝くガラスのハイヒールが現れる。		(M)「ムーンライト、コースター」
靴みがきの少女が、クルクル回りながらINしてくる。少女が乗るとヒールが輝き、翼を持つハイヒールになる。		

木の葉の色づく街角の秋景色



▲浩の放った梨を手にして、公園で話す

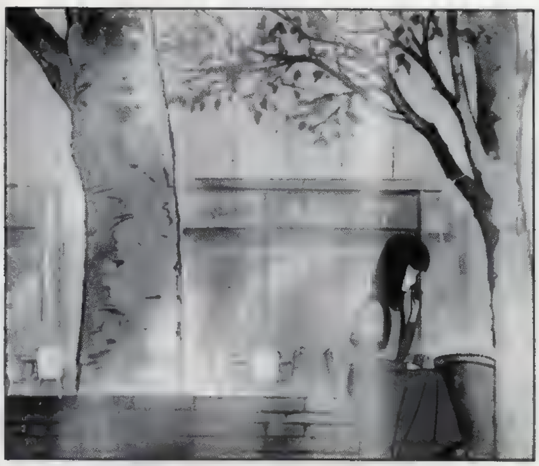
★秋は夕日のイメージ——そんな感じのする画面、色づかいである。夕日の色、空の色、木の葉の色、すべてが秋の中での1シーン。

流れる雲と風の音
季節感のある画面

街の秋の描写は、高層ビルの窓から始まる。窓をバックに鳩の群が飛び上り、白い雲がガラスに写っている。雲の形、空の色が秋の気配を感じさせてくれる。

さらに歩道をころがる空カン、風に舞う新聞紙——夏のイメージから一転して、寒さにむかおうとする街のひとコマをとらえている。

新聞紙から、カメラがひくと、歩道橋がむこうに見え、そこに浩と裕子が立っている。街路樹の木の葉も舞いはじめ、誰もすわっていないハンバーガー・ショップの椅子が、秋風を強調するかのようだ。



▲公園のベンチで…

春から夏、そして秋になって、浩の夢——絵本は、形をとりはじめてきている。菊の花の咲く公園で、浩はいつものように、ノートに書かれたメルヘンを裕子に話す。噴水のある池の水の上のアキアカネや、浩の投げるイシなど、秋を演出する小道具もムードを盛り上げてくれる。

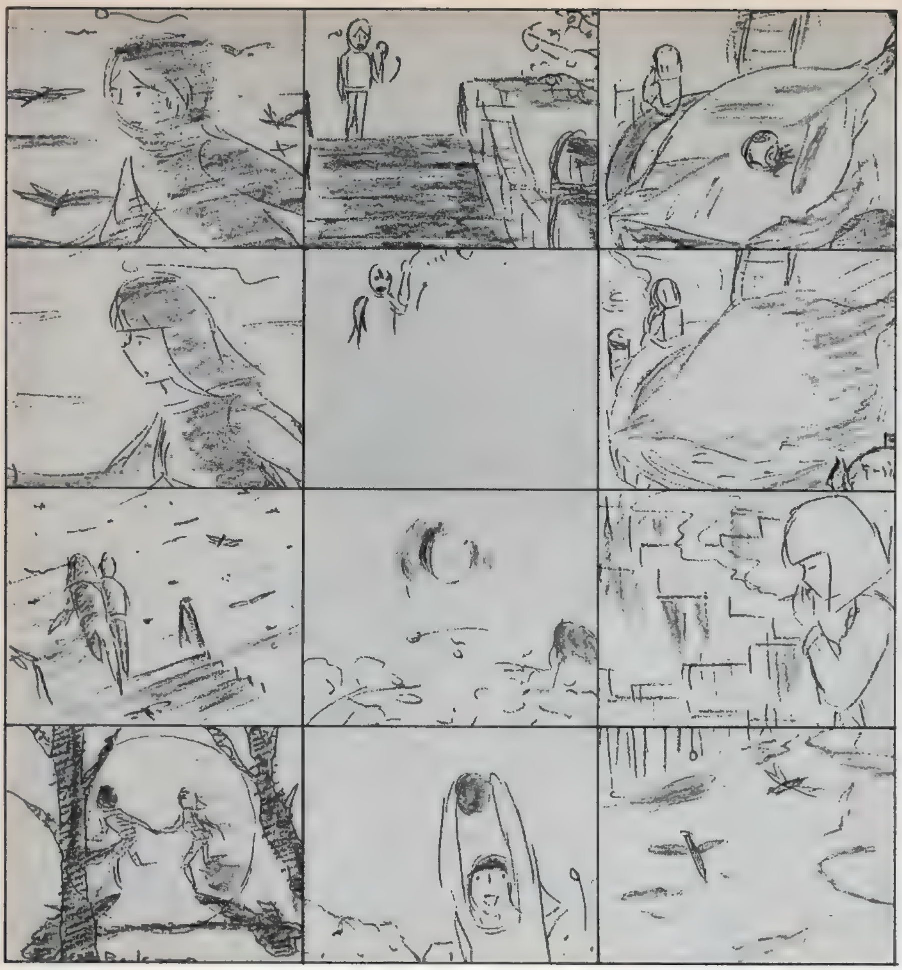


▲桜の葉は赤くなる

ストーリー上でいえば、秋はクライマックスへの大切なステップである。浩のメルヘンに、いまひとつのりきれない裕子が、浩のリードで初めて自分自身のメルヘンを見つけるシーン。

〃初めて同じ夢を見る〃という導入部である。

裕子の手をひいて駆け出す浩。そして、ふたりのバックに輝く、赤くて大きな夕陽が、とても印象的である。長く伸びた影と、シルエットの前景に、やがて捨てられた人形が重なる。



シーン分析

短い中にキラリ

秋は、春と同じように、街中の小さな自然も、はっきりとした季節を表現する。『街角のメルヘン』でも、赤く色づいた桜の葉や、人工の池の上をゆくアキアカネなどが描かれている。そして、このシークエンスは赤を基調にしている。秋のイメージとして、最適の色だ。

浩と裕子が駆け出す時の夕日の赤は、人形の見つめる海を染める赤い光にだぶり、メルヘン部分へスムースに変化していく。見ている人も、裕子たちと同じ夢に入りこむように。

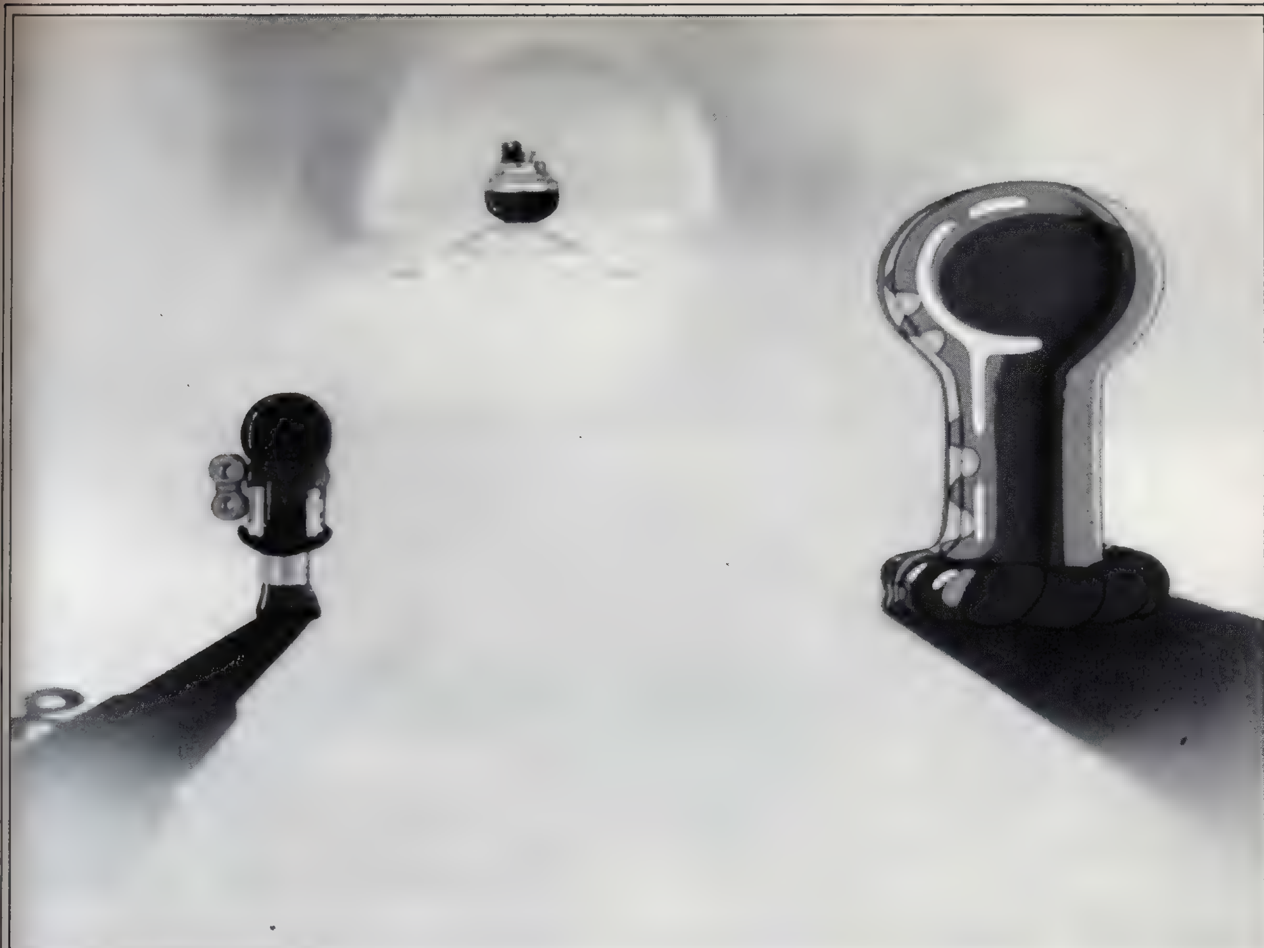


▲秋のシーンは赤が美しい

カット	内容	人物	セリフ
216	梨を食べる裕子。 モグモグしながら。 裕子、浩の方をむく。	裕子	（SE）カリッ 「うん、それから……」 ――間―― 「ん!?」
217	ノートを閉じる浩。		（SE）パタッ
218	浩、ノートを見たまま。 キョトンとする裕子。 噴水の所にすわっているふたり。	浩 裕子 浩 裕子	「面白くない？　おれの話」 「なんで？」 「どこかのってない……」 （ホッとしたように）フム……
219	裕子、指にトンボを乗せて、んッと顔を上げる浩。 そしてゆっくりと裕子の方を見る。 浩の顔に笑みが浮かぶ。 トンボがパッと舞い上る。	浩	けっこう楽しみにしてるんだけどな………」 「!! ……」
221	浩と裕子。 自分でも目を閉じる浩。 そんな浩を見つめる裕子。	浩 裕子 浩	「ね、目を閉じて」 「エッ……？」 「いいから、いいから」
222	素直に目を閉じる裕子。	浩	「そして、気持ちをらく～にして」
223	小さくうなずく裕子。	裕子 浩	「うん……」 （off）「なんか浮かんでくるだろう？」
224	（裕子の主役） 闇の中に、もやもやしたものがゆっくりーNして。		（M）『ブリキ・ロコモーション』

光と音楽と動きのメルヘン！

★人形とロボット、そして捨てられたガラクタたちが光となって躍るこのシークエンスは、BGMとアニメが融合している。



▲船を見送る人形。夕日と長い影が寂しい

光が形を変えて、やがて躍り出す！

浩と裕子が走りはじめると、周囲の景色は、捨てられた人形や電球、テレビなどに変わっていく。そして、その画面の中央に、光を反射する船の航跡がひと筋——それを、見つめているブリキの人形。長く伸びた影がうら寂しい。

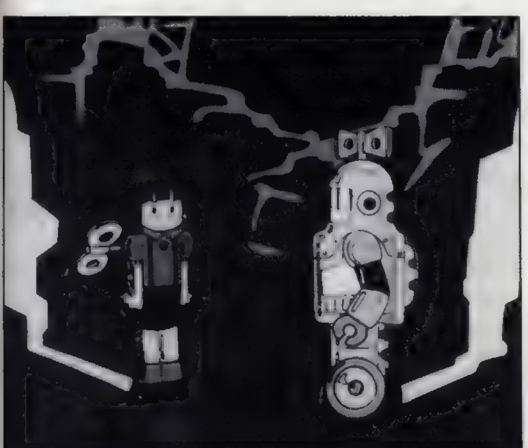
人形は、またも乗れなかった船を見送っている。人形が夢見る世界へ通っている船なのだろう。その船のスタイルも、オモチャ風なのが楽しい。やがて人形は、ガラクタの山の中で、オモチャのロボットと出会う。ロボットは、人形の心を知り、ここが、彼女の求めた地だと教える。すると、ガラクタの山の中から、光が発せられて、テレビが、空カンが、こわれた自転車のホイールが輝き出す。

キラキラ輝き出す光は、やがて人形とロボットを照らし、彼らも同じように自ら輝きを放つのだ。

その後は、この輝くガラクタたちが、画面を縦横に動きまわる。光が立ちのぼり、舞いおり、光を放ちながら空カンが楽しげに転がる。蛍光灯はついたり消えたり、ネコのオモチャは走りまわる。

やがて人形は、女の子に変化してロボットと躍りはじめる。光の中の女の子とロボット。光のトンネルや、からみあうさまざまな色——動きと色のクライマックスともいえるシーンである。

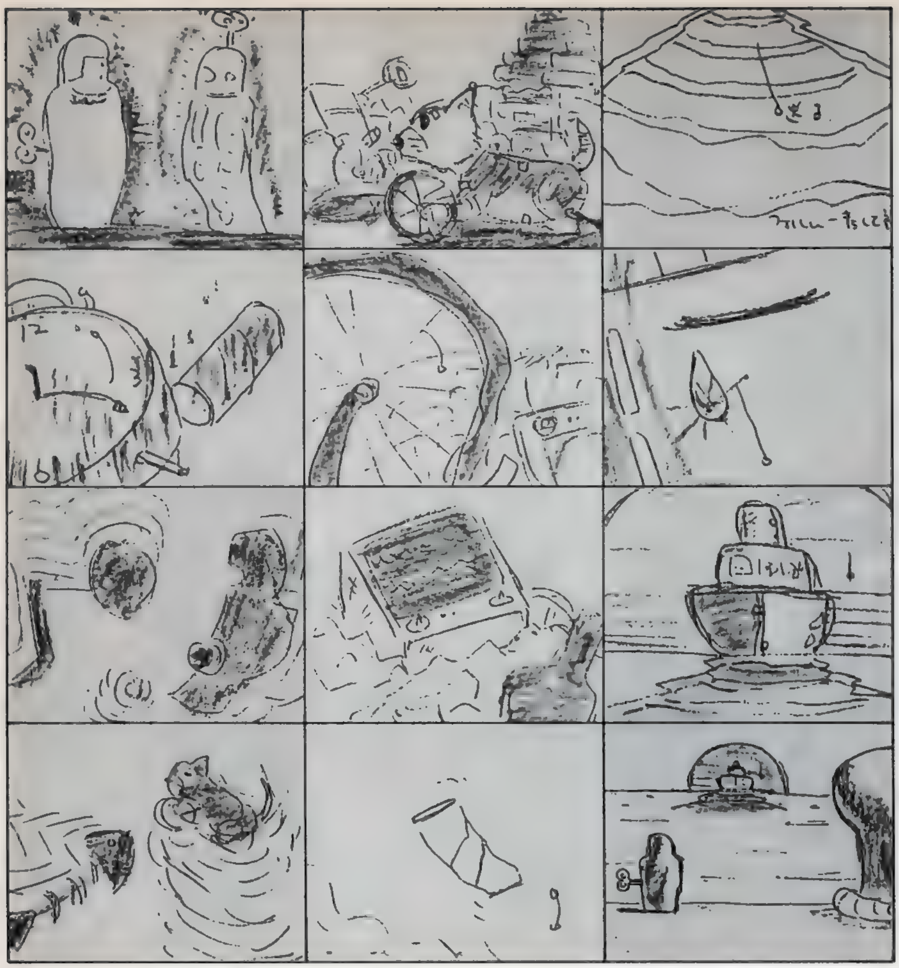
そして、その中にアキアカネがだぶると、再び現実。「見えた。私にも」という裕子のセリフが印象的だ。



▲ロボットと人形



▲光るガラクタたち



シーン分析



▲やがて光に変化する

物語のない物語

ここは、本当にストーリーのないストーリーといったところで、たくさんのガラクタや、女の子に変わった人形、ロボットの躍りと光の乱舞が美しい。

コーラのカンや自転車、ポスターなど、身近な道具や物が、たくみにアニメートされている。一見、コンピュータ・グラフィックスか、スリット・スキャン風の動きもちりばめられて、新しいアニメーションの一方向を示している。BGMは『ロンリー・ローラー』。

カット	内容	人物	台詞・SE
229-3	夕日にむかって去ってゆくブリキのオモチャ風の大型船。岩壁に女の子がポツリといる ブリキの自動車が通る。 水平線へ船が消える。	裕子	(SE) ボ〜〜〜 (off)「そう、わたしは人形だった…… ← 遠い、まだ見ぬ国へ旅する人形…… ←
229-4	涙を流す人形。 後ろをネジが流れてゆく。 バックがスーッと闇になり、人形がくるくる回転しながら、闇に消えてゆく。 (涙を残しながら)		でも…… ← 私は、こわれた人形……」
229-5	ゴミの山の前を、とぼとぼと歩いてゆく捨て猫。 曲った車輪がゆっくり回る。		(SE) ジ〜、ジ〜 (SE) キ〜、キ〜
229-7	古くなったテレビが、時々映る。		(SE) バシッ、バシッ
229-8	生き物のように転がる空カン。クズの山にぶつかる空カン。 山が崩れ、女の子の人形が見える。		(SE) カラン、カラン (SE) カシャ ガラガラ
229-9	ゴミの山の上を破れたポスターが舞う。		
229-10	舞いおちるポスター。破れ、よごれた美しい景色のポスター。 女の子の人形が、じっと見つめている。		
229-11	悲しげな表情の人形。	女の子	「いってみたい……」

裕子のいなくなった街──冬


▲木枯の中を裕子を捜す浩。背景の色も寒々としている

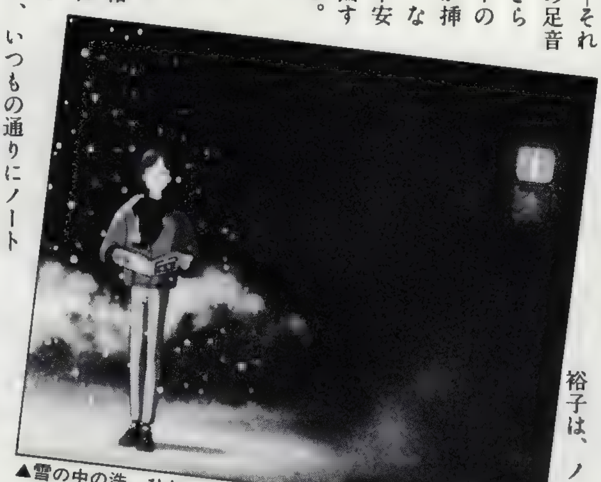
★秋から冬へかけての街のシーンは、裕子を失った浩の心とオーバーラップする。木枯や雨が、暗く冷たい冬を演出している。

裕子を捜す浩──その肩に雪が降る

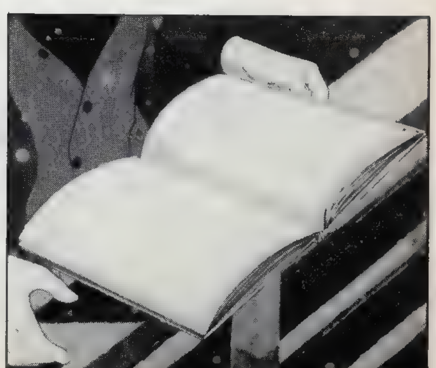
冬のシークエンスの始まりは、これまでとは少し違っている。枯葉が水に沈んでいくカットの後に、大勢の足音──それも急ぎ足の足音が入り、さらにパトカーのサイレンが挿入される。なにやら、不安をかもし出す演出である。

そして、浩を待つ裕子に、何やら知らせる暴走族。裕子は、それを無視するかのように、いつもの通りにノートを片手に地下道で浩を待つ。

春のシーンの時と同じように、光と影がくっきりと映し出される、切れ味のいいコントラストの美術だ。


▲雪の中の浩。ひとりぼっちの寂しさ

そして、その裕子に警察手帳を示し、周囲をとりかこむ刑事たち。裕子の手から「街角のメルヘン」のノートが落ちる。

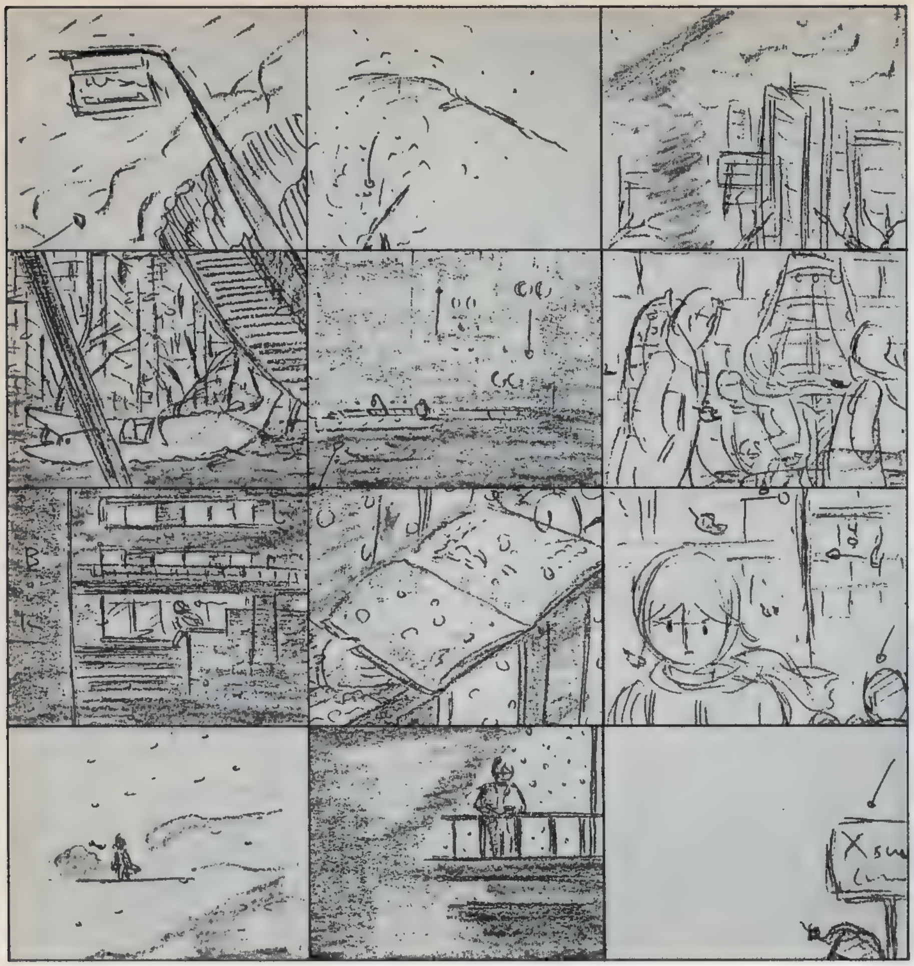

▲何も書かれていない絵本

浩も、その近くにいるのだが、裕子の姿は、刑事の陰にかくれて見えない。

裕子は、ノートを拾いながら、刑事の足ごしに浩を見る。刑事に浩のことをきかれ、首を横に振る裕子。

ここまでは、ほとんどサイレントで、SEも少ない。それだけに、キャラクターの心情がよく伝わってくる。

やがて、遠のくサイレンの音とともに、立ちつくす浩のバックが暗くなり、雨がオーバーラップしてくる。雨の中で、浩は裕子を捜している。雨が上り、やがて雪──白く雪化粧した街が、冷たく美しい。



シーン分析

浩の心の描写が

『街角のメルヘン』の中でも、冬の部分は、短いカットで浩のいらだちを表している。時には浩にオーバーラップして、ネオンや昔の裕子の友人たちの目が重なり、これまでの静かな季節の描写と違った、ストーリー性の濃いものとなっている。

裕子の噂をする声が消え、オーバーラップしたネオンも消えると、たったひとりで歩道橋に立つ浩のカットにかわる。雪の中、街頭に照らされた浩のこのカットは、さらに孤独感を強調している。



▲雨の中をゆく

271	風が吹き抜ける歩道を歩く浩。 手には絵本を持っている。 『街角のメルヘン』の絵本がIN して、 OUTしていく。 浩の両側に、看板や人垣が流れてゆく。 同じ。 浩の影が動いてゆく。 ス～と雪がINする。	浩 男A 女A 女B	(off)「街角のメルヘンはできた……だけど…」 (off)「裕子？ 18歳？……さあ……」 (off)「ユーコ？ねえ、あんた、ユーコって知ってる？」 (off)「聞かないよォ、そんなの」
272	歩く浩。 ノートに描いた裕子の絵がIN・OUTする。 歩く浩。 チラチラ雪が降る。	男B 女C	(off)「おい、この絵、あいつに似てねえか？」 (off)「ほんと。でも、ユーコなんて名前じゃなかったよ」
275	雪の中を、絵本を手にして歩く浩。 ネオンサインの照り返しをうける浩。		
276	高層ビルの窓に明かりが並ぶ。 手前を落ちてゆく雪。		
277	三角ビルの前の人工ツリーが点滅している。 降りしきる雪。		
278	街路樹に積もった雪。 雪の重みに耐えかねて、落ちる木の枝。		(SE)ザザッ

コウモリ・女の子・凍った街

★冬のファンタジックなシークェンスは、浩ひとりの心象だろう。裕子を失った浩が見る寂しく、悲しいメルヘンの世界。



▲雪が浩に幻影を見せたのだろうか!?

凍ったビルの群と人形を持つ少女…

歩道橋の上の浩から、このシークエンスは始まる。浩は、歩道橋の上から、ビルの間を走ってゆく少女の影を見て、それを追っていく。降りしきる雪が、街灯の光に照らされて白い。

少女を見失い、あたりを捜す浩をかすめてコウモリが飛ぶ。不気味な光の尾をひくコウモリと、人形を持った女の子という奇妙なとりあわせが、不思議なイメージの世界を描き上げている。

コウモリは、高く低く飛び、そのたびに街は氷に包まれる。白く凍りついたビルを背景に、少女がブランコに乗っている。そして、そのブランコも凍りつき、砕け、少女は放り出される。それを笑うように飛ぶコウモリ。やがて背景は、花園となり、舞う花吹雪の中に少女は消える。花が舞い上ると、その下にはガラクタの山が現れ、再び降ってくる枯葉…。

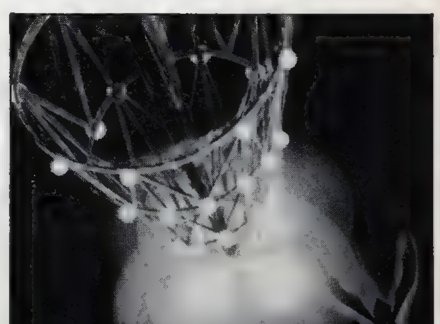
少女は、暗い森の中を、不気味な赤い目に囲まれて歩く。その赤が画面いっぱいになると、夕焼け空に変わり、風とともに赤トンボの群が画面を横ぎっていく。

赤トンボを追うように、シャボン玉が飛び、少女はその中に吸いこまれる。

画面は、やがて砂が風に飛ばされる浜辺となり、遊んでいた少女に、巨大な波が襲いかかる。荒れる波にのまれる寸前、光の蝶が少女を包み、上空へと舞い上る。最後に、少女の体に人形のようなつぎ目が見えるのが、ちょっとした衝撃。

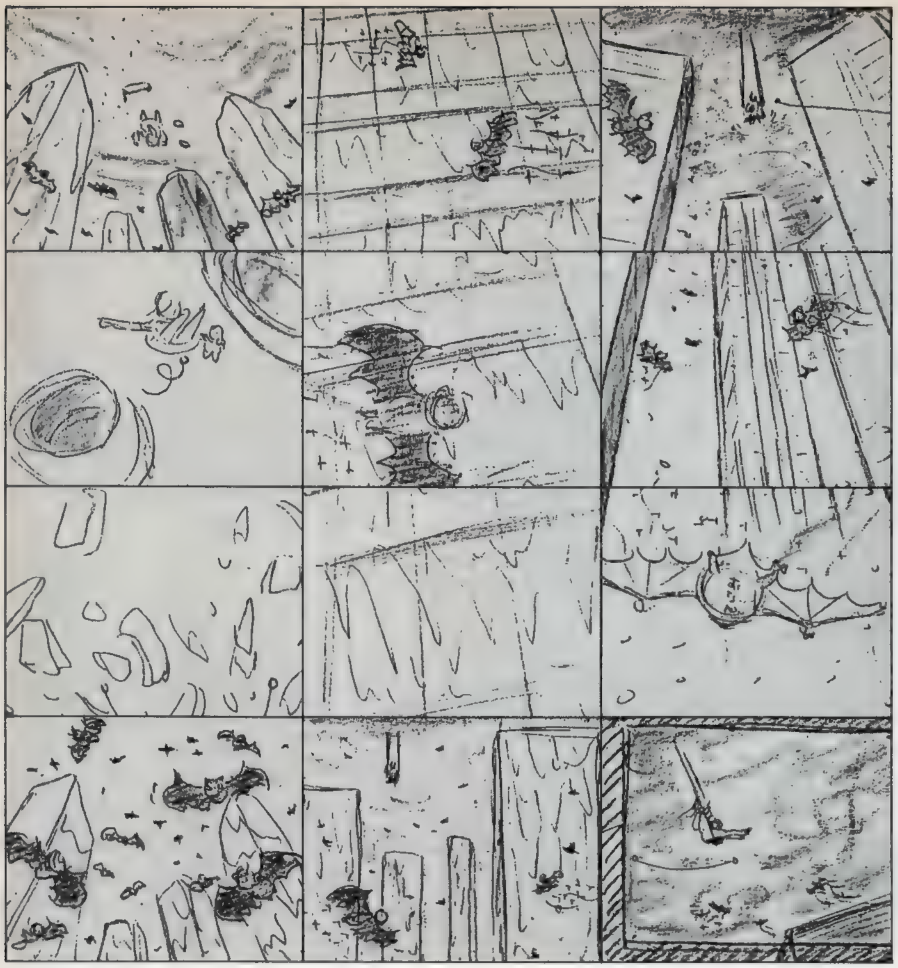


▲ビル街を不気味な影が…



▲コウモリが雪の中を飛ぶ

シーン分析





▲ビルを凍らせるコウモリ

捨てられた人形

赤トンボ、ガラクタの山、花園と、もう気づいているように、これまで浩と裕子が見てきたメルヘンの世界の一部が登場する。それは、これまでのように"楽しさ"ではなく、くちはて、捨て去られたものである。

やはり、浩の心情とオーバーラップしているのだろう。人形を手に、雪の中をゆく少女は、そこがどんな場所であろうと無心である。人形に話りかけ、ひとりで遊ぶ。その少女の服が破れ落ちた時、少女もまた、一個の人形であるとわかるのだ。

297-30	297-31	397-32	297-33	297-34	297-35
白い墓のようなビルの闇の少女。はいていたサンダルがぬげて、手前へ落ちてくる。 闇にあたって砕け散るサンダル。 笑うように乱舞するコウモリ。	少女。 花園の上をかすめて、闇に吸いこまれてゆく。 舞い上る花。 闇に消える少女。 次々と舞い上る花。 花の下にあったガラクタが現れる。 舞い上った花が、枯葉となって舞い落ちてくる。	暗い森の中。 手前を横切る巨大な生物。 人形をひきずりながら、さまよい歩く少女。 スウッと現れる人形の顔。	振りむく巨大な生き物。 そのまっ赤な目。	歩く少女の奥に次第に増えてゆく赤い目。 目の赤い色が強烈になって、画面がまっ赤になる。	夕焼け空。 草原で少女が人形をあやしている。 一陣の風が吹きつけると、草原から赤トンボが舞い上る。
（SE）キャシャ〜ン （SE）ギャ〜ギャ〜					

冬が去り、木の芽もふいて・・・



▲春の空に舞い上る裕子。蝶のように自由に飛ぶ姿が美しい

★冬の暗いシーンから一転して、再びめぐってきた春は、よけい明るく見える。その中でも、裕子の飛翔シーンが美しい。

蝶の羽と春の大気
裕子の新しい春！

降りしきる雪がフェード・アウトすると、闇の中に光がさしてくる。そして、蝶が舞いはじめる。舞い落ちてくる花が、春のおとずれを告げるカットである。

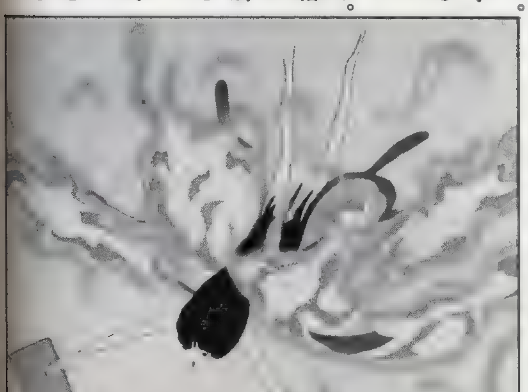
水滴が枝からたれ、水たまりの水に陽光が反射する。花と光の明るさに、思わずホッとする部分だ。そして、トップシーンと同じように、カメラは電車からはき出された人と、その中の浩を追う。人ごみの中を走る浩は、一年前と変わらない。浩のシルエットの中に、裕子との出会いのシーンが挿入され、カメラは地下道から外へ出る。

外は、桜の花ざかりである。その桜の花の下で、裕子は浩のノートを見ている。カットバックして、再び走る浩。別の場所にいるふたりが、同じ『街角のメルヘン』を読む。舞い散る桜の花の中で、裕子は蝶に変わる。胸に抱いたノートと、広がる羽。花の中をゆく裕子は、今、サナギから目覚めた蝶——。

裕子は空に浮かぶ花に腰をおろす。その花が、クルクル回転しながら落下し、花ビラが落ちてゆく。そして、再び現実。

裕子は、声をかけてきた青年に背をむけると、ゆっくりと公園を出てゆく。その寂しそうな後姿の手前を鳩の群が飛んでゆく。

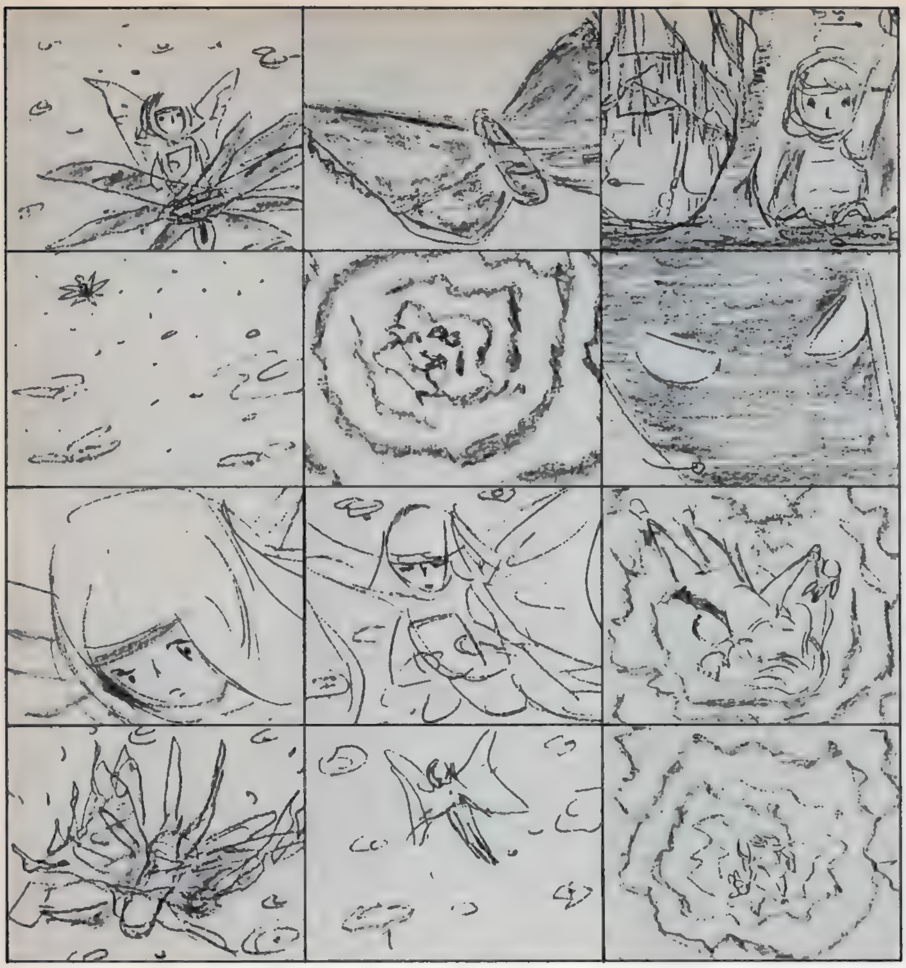
再びカメラは、桜並木を歩く浩をとらえ、すぐにカットバックして、逆方向にゆく裕子にかわる。そして、浩が裕子を見つけるシーンへ、春の街の物語は進んでゆく。



▲花から落ちる裕子



▲春の公園と少しかすんだビル



シーン分析

新しい出発へ！

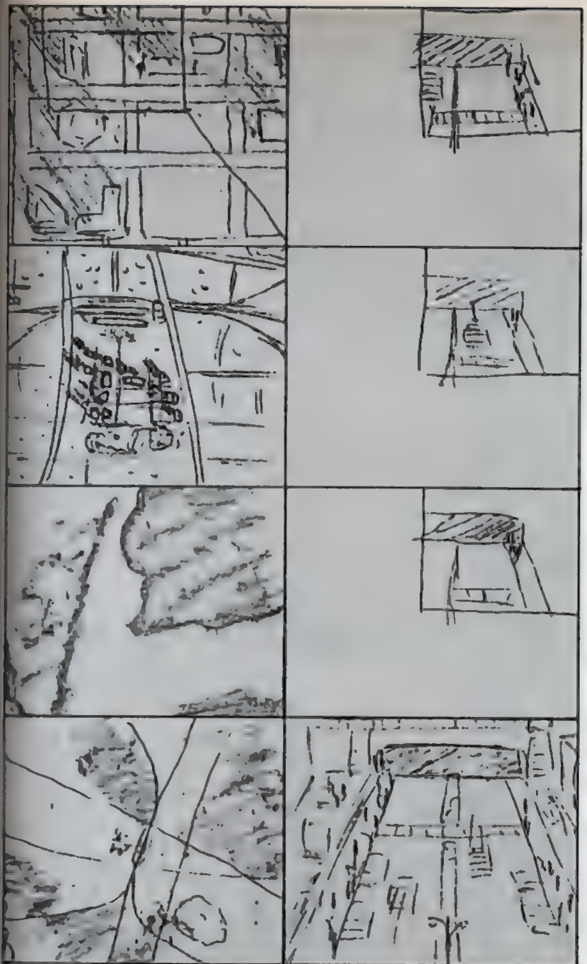
浩のノートを手にした裕子が、蝶のように舞うシーンは、冬の間、彼女に何があったのかを感じさせる。そして今、裕子が何を望んでいるのかということも……。

声をかけてきた青年から離れていく裕子は、以前のような不良っぽさとは違った、もっと別の強さを持っているように思える。浩という存在が、彼女にとって必要だということも、大切に持っているノートに表れている。そして、その気持ちは、見ている者の気持ちと同じなのだ。



▲公園の近くの道路をふたりは逆方向へ歩く

315	ボロボロのノート。 裕子。	裕子	（ｏｆｆ）「この街に春はないというけれど…… ← 本当は確かにあるんです」
317	走ってくる浩。 立ちどまって、ゆっくりとバーガー・ショップを見る。		
318	カップルがすわっているバーガー・ショップを見ている浩。		「ごらん。この街の春を……作られた花壇……
319	浩、小さくつぶやく。		← （つぶやくように）作られた並木道……」
320	水たまりに浮いている桜の花びら。		
321	公園のクジラにもたれている裕子。	裕子	「本当の自然は、どこにもないように見えるけど
322	裕子。 フワ～と桜の花びらが舞い上ってゆく。 いろいろな花が上昇してゆく。 裕子も上昇してゆく。 裕子の背に羽がフワッと現れ、一回はばたく。		← でも、本当の春は、確かにあるんです…… 確かに……」
324	自ら羽ばたき上昇してゆく裕子。 グーとアップになったり、ロングになったりする。 手前に大きく花がＩＮして画面いっぱいになる。 花の上にすわって、羽を休めている裕子。		



シーン分析

ふたりの再会…

浩と裕子は、再会する。裕子と同じ道の反対側を歩いてきた浩は、歩道橋の上から裕子を認める。花びらのむこうに裕子――パッと明るくなる浩の表情が嬉しい。

車道を駆けぬけ、植こみにつまずき、通行人につきあたって浩は走る。浩の呼ぶ声に裕子がふりむき、やがてふたりは並んで歩きはじめる。

特別に、感情を前面に出さない演出が、逆に大きな感動を呼びおこす。浩の方へ、わずか2～3歩走りよる裕子の足が、そのすべてを表している。春らしい、美しく明るいラストシーンである。



▲カメラが上っていく



▲再び新宿の街が見える

342	343	344
走る浩。 植こみを飛びこえ、車道へ飛び出す。 急ブレーキをかけるタクシー。 もう一台をよけて走る浩。 植こみにぶつかりながら走ってゆく浩。 通行人をかわして走る。 今度は、通行人にぶつかり、よろける。 そのまま、また人にぶつかり、今度は倒れる。 すばやく起き上り、再び走り出す。 裕子の名を呼びながら走る浩。 横のゴミをけとばし、なおも叫ぶ。 裕子、立ち止まり、振りかえる。 追いつく浩。 二、三歩かけよる裕子。 しばらく見つめあうふたり。 やがて肩を並べて歩き出す。 そして、地下道へと消えてゆく。 通りの全景。	新宿の街。 （俯瞰）	新宿の街、全景。 流れてゆく雲。 画面、まっ白へ。
OL	OL	FO

※
OL（オーバーラップ）
FO（フェードアウト）

●『街角のメルヘン』のストーリーを彩る街や夢の国…
小林七郎美術監督と美術スタッフの描くメルヘンランド

SHICHIRO KOBAYASHI'S

小林七郎メルヘンランド

MÄRCHEN LAND

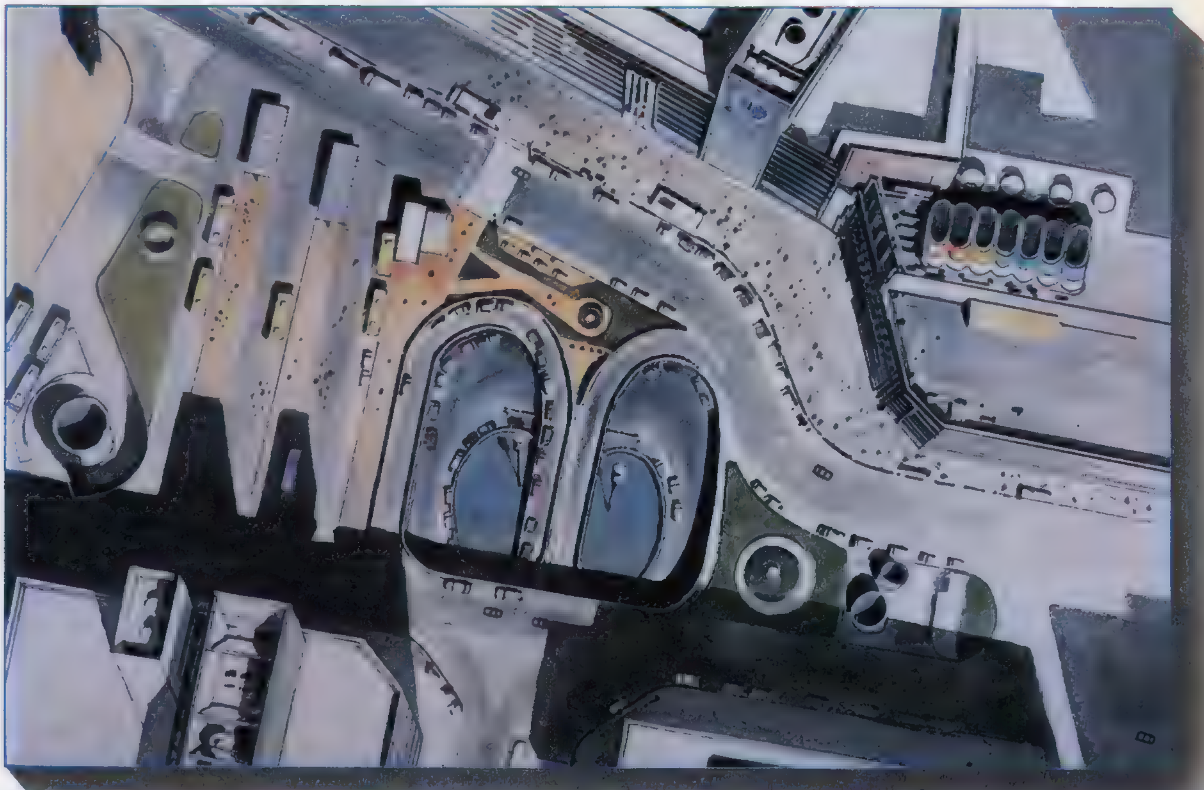




『街角のメルヘン』は、現実の街東京の新宿と、浩の生み出すメルヘンの世界のコントラストが美しい。それらの舞台となる美術は、これまでにない優しい色調のものでまとめられている。

街——東京の西の玄関、新宿。高層ビルが空にそびえていつも活気づいている、そんな街のムードを生かして…





右は、冒頭の新宿駅周辺の大鳥瞰図。カメラは、この中心にむかって、グンと降下してくる。そして駅にカメラが入ると、走る電車、改札口の混雑など、いつも見慣れた風景が展開する。そして、浩が、その人ごみの中をぬけてくる。



▲同じく裕子の持っていたポスター



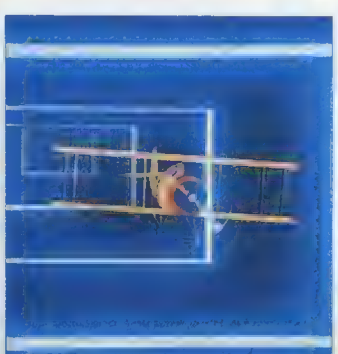
▲ポスターに描かれた絵



▲新宿駅の改札口



▲光で表現されたインターバル



▲現実からメルヘンへの通路!?



春と花とビル　都会の春を表現するこの構図と色彩が
リアルなビル街の季節を演出している。陽の光が美しい





▲淡い色が優しさを感じさせる

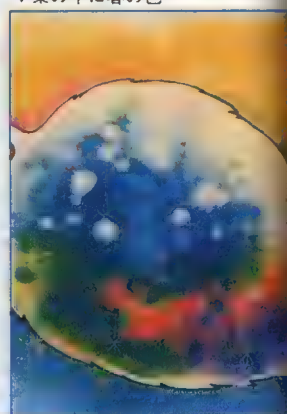


▲セルと背景のバランスが美しい



▲暖色系で春の花が…

▼葉の中に春の色



春の花とビル街という、一見、どこにもありそうなシーンは、まったく斬新な構図で驚かされる。カメラは、ちょうど目の高さ。まっすぐ上をふりあおいだ感じで、図上の桜の花と、さらに高くそびえ立つ超高層ビルが描かれる。そのガラスの壁に、むかいのビルの影が鏡のように映し出されているのもリアルだ。

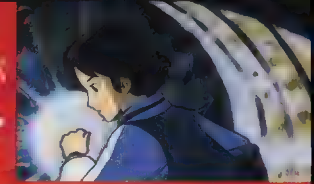


▲春の花に色を塗るネズミの筆



▲リアルな絵とコントラストに注目

街に本当の春があふれる。現実の世界とメルヘン世界が見事にオーバーラップするシーン。コンクリートに花…





高層ビル群をバックに、新宿中央公園の桜がかすんでいる。淡い色調で描かれたビルは、コンクリートとガラスの壁を、わずかに春の色に染めているようだ。そして、公園に咲きほこる桜は、ピンクの雲のよう……。



▲地下から春の色が…



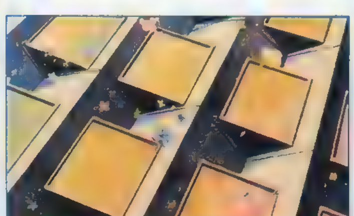
▲葉の上の露



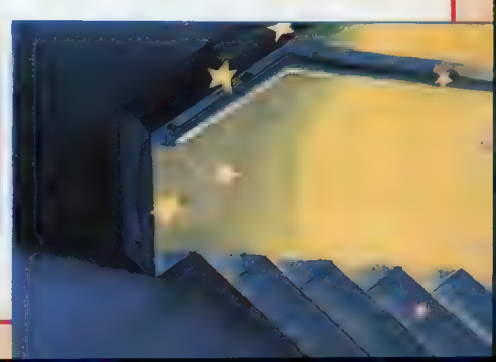
▲人工の池の水面に花ビラ



▲車を包む春の色



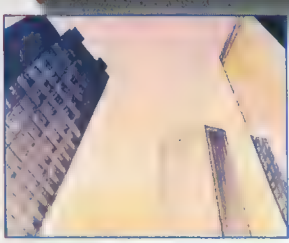
▲花となってビルの窓を



でも——都会の春は、やはり人工の春。夢が去ったとき
そこには舞いおちる花ビラと、陽光を反射するガラス…



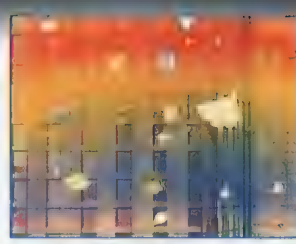
歩道橋のこちらに桜の花。花と花の隙間から見えるものは、やはり人工のものでしかない。パステルと水彩で描かれた桜と歩道橋が、この街の春を表現している。そして陽の光の差す戸外から一転した地下道の闇も、微妙な美しさを表す。



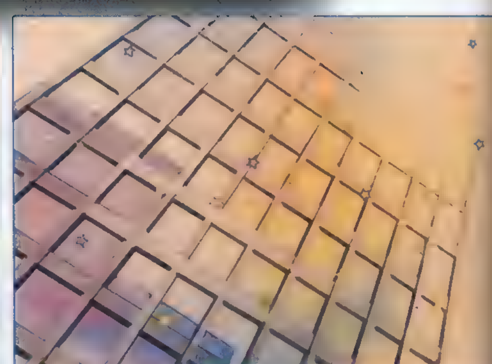
▲春の夕暮れ



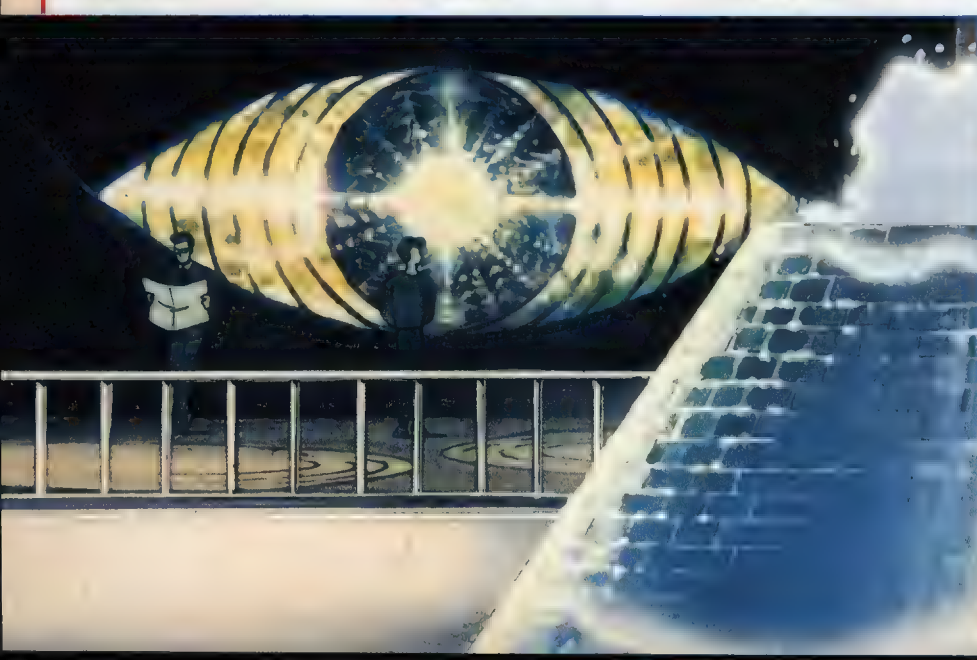
▲花に包まれた街



▲七色の背景が美しい



▲優しい色あいのビル

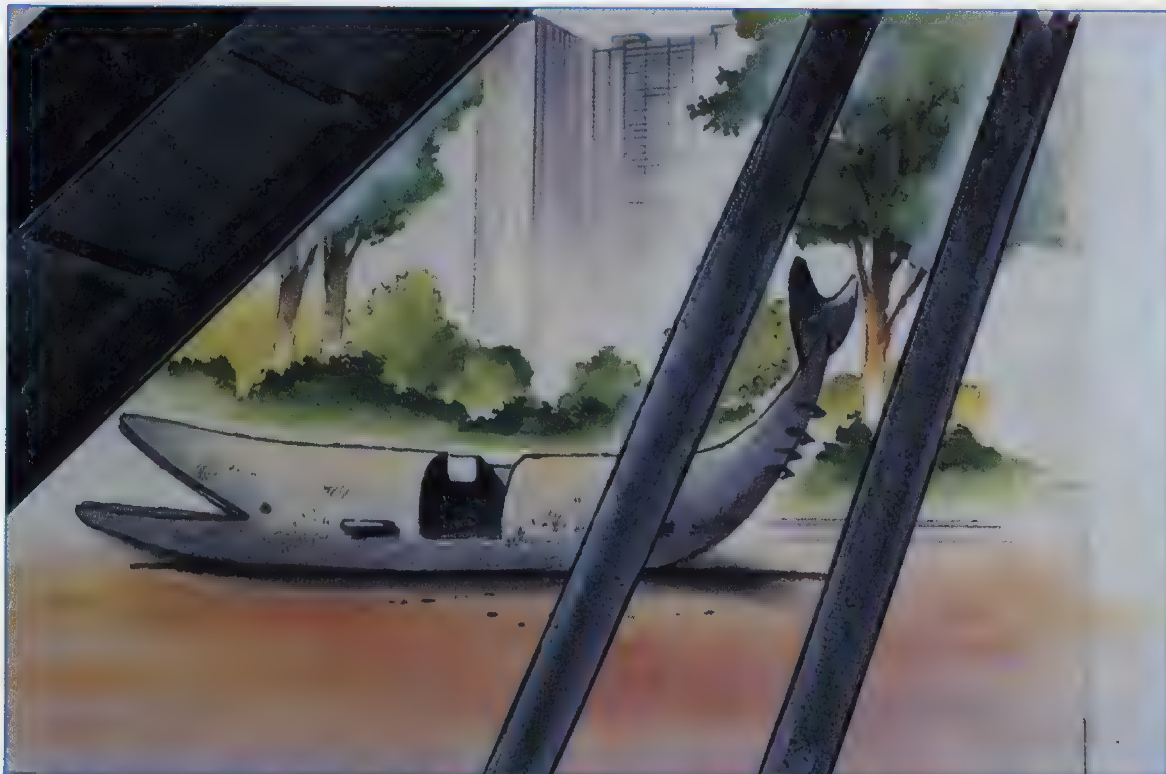




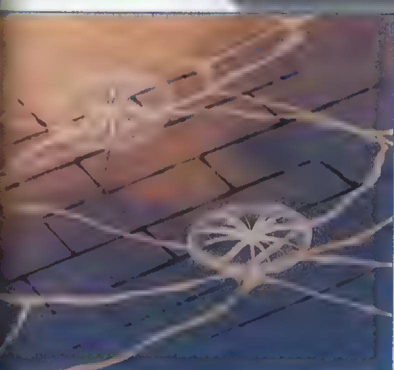
▲淡い色の公園

初夏から夏への街は、陽射しの中でまっ白な輝きを放つ
ビル街を抜けてくる風さえも、どこかなま温いようだ…

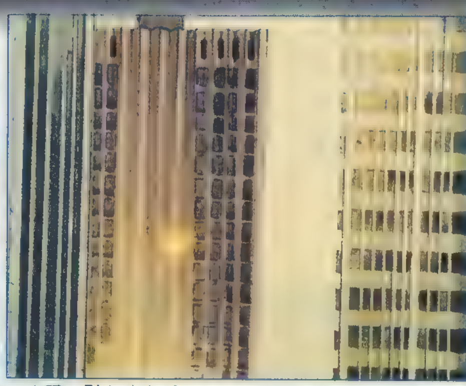




木もれ日の中の公園、コンクリートで作られたクジラ——暑さの昼は、子どもたちも遊びに来ない。白いクジラのザラついた肌が、なんとなく感じられるような美術に、公園の持つさまざまなイメージが広がる。



▲噴水の周囲の水面



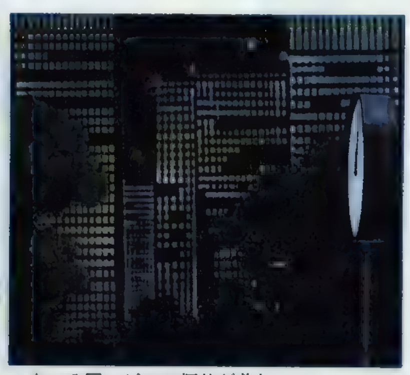
▲太陽の影を映すビル



▲ノートに映し出される次のシーン



▲外の光と中の闇のコントラスト

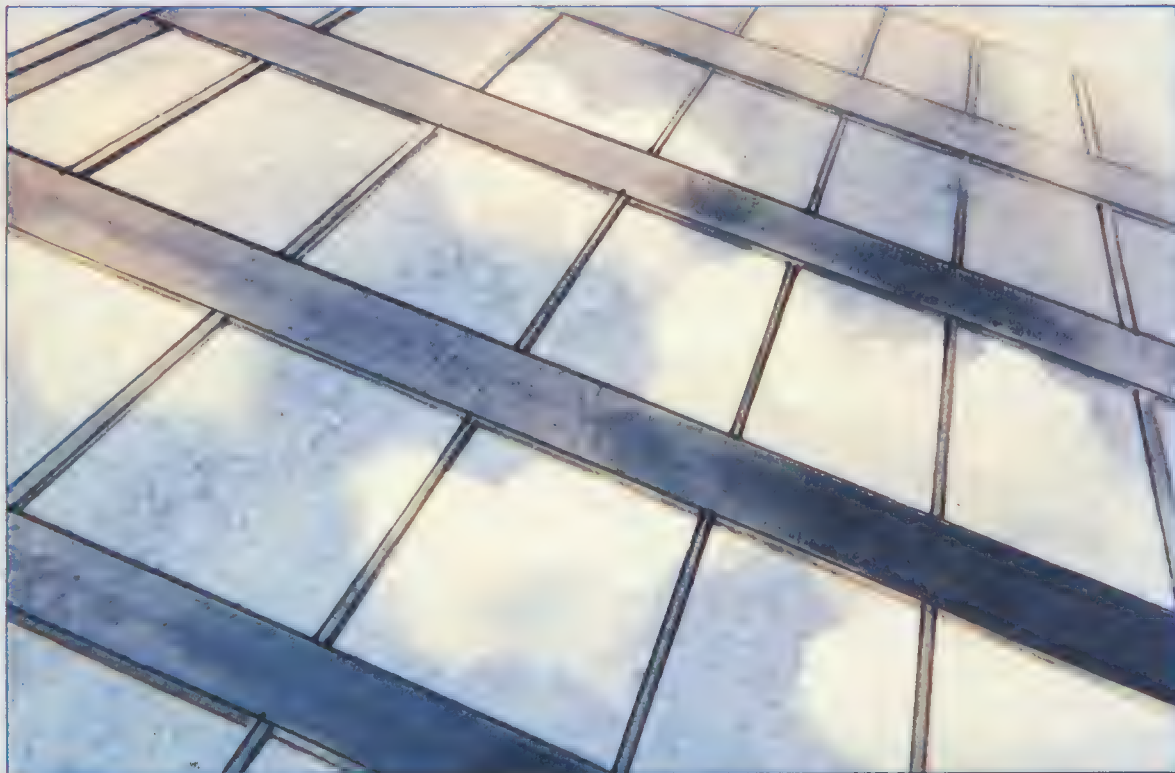


▲夜の公園。ビルの灯りが美しい



SHICHIRO KOBAYASHI'S MÄRCHEN LAND

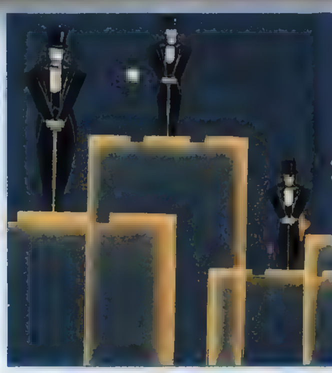
青い空を映すガラス窓か、今年の夏の暑さを感じさせる
川のせせらぎの音やセミの声はなくても、ここは夏―！



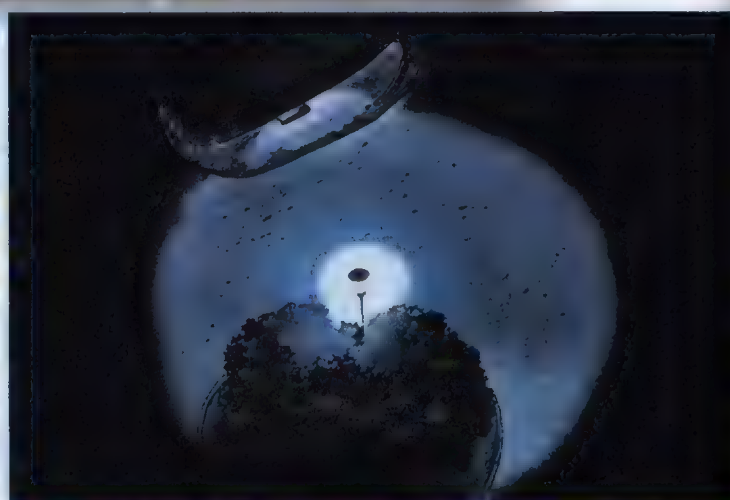
ま上から照りつけ、アスファルトを焼く太陽の光、そして、久々にまっ青に晴れた空をゆく雲。夏の都会のビルの窓には、それらの影が映し出される。光と空と雲――そして、ビルのガラスが、本格的な夏を伝えてくれる。



▲夜空とビルの表現が楽しい

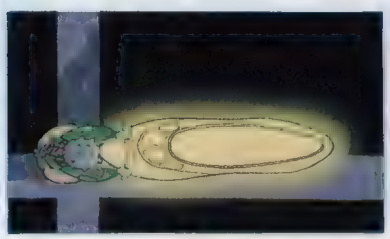


▲一転してメルヘン



▲夜の公園のクジラ





▲靴をみがく少女



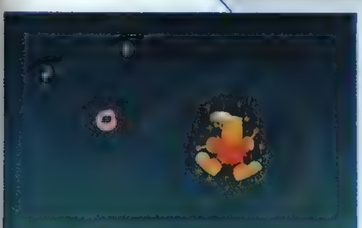
▲光にかわるビル

陽の光のゆれる水面は、幼い頃から夏のシンボルだった
街の中にも、そんな水面がある。コンクリートに囲まれ

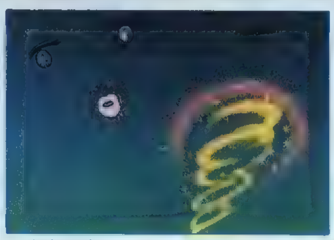




美術の中でも、これは透過光を使ったもの。レンガの池の水面の反射光が、夏の真昼のイメージである。そして、レンガに落ちる、繁った木々の葉の陰も、その黒さゆえに光を表現している。



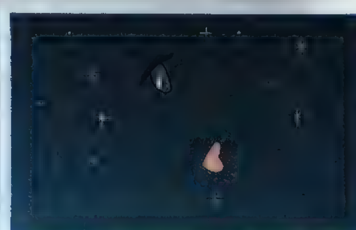
▲そして、靴の精に



▲少女と光



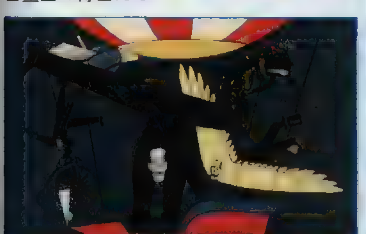
▲ゆきすぎる光と少女の目



▲メルヘンタッチの星空



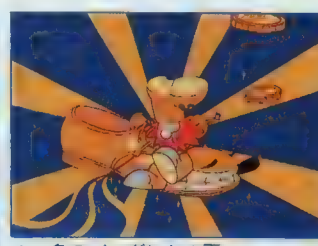
▲星空の博士たち



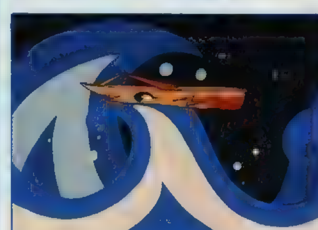
▲遊ぶ博士



▲"光"で描かれた高層ビル街の遠景



▲一色のバッグにセル画



▲図案化された画面が楽しい

SHICHIRO KOBAYASHI'S MÄRCHEN LAND

夕陽の紅が次第に濃くなって、やがて街に夜が来る
日の最後を飾るかのように、金色の光がビルの間に差す



『街角のメルヘン』の中でも、夕陽は多くのシーンを飾っている。紅と紫と、そして金色の矢のような光が、ビルの間から差して、昼の終わりを告げる。夕焼色に染まったビルの窓が美しい。

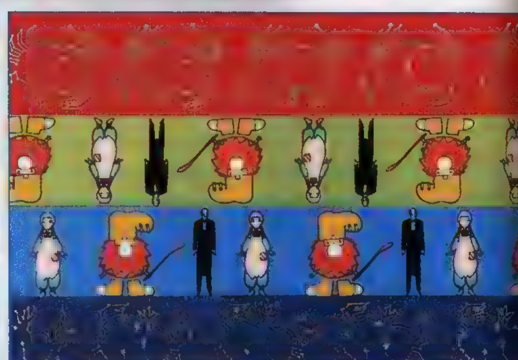




▲月のすまし顔



▲光のグラデーション



▲色と形の楽しさ





▲星座となった少女

アキアカネが水面をかすめて飛ぶ。初秋の都会の片すみ
やがて木々の葉は紅と黄をまじえ、冬にむかって装う…



同じ水面でも、夏や春の色とは違って、秋は淡く、少し寒いような色づかい。黄色のアキアカネの影が水面におちて、秋の気配をただよわせる。水の色と、小さなトンボの動きで街の秋のイメージが展開する。





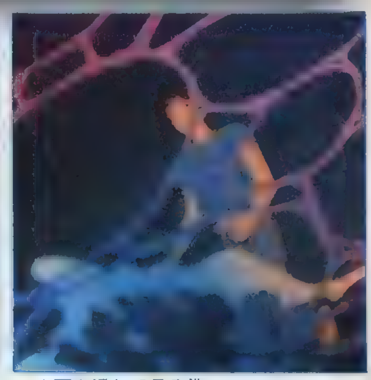
▲微妙な黄と緑が秋を感じさせる



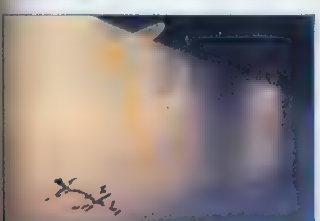
▲風に舞う木の葉。黄の強い色彩



▲同じく裕子



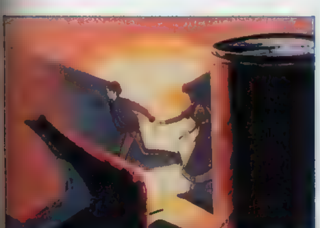
▲水面を通して見る浩



▲静かな水面をゆくアキアカネ



▲黄色くなった木と浩の投げた梨



▲夕日の中を走るふたり



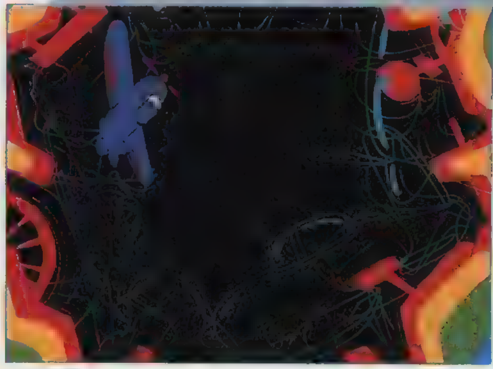
▲アキアカネの群の中の裕子と浩



都会の紅葉は、どこかうら寂しげ。くすんだ木の葉——
鮮やかに色を変えることをせずに彼らは風に散ってゆく

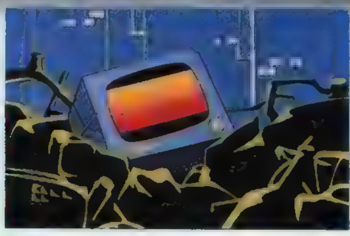


ふと見上げると、公園の桜の葉が紅くなってきた。そのむこうに、秋の空を映したビルの窓ガラス——赤と黄を入れた葉と、バックの白っぽい空を映したガラスが秋の日を感じさせる。木の葉をそよがす風さえ、イメージされているようだ。

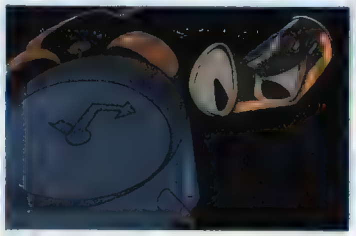


▲光の躍り

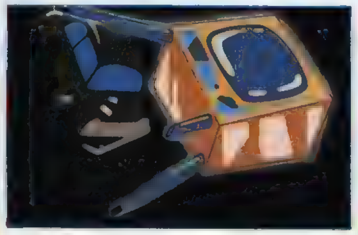




▲デザイン化されたテレビ



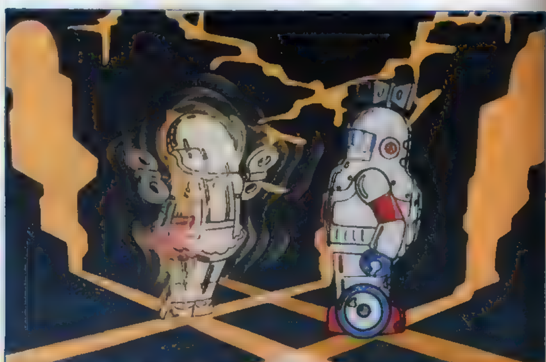
▲黒に浮くゴミ



▲光が淡く現れる



▲一転して黒を基調にした画面



▲光と動きが中心のイメージ

秋の日暮れは、いつもより紅が濃いのかもしれない
すでに茶色に乾いてしまった桜の葉に、紅と金色の光線



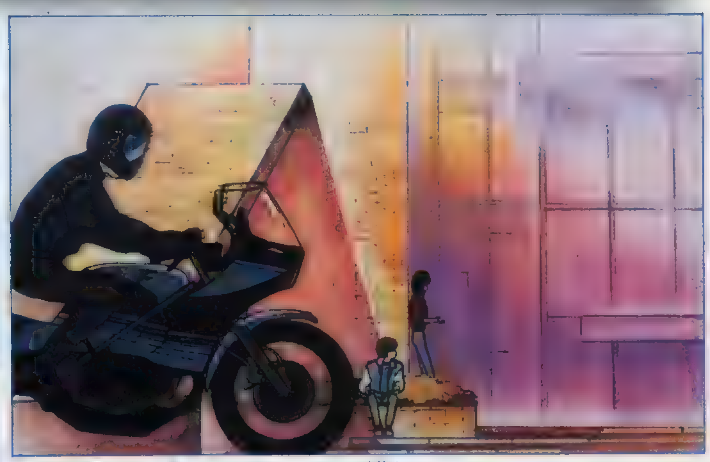
春の桜と同じカメラアングルで、秋の夕暮れが描かれている。茶色っぽく変色して、散ろうとする木の葉のむこうに、大きな夕日を反射しているビルの窓。秋の一日の鮮やかな終りがこの色彩の中にある。



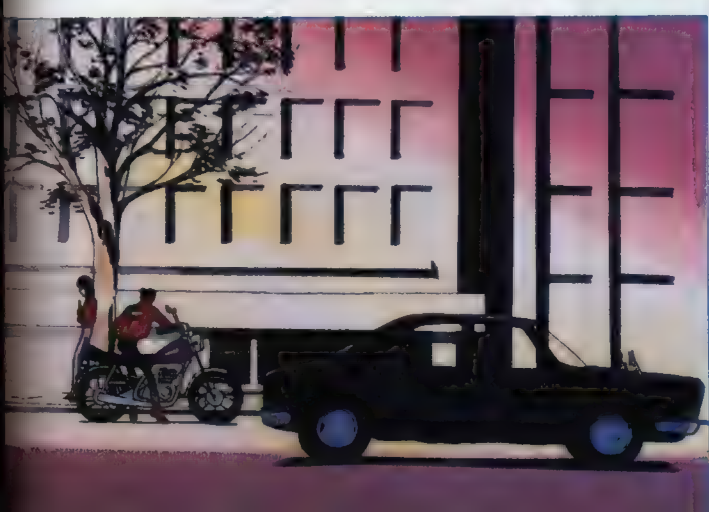


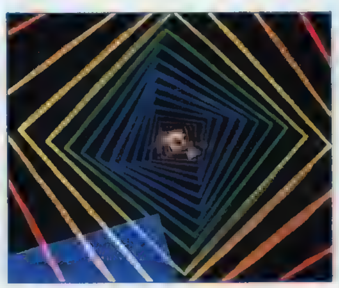


▲さまざまなものが動く

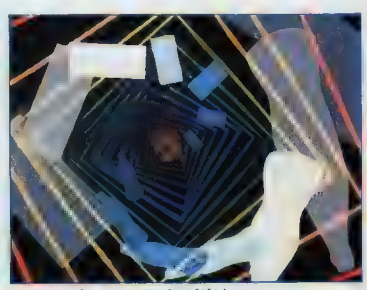


▲夕暮れ時の紅と紫にバイクのシルエットが美しい





▲ピンボールかな!?



▲光のボールの動きが楽しい

SHICHIRO KOBAYASHI'S MÄRCHEN LAND

もう冬― 木の葉もほとんど落ちた公園は、人影も少な
木々の影がテーブルに落ちて、夕暮れ時を知らせている



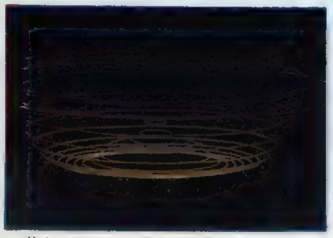
木の影が長く伸びて、誰もいないテーブルにおちている。枝には、わずかに残っている葉が、秋風にさからうかのように、がんばっている。これから冬を迎えようとする街の、どことなく寂しい雰囲気が感じられる。



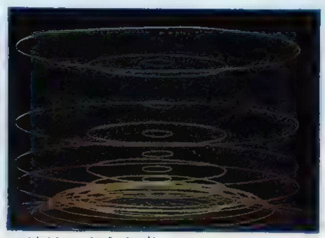
▲人影のないテーブルが水面に映る



▲紫に近い紅で彩られた公園



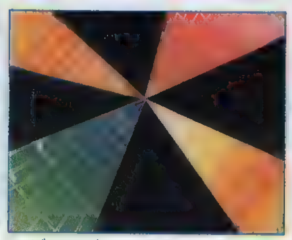
▲美しい動きを見せてくれる



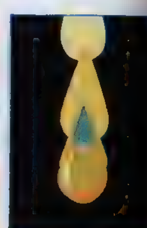
▲波紋のような光



▲飛ぶレコード



▲ビルのイメージ



▲しずく

冬の寒さの中で、街はいつもと変わりなく動きつづける
空気が冷たくビルを包み、どこか白っぽく見える都会の冬

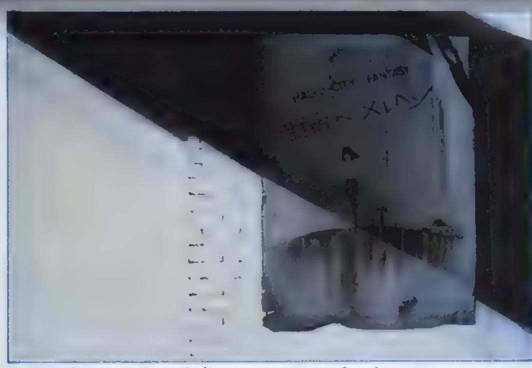


冬のビル街——寒かろうが暑かろうが、そこに建ちつづけるビル。それを背景に、小さなミノムシが冬の衣を身にまとって、枝からぶら下がっている。どこからか木枯しの音の聞こえそうな風景。





▲街灯の光に雪が白い



▲地下道にはられた街角のメルヘンのポスター



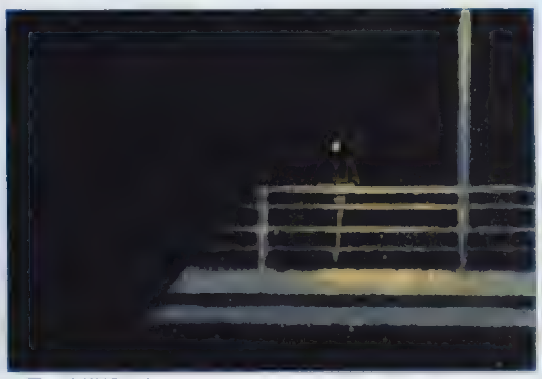
▲冬の雨にぬれる思い出のクジラ



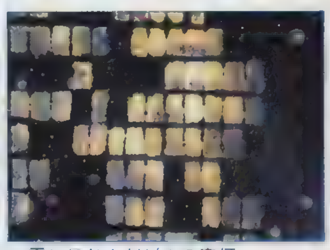
▲雨の道に浩の影



▲ビル街も雪化粧



▲雪の歩道橋の上



▲雪ににじんだビルの窓灯

冬の終りを知らせてくれるのは、赤味を増した木の芽…
昨日降った雪が朝日に溶けて、透明なしずくが空を映



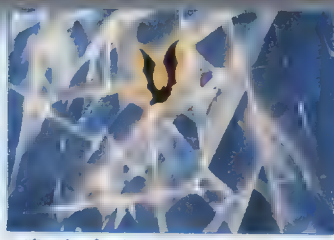
雪の降った翌朝、木の枝についた雪は早くも溶けてしずくとなる。ほんの少しだけ、春めいてきた空――風はまだ冷たいが、確実に春はやって来ている。ふくらみはじめた花の芽と、光の中のしずくが春の匂い。



▲茜空をゆくシャボン玉



▲曇り空の下のゴミ捨て場



▲凍ったビルとコウモリ



▲凍りついた街のイメージ



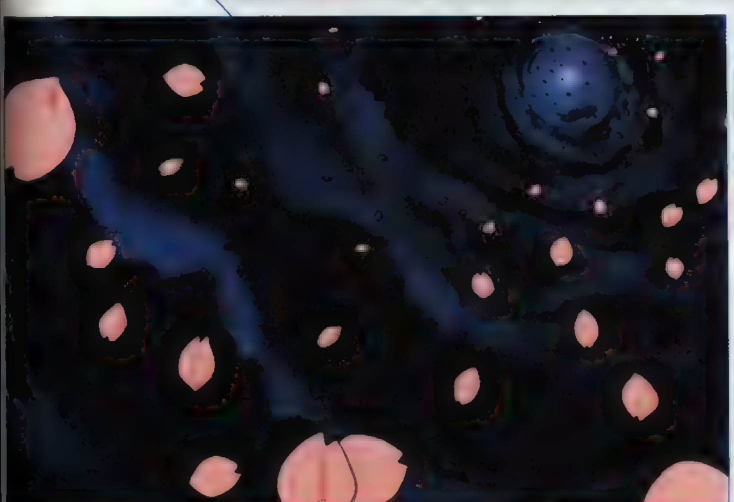


再びめぐってきた春は『街角のメルヘン』のフィナーレ
花があふれ、空は優しい青で輝き、温い風が駆け抜ける

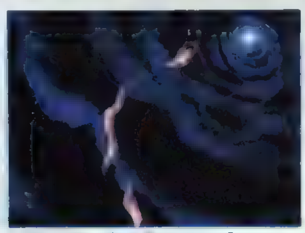




この物語の二度目の春は、春の風そのものといった明るいイメージ。ビルとビルの間からのぞく空も、さわやかな青。そこに飛ぶ花は、裕子の心のイメージなのだろうか。冬から春へ――明るい色が季節をとらえている。



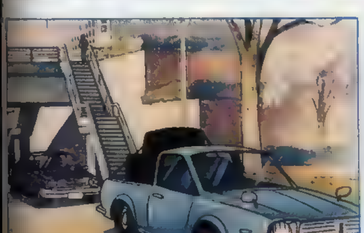
▲春！　花ビラの乱舞



▲暗い空へ光の尾をひいて……



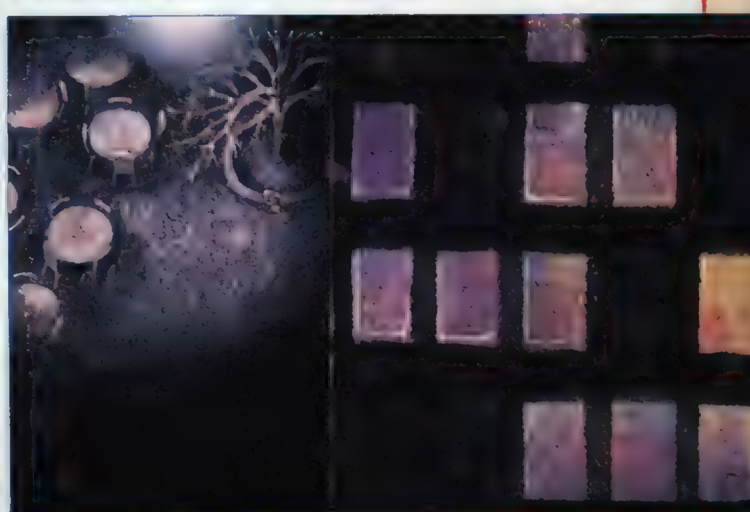
▲冬の海のイメージ



▲街に春が来た。再び桜が開く



▲冬の終りを告げるかのような蝶



▲雪の中に灯が淡い

■思い出の中のメルヘン■

街角のメルヘン1968

首藤剛志氏が、心の中に秘めてきた〝あの日〟
〝街角のメルヘン〟原体験



文：首藤剛志

街角のメルヘン1968

シーン1

1968年 東京・新宿

男の子と女の子の出会い

「街角のメルヘン」が完成しました。

やっと終った……なにしろ、この作品の元になった「18才のメルヘン」を書いた頃から16年も経っています。

当時18歳だった僕が、生まれて初めて書いたシナリオでしたが、そのボロボロになった原稿用紙をかかえて16年もシナリオの世界をうろちょろするなんて、自分でもあきれています。でも、この作品だけは、どんな事があってもフィルム化したかったのです。それも、年をとって18歳の頃の感覚を忘れてしまう前に……。もしかしたら、もうすでに手遅れだったかもしれませんが……。

16年前の新宿副都心は、今ほど高層ビルは建っていず、浄水場跡のレンガ壁と雑草が、当時、そろそろ建てられはじめたビル群と奇妙に調和していました。

そして、西口の地下道から、中央公園へ通ずる一本の道。この道だけは今も昔も変わりありません。

巷には、ビートルズとローリング・ストーンズとリズム・アンド・ブルースと、反戦フォークソングが流れていました。

70年安保が間近で、世の中騒がしく、新宿東口には、フーテンという名の無気力芸術家集団がたむろし、西口駅前には、安保反対の若者達が大声をはりあげて、WE SHALL OVERCOMEを歌っています。おまけに、ベビーブームの頂点の大学受験戦争……。フーテンか、安保反対か、大学受験か……どれかに属していないと若者じゃないと言われそうな時代でした。

でも、そんな時代にどうしても乗りきれない男の子と女の子がいて……安保反対の騒音を横目に見ながら、トコトコと中央公園に歩いていきます。なにしろお金がないから、公園に行くより他デイトをする場所がなかったのです。

女の子は高校を出ると新宿にある実家をとびだし、小田急線の沿線にアパートを借り、アルバイトをして暮らしていました。

なぜ、新宿に家がありながら、家を出たのか、その理由は今だに知りません。なにしろ、家族のこと家のことは話したがらない人でした。でも、彼女には夢がありました。それは外国へ行くこと……外国ならどこでもいいんだ……日本にいると、なまじ言葉がわかるから、相手のウソが分って悲しくなる。外国だと言葉が分らないから、ウソをつかれても、自分であきらめもつくもん……それが外国へ行きたい理由でした。こう書くとえらく暗い女の子に聞こえますが、理由はともかく外国へ行くという人生の目的のある18歳の女の子です。おまけに脳天気のB型ですから、暗くなりようがない。それに加えてボーイフレンドが、これ又、いい加減気質まるだしのB型ですから、そうとうハチャメチャのカップルでした。

「俺は君にウソつかない」インディアンの口調でいいます。

「日本人、皆ウソツキ……」

「では約束する。君が宇宙人に月へさらわれたら、僕は月まで追いかけていく」

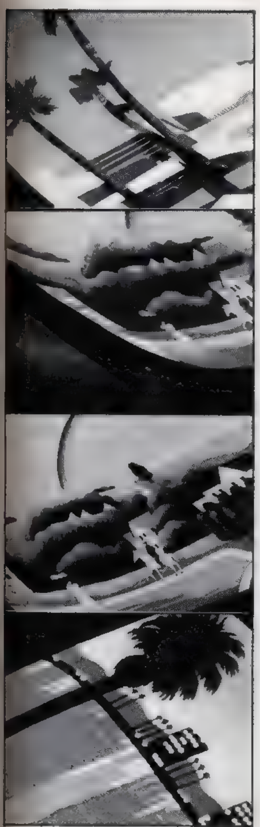
話がリアルにならないんですね。

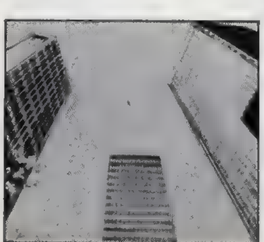
男の子は、大学受験に失敗して、浪人するのも馬鹿〳〵しいと、たまたま本屋で見つけたシナリオという雑誌をたよりにシナリオ研究所というライターの養成所に通っていました。どこかに通っていれば、うるさい親も黙るだろうという極てイージーな理由でした。

「なんたってシナリオライターだ。横文字だもん」

「イラストレーターよりは、地味めでいいかもね」

女の子は、映画にも芝居にも、ましてテレビにも興味を示しませんでした。女の子が男の子を気にいったのは、横文字の職業だという点だけ……脚本家だなんて日本語名を使ったら、さっさと別れていたかもしれません。


▲1984年の新宿


▲副都心の高層ビル群



▲新宿駅西口の人ゴミの中



▲首藤氏の思い出の中の〝裕子〟は、この作品で生命を得た



▲中央公園

シーン2

新宿西口・中央公園——男の子、ケンカを買う!?

いずれにしろ、その自称シナリオライター君は、全く何も書かないライターでした。なにしろ筆を持つのが大嫌いという、物書きとして、致命的な欠点を持っていました。

頭の中では筋を考えます。メモにも書きます。もともと子供の頃から映画は好きでしたし、様々なミュージカルのストーリーを考えてはいました。でもそれが原稿用紙に定着しないのです。

男の子は、女の子に会う度に、原稿にならないストーリーを話します。難しい物語は肩がこるから簡単な話にして……女の子の注文で、男の子の話は子供の童話が増えてきました。

アルバイトで、辞典のセールスマンをやっていた女の子は、人間関係に疲れていたのでしょう。わずらわしいドロついた人間の話を嫌がりました。でも、その時代は、小説も映画も、そんな暗いストーリーが全盛でした。

そして、二人にもちょっと暗いエピソードがありました。「街角のメルヘン」にもありますが、公園でヤクザ風の男達にたかられたのです。時は、アニメのように夏ではなく、冬の真夜中で、公園は人影がありませんでした。

それでもお金のない二人は、公園のベンチで話していました。そこに男が一人現れて、金の無心……お調子者の男の子は、一人なら大丈夫だと、男に殴りかかって、喧嘩になりました。すると、物陰から、男の仲間達が登場……現実はアニメのようにはいかなくて、コテンパンのズタボロ……素早く逃げた女の子が、やはり公園をうろついていた男の人に助けを求め、駆けつけてきた時には、完全にダウンして気を失っていました。意識をとり戻して、仲裁に入った男の台詞を聞いて呆然——

「オレ○○組の××だけどな、ここは俺の顔たてて仲なおりしてくれや」

彼もまたアベックをたかりに来た一人だった訳で、それでも女の子から助けをとわれて、なんとなく勇気をだして仲裁に来たのでした。結局、ズタボロの男の子は、たかりの連中と仲なおりの握手をしておひらき……歯は折れているわ、顔のはれは二週間引かないわ。こっちから殴りかかったから、警察に行く訳にもいかないし、それでも女の子を



▲メルヘンシーンと現実シーン

街角のメルヘン1968

守った気で胸を張ったら、女の子は、
「馬鹿よ、知らない奴と喧嘩するなんて……殺されたらどうする気？」
生まれた時から新宿の盛り場育ちの女の子は、男の子よりずっと新宿のこわさを知っていて、
「自分の身までは守れるけど、あんたまでは守れっこないじゃん」
と、しばらく怒っていました。で、以後、男の子は喧嘩をやめました。もっとも30代の今は、体力、運動神経まるでゼロで、喧嘩したって勝てっこありませんけど……。

シーン3 やがて研究所の卒業間近 "18歳のメルヘン"誕生

そんなこんなで月日が経ち、とうとうシナリオを書かなければならない日が来ました。
研究所の卒業創作という奴です。イージーな男の子は、ストーリーや台詞を考えるのが面倒で、二人をモデルにしたシナリオを書こうと思いつきました。今まで女の子が男の子にしゃべった台詞をそのまま使えば簡単だし、これこそ正に生きた台詞じゃ。
「お前、不良少女、俺、純情なマンガ家志望の学生ね」
「どっこが純情じゃ……」
「それが図々しければ、山本を性格上のモデルにする」


▲夏のイメージ。裕子の表情が寂しそう

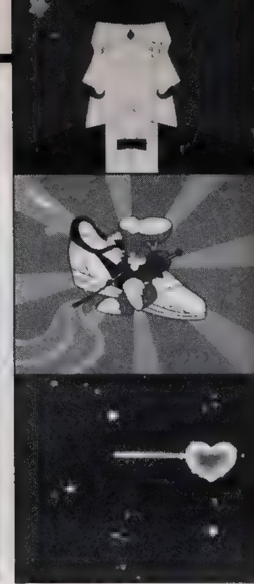
山本浩君は、高校の同級生で、やはり浪人し、マンガ家を目指してコツコツ勉強していました。
かくして、シナリオ「18歳のメルヘン」の完成……ヒロインの裕子は、女の子のちょっと影のある部分そのままで、(明るい部分は、ゴーショーグンのレミーやモモが受けついでいます)……浩は、脳天気シナリオ作家志望の男の子と、マンガ家志望の山本君との複合体でした。

女の子は、「18歳のメルヘン」を読んでボソっといいました。
「売れないね。だって字がきたない」
「売れなくたっていいさ、一人に売れれば……」
「……買うよ」
女の子がシナリオを買うという意味は、男の子がライターになる事に協力するという意味でした。
どこで間違ったのか、シナリオの評判がよくて、一年もたたない内に仕事が来ました。
大江戸捜査網という時代劇です。こうなったら男の子は一人前のライターになったつもりです。家を出て、部屋を借り、自活しはじめました。
女の子は、セールスで疲れ切った体で、夜遅くまで原稿の清書をしてくれました。
新宿の高層ビルのむこうには、安アパートと下宿町が広がっています。南こうせつの神田川と赤ちょうちんの世界です。そして、ほとんどそのムードですごし、でも、シナリオは全然書けませんでした。考えてみれば20歳そこそこのライター志望に、様々な条件のつくTVシナリオを次々と書きこなせる筈もなかったのです。


▲現実には"スタロボ"にされたケンカ


▲16年前——男の子と女の子は、こうしてデートした…


▲裕子を夢に誘う浩


▲夏のメルヘン

シーン4

ドイツ——ある小さな町
男の子は女の子を追って

イージーな男の子は、女の子がやっていたセールスに目をつけました。女の子にできるぐらいなら俺にだってできるという理屈です。

そして無神経でタフな男の子のセールス稼業はうまく行きました。以後、三年間にわたり、男の子は、筆を持ちませんでした。

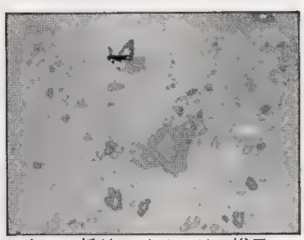
「横文字の仕事ってセールスマンのこと」

男の子よりも少しナイーブだった女の子にとってセールスは、つらい仕事でした。それでも最初は外国行きの費用をためる為、次にできの悪いライター志望に協力する為にがんばってきました。


▲公園近くの大通り


▲空へ昇る少女


▲地下道へ歩く裕子


▲春——妖精のイメージの裕子

「うそつき……」

ある日、そう言って、女の子は男の子の前から消えました。行くあてもろくになく、シベリア鉄道に乗ってイギリスへ向かったのです。英語なら少しは知っている。多分、それだけの理由でしょう。

男の子は、それでも反省の色もなく、セールスをしてのうのうと暮らしていました。

そして三年もたって、いきなり耳に女の子が、いまだにイギリスでがんばっているというウワサが飛び込んできました。

しかも定住権がない観光パスポートなので、半年おきに国を変えている……やばいなぁ……忘れ物を思いだしたような気がして、男の子は、イギリスに飛んでいきました。外国では外国語が話されていることも忘れかけていました。女の子の実家に送られて来たクリスマスカードから、ドイツにいることが、出発の前々日に分り、ロンドンについた男の子は、ドイツならルフトハンザだと、航空会社にとびこみ、女の子の住所を見せます。郵便番号からシュトウットガルドの近くだという事が分ります。分った訳ではなく、住所を見せて、ここへ行きたいと見振り手振りで言ったら、航空券をくれたので、行ってみるとそこがシュトウットガルド空港だと分ったのです。

女の子は、シュトウットガルドの近くのキルハイムテックという小さな街のホテルでベビーシッターをしていました。ドイツ語はほとんど話せないので、幼児の世話をしながら一緒にその言葉をおぼえようという女の子らしい体当り語学独習法をとっていました。

女の子は男の子に会うなり言いました。

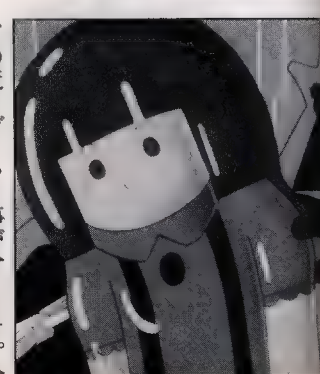
「こんなところにくるようじゃおしまいね。シナリオはどうしたの？ 本当にうそつきなんだから」

「これからどうするんだ？」と男の子が聞くと、

「わたしはなるようになるわ。30歳になるまでに決めるわ」

ホテルから追い出された男の子は、なんにもやる気がなくヨーロッパをフラフラと歩きました。

で、結局、日本に帰ってきた男の子は、こうなったらシナリオライターになるしかないなと思い直し、昔のシナリオの先生の門を叩きました。


▲裕子の心——壊れた人形

街角のメルヘン1968

シーン5

再び東京――1981年 男の子と女の子は再会…

それから5年たって男の子と女の子は、30歳の年、東京で再会しました。ドイツ人の恋人から結婚を申し込まれて、決めかねていたのです。決めかねた女の子は、昔、男の子の前から消えた時のように、そのドイツ人の前からある日突然消えて、東京に現れたのです。

でも、すっかりヨーロッパナイズされた、女の子の性格はとても日本では生きていけそうにありませんでした。日本人特有のじめついた人間関係が、耐えられないのがよく分りました。

夏になって、休みをとったドイツ人が、昔、男の子がやったように、今度はドイツから日本に飛んできました。

そして、新宿の高層ビルの頂上のレストランで、男の子とドイツ人は女の子をはさんで会いました。

「お互いえ・・・・・女の子とつきあっちゃったね」

男の子とドイツ人は、片言の英語でそう話し苦笑しました。



▲ふたりの物語は…!?

て、結局、女の子はドイツに帰ることになり、休みの終わったドイツ人は、一足先に帰っていきました。

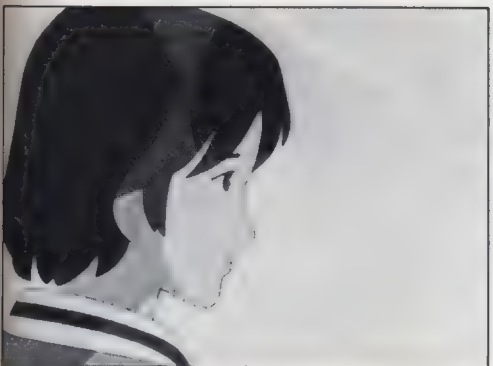
その冬、結婚の法律上の手続きを終えた女の子は、成田から飛び立ちました。重いボストンバッグを引きながら空港に送りに行ったのは、男の子一人でした。

女の子は男の子に言いました。

「これでホッとしたでしょう」

「ああ、ホッとした。正直言って……」

これで、「18歳のメルヘン」にまつわる話はおわりです。



▲男の子――浩は首藤氏!?



▲裕子の心が伝わってくるような絵

シーン6

1984年7月――日本 "街角のメルヘン" 発表

イージーにシナリオライターになろうとして、イージーに月にだって追い駆けにいくといって、イージーに「18歳のメルヘン」を映像化しようなんて女の子に約束した男の子は、結局、約束をまがりなりにも果たしてしまったようです。

男の子が女の子と、新宿の副都心で浮世ばなれした夢物語を話していたころ、やっぱり同じ街を、ビスコというカンパンのようなビスケットをほおばりながら別の女の子を求めて、さまよっていた男の子がいました。その男の子は、後にアニメーションのプロデューサーになって「街角のメルヘン」を作りました。

又、別の女の子にやさしくビートルズを歌ってきかせていた夢多き男の子は、後にアニメーションのCDになって「街角のメルヘン」を作りました。「街角のメルヘン」はもう街角で知りあった二人のある男女のものではなく、制作にかかわった様々な人々の青春の思い入れで作られています。

一人のシナリオライター志望の男の子のプライベートシナリオが、作り手達のプライベートフィルムになり、見て下さる人達のプライベートビデオになってくれればうれしいのですが……。

それぞれの年代には、それぞれの青春の歌があります。あなた達には、どんな歌が聞こえますか?

BGMのバージンVSの音楽は、それはそれとして、僕は、このビデオの音を小さくして、ビートルズとローリング・ストーンズと、リズム・アンド・ブルースを流しながら、一度見てみようと思っています。

そして時には、反戦フォークソング……ショパンのピアノ曲、メンデルスゾーンのバイオリンコンツェルト……僕の18歳の時期に聞こえていた曲です。

見る人達のそれぞれが、そんなプライベートな楽しみ方ができれば、このビデオは、世に出て、けして悪いことではなかったと思えます。

ところで、マンガ家志望だった山本浩氏は、新宿西口で印刷工場を経営しています。

作品の中で裕子と呼ばれた女の子は、ドイツのニュールンベルグの近くの街で、ドイツ人の学校教師と結婚して、家庭の主婦をやっています。

もう皆、34歳……18歳は遠くなりました。



メインスタッフの語る『街角のメルヘン』！



Fpom Staff

メインスタッフ コメント集&リスト







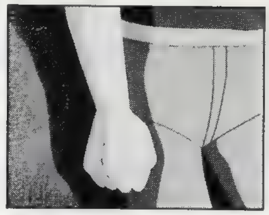


ビデオを媒体としてのアニメ作り…

コーヒーでも飲んで BGV(バックグラウンドビデオ)がわりにも…

総監督
西久保　瑞穂

『街角のメルヘン』は、昨年の12月の初めに、首藤さんから簡単なシノプシスをもらい、メインスタッフでにつめていきました。そしてシナリオのアップ、絵コンテの開始が、12月の末だったと記憶しています。





僕の持つ『街メル』のイメージは、人間というより街そのものです。主人公のふたりも、街の風景のひとつとして描くくらいの気持ちでした。今回は、新宿の、それも限定された地域のみの舞台でしたが、ああいう無機的な地域だけでなく、同じ新宿でも、昔ながらの人情味あふれた街であるので、今度、機会があったらら、そうしたイメージの作品にも参加してみたいですね。

『街メル』はビデオ作品ですから、まず繰りかえして見るということを考えました。映画やテレビとは、また違った見方があると思います。たとえば、BGVとまではいかなくとも、コーヒーでも飲みながら、それに近い感じで見るということもありうるわけです。ですから、音についても、今回は神経をつかいました。最初から、音楽ビデオを作ってみたいという気もありましたし、なにより新しいメディアということで、面白いと思っていました。

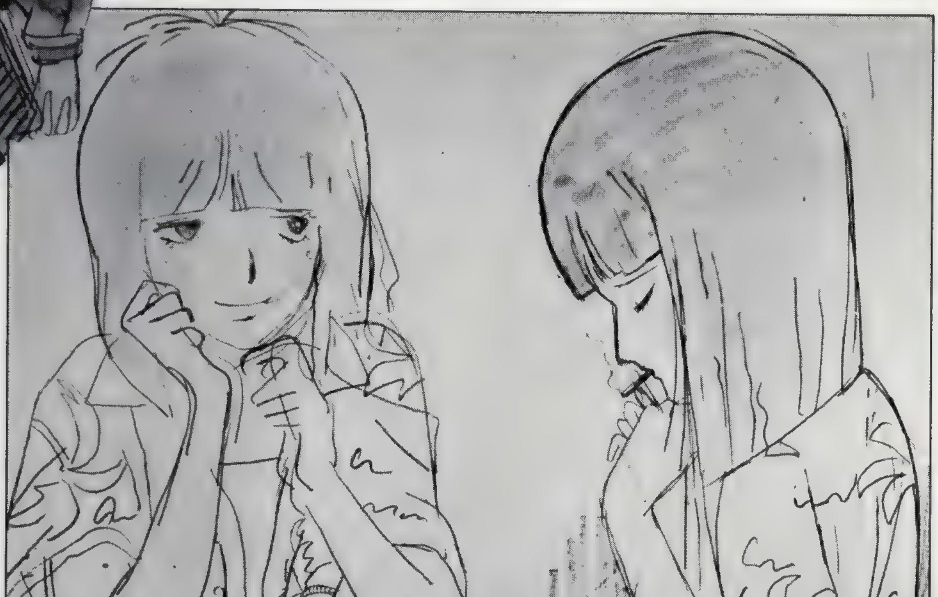




▶裕子の初期設定。ミニスカートとブーツのファッション

テレビシリーズ『みゆき』でも、多くの音楽を挿入していますが、そういった意味では『街メル』は『みゆき』の延長線上にあるのかもしれませんね。

音楽のバージンVSは、絵コンテの前に決まっていましたので、それにあわせてイメージ作りをしました。絵の方も、狙い以上のできです。音がなくても成立するようなカットもありました。とにかく気楽に、繰りかえし見てほしいと思っています。



▲裕子の初期設定より。決定稿より子どもっぽい

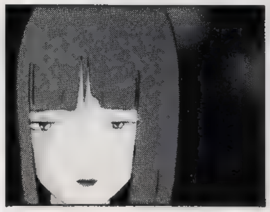
From Staff

色一色、線一本にも神経をつかって……

美術監督 小林七郎







現実から、はじき出されたような都会の少年と少女——そんな人たちの青春ドラマが『街角のメルヘン』ですね。キャラクターは、僕が予想したのと、ほぼ同じようにアップしてきました。美術も、それにあうように考えて作ったんですが、街の風景そのものが、心のひだとかかげりを表現するというふうにしました。

たとえば、昼に対する夜、光に対する闇というように、明暗の対比がテーマになると思っていました。また、アニメの背景というと、あるパターン——くっきりさせるとか、絵具をたっぷり使うとかがあるんですが、今回は、思いきって省略したものを描きました。文章でいえば、散文ではなく詩ですね。言葉をひとつひとつ吟味するように、一本の線にも神経をつかいました。ただ、撮影や現像の都合でしょうか、それが表せないカットもあって少々残念に思っています。



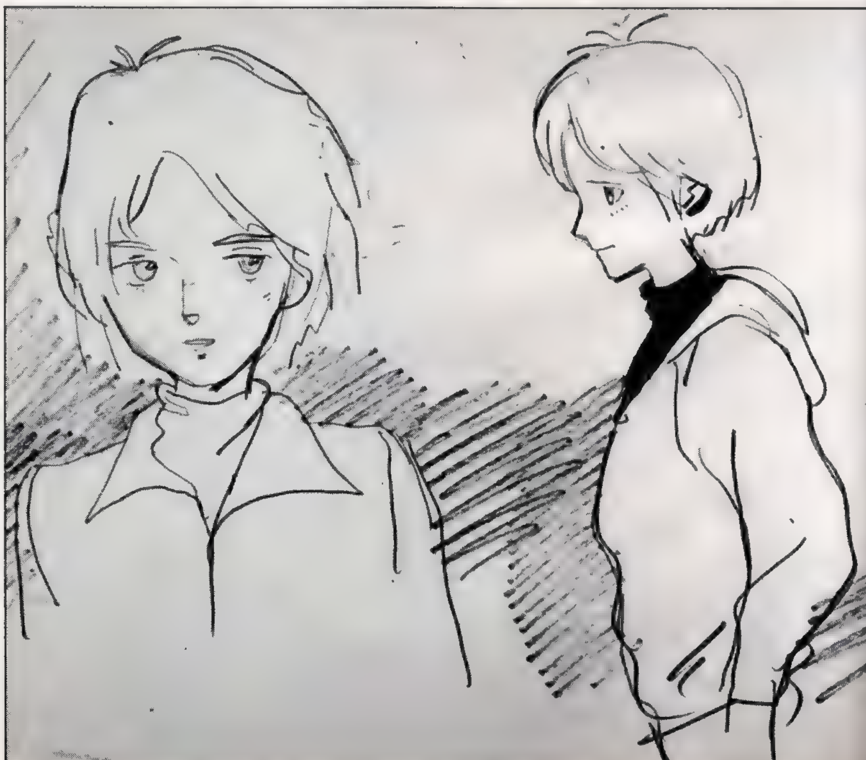


舞台は、無機的な場所ですが、その方が現実の冷たさを表現できると思いました。その中での花は、キラリと光る存在になるわけです。そういう演出サイドの狙いが理解できましたので、非常にのれた作品になりました。

ビデオは、新しい可能性のある分野ですが、繰りかえして見られるということとでは、作る方も気をつかわざるをえませんね。これからも、良質の作品が出てくれることを祈っています。

僕としては、この作品の情感を味わっていただければいいと思っています。こういう仕事は、やっていて非常に心地のいいものですし、絵を描くにものっています。僕の想いを、充分にこめることができました。そういうところを感じとっていただければ、とても嬉しいことです。

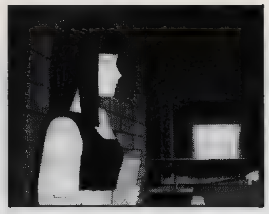
▲浩は、まったく普通の男の子といったデザイン



▲決定稿に近いデザインの浩

キャラクター・デザインと画面構成





ノンビリ見てほしい そんなアニメです!

キャラクターデザイン
天野　嘉孝

キャラクターのイメージは、首藤さんのシナリオを読んで、感じたままに描いたものです。ただ、イメージは、簡単に浮かんだのですが、それを具体的にデザインするとなると、イメージと絵がひとつにならずに苦労しました。普段なら、こうした苦労はしないんですが……。



特に裕子は、全編に占める割合が大きいので、もつキャラクターを作るという条件があり、大変でした。まず、マンガっぽくはしたくありませんでした。

それに、きれいなだけでなく、存在感のあるキャラでなくてはなりません。

アニメで存在感を出すというのは、本当に難しいことですね。

そういった意味では、声も大切な要素ですし、音楽もそうです。

今、見なおしてみると、絵と声と音楽がミックスされて、存在感を出していると思います。

浩の方は、まったく普通の男の子です。そういう面を出したかったんですが、やはり難しいですね。ただ、動いているのを見ると、魅力的でした。

僕が見て感じたことは、ポケッと見ていたせいもあって、疲れない作品ですね。絵だとか、動きだとかはあまり考えずに、ノンビリ見てください。絵は動いているし、音楽は流れているし、ストーリーもゆっくり進行しています。

そんな肩のこらない作品に仕上ったと、僕自身思っています。

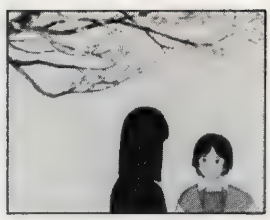


秋のメルヘン部分は楽しく作れました!

原画(デザイン)
遊佐　和重

僕は、部分的にはデザインと作監もやっているんですが、肩書きは原画にしておいてください(笑)。僕は、キティの社内にいるということもあって『みゆき』の終了後に、秋のメルヘン部分をやりました。ここは、かなり複雑な場面でしたので、社内の者にやらせようということだったんですね。

この部分は、他にくらべてストーリー的な要素はないので、1カット、1カット遊べた――というか楽しくできました。どちらかというと、本編の流れからはずれた独立した部分ですので、躍りとか音楽で見せました。



仕事にかかった時は、すでに、BGMの選曲も終っていましたので、テープを聞きながらやりました。

ストーリー性が薄いの



RADIO CITY FANTASY

街角のメルヘン

オール　スタッフ　リスト

製作　キティ・フィルム
企画・プロデュース　宮田智行
原案・脚本　首藤剛志
キャラクターデザイン　天野嘉孝
遊佐和重
桜井利行
作画監督　田中平八郎
美術監督　小林七郎
音響監督　松浦典良

From Staff



で、曲のテンポにあわせてあります。僕としては、まあまあのできだと思っています。

ただ、色指定の人は、苦労したでしょうね。でき上りを見ると、とても仕上りがきれいで、その苦労がしのばれます。



僕は、つねづね、アニメは音楽を使った時がいちばん面白く見せられる、音楽を一体化するのがいいと思っていましたので、このパートがやれたということはよかったと思っています。

しかし、全編バージンVSですので、彼らを知らない人や、ちょっと肌にあわないという人には悪い気がしますね。今度、こういう作品を作る時は、いろんな音楽を使用したらと考えています。

ビデオ作品ですので、レコードやカセットテープの感覚で見てほしいですね。何度も繰りかえして、見れば見るほど味の出る作品です。



この冒険的な企画に暖いご支援を!!

キャラクターデザイン
桜井　利行



今から10年以上前に、月岡貞夫さんが、これからはビデオの時代だといっていました。最近それが現実になり始めてきたようですが、映画でもテレビでも、初期というものは、ノウハウがないため、試行錯誤の連続だと思うのです。

この『街角のメルヘン』、僕は冬のパートで、主人公が回想に入りこんで、現実の世界に戻るまでを担当しました。冬の冷たさとか厳しさを出したいと思ってやりましたが、できについては、初めてのビデオということで、かならずしも満足はしていません。ビデオの場合、何度も見られるという性格上、ドラマを主体とするより、やはり映像が主体となるべきだと思います。そのためには、イメージの豊かさが重要で、そのノウハウを積み重ねる機会が多く必要です。



今、オリジナルビデオの時代がこようとしています。これを育てるのはソフトを買ってくれる皆さんです。どうか暖かく見守ってください。





見てくださった方、感じたこと、今後のビデオ企画に対する希望などを、キティ宛、是否お手紙ください。それからスタッフの皆様、本当にご苦労様でした。



音楽監督
宗像和男

音楽担当
貫田顕勇

音楽
ヴァージンVS
（キティ・レコード）

キャスト
永瀬正敏
藤田紗江子

原画
アリプロダクション
湯川高光
遊佐和重
桜井利行

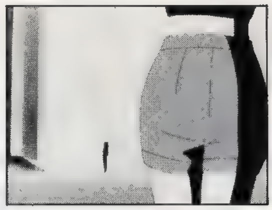
動画チェック
西堀ひろみ

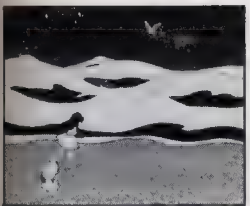
動画
岡田久美子
宮崎葉月
岩瀬久代
関美津子
鈴木まり子
斎藤真実
渡辺真弓
赤崎清美
小野直美
志村芳子

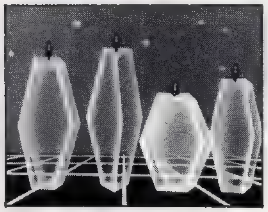
派手さはないが、新しいジャンル！

新宿に雪が降るのかと思っていたら……

作画監督
田中平八郎







『街角のメルヘン』は、新宿という都会で、四季を表すのだという。新宿に雪など降るのだろうか?という心配もつかの間、ある日、ビル街は雪に包まれた。ちょうどその頃、私たちは作画に入ったのです。

7階のスタジオの窓外を、右から左へ流れる雪をながめて、感慨にふける間などあるはずもなく、彼女たちは（この作品は、かなりの部分、女性スタッフによって作られた）、作画にとりくんでおりました。

さて、いつもなら、静かに作画に入る彼女たちが、始めから歯がみし(!)、口をとんがらせ(!!)、吠え、叫び、髪を逆立て(!!!)、熱し激した。

これは、絵コンテに流れる情感とは、およそ正反対の性格の彼女たちが、裕子や浩をどうつかみ、受けとめるか、苦しみ悩んでいたのだ。

思えば、作画の段階で、かくのごとく意見のとびかう作品もめずらしく、それだけに熱の入った作品といえよう。



▲地下道の暗さが、外の光をきわ立たせる

そうこうしているうちに、桜の花の散るころ、私たちは作画を終わる。

かくして、でき上がった作品を、みなさまには、どのようにご覧いただけましょうか。

（この文は、田中氏の書かれたメッセージ原稿を、そのまま掲載してあります）



松島明子
苅田聖子
西田浩子
ラジカルパーティ
ピグモン8
アニメスポット
どんぐり
FLAFRA
ウイザード

色指定　西川裕子

検査　布本由起子

仕上　こずえアニメ
鈴木動画企画

背景　小林プロダクション
下谷美恵子
福村八重子
木村真二
是信光男

特殊効果　阿部郷

編集　西出栄子

撮影　緒方プロダクション
結束義博

From Staff

ストーリーではなく色や形で作りました

検査 布本由起子

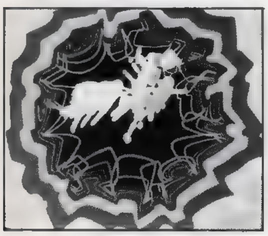
ファンタジックだとか、ポップだとかの言葉はありますが、この作品は、ちょっと口では言い表せません。
見た目の面白さでは、私の担当した仕上――彩色の面からは、四季のそれぞれの色あいがはっきりでているところですね。たとえば、春は、これから一年が始まるぞといった感じですし、夏はファンタジックに、秋から冬にかけては、だんだんと暗くなってくる、といった具合です。
いちばん、不思議な色あいだと思ったのは秋ですね。それに、色数がとても多くて、手をやいたのも秋のパートでした。
全体としては、ストーリーがあまりなくて、その分を、形や色で作りました。絵でも音楽でも、どちらでも楽しめるようにという作り方でしたが、実際にそういう仕上りになりました。
『街角のメルヘン』は、これからのアニメを切り開けると思います。私自身も、テレビだけでは、気持ちの上でまいってしまいますしね（笑）。あまり、いろいろと束縛されないで、表現できるものに接したいと考えていましたが『街メル』て、この希望がかなったと思います。
ビデオであるということをふくめて、この作品は、新ジャンルを作ったといえるでしょう。

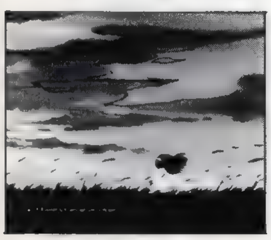

▲前景の自転車の車輪が印象に残る

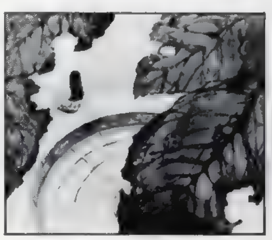
終った時に思うこと〝もうやらんですむ〟

制作担当 阿部榮滋

最初の企画より、中身が濃くなったために、終りの方でスケジュールがつまってきて困りました。ただ、スタッフがのってくれていたので、やれやれとたきつける苦労はありませんでした。
最初はスタッフも、あまり舞台も動かないので、楽だと考えていたようですが、実は四季それぞれを描かなくてはならないし、昼夜もあって、実際は大変だったわけです。特に美術監督の小村さんは、ご苦労なさったと思います。
フイルムができてから、とにかく〝よくやった〟と思いました。
制作という立場ですと、スケジュールやリテークばかり目についてしまって、正直なところ〝もうやらんですむ〟というのが、最初の感想でした。でも、作品は、見て決して損のないものです。







阿部照男
野田健司
馬渡貴志
現像
東京現像所
音響制作
現
効果
伊藤克己
調整
大塚晴寿
録音スタジオ
整音スタジオ
制作担当
阿部榮滋
制作進行
赤沢信幸
久保多恵子
水間仁
田原正利
チーフ制作
森本一雄
制作デスク
山本真岐子
制作スタジオ
キティ・フィルム
（三鷹スタジオ）
総監督
西久保瑞穂

「街角のメルヘン」INSIDE

★『街角のメルヘン』がビデオになるまでをスタッフの出会いから企画、制作と追って、作品のインサイドを紹介！ プロデューサー宮田智行氏の〝メルヘン風味付日記〟——!?

企画から完成へ！その道程を追う


▲新宿地下道


▲若き日の首藤氏でしょうか


▲こちらも〝出会い〟のシーン

プロローグ

197X年 9月×日

午後6時、首藤氏と会う→酒（互いの酒量に感心）、映画の話（その知識に圧倒される）、首藤氏のシナリオの話（その熱っぽさに共鳴）。〈注・この頃、当方かけだしプロデューサー。首藤氏、有望新進ライターとして注目され始めた〉

いつか一緒に仕事をしよう、と約束するが……その後、数年間、二人の付き合いは酒、酒、酒……。

その間、首藤氏は超売れっ子ライターとなる。当方、相変わらず……。


▲ノートを持つ裕子

1980年 ×月×日

午後10時、新宿・某飲み屋。首藤氏の紹介で松浦氏と会う。その後、酒だけの付き合いが数年続く（ほとんど週一）。

'82年3月「みゆき」で初仕事。

196X年 ×月×日

福生外人ハウスにて、天野氏と会



文／プロデューサー・宮田智行



▲少女と大人の間　　裕子

う。当方、無職。ジャパマーハウス4××号。天野氏、某アニメ会社の花形キャラクター・デザイナー。ジャパマーハウス3××号。一緒にフォーク・デュオしたり、遊んだり…。

その時、当方、まさか数年後に天野氏と同じアニメ会社に入社するとは想像だにしなかった。

197X年 ×月×日

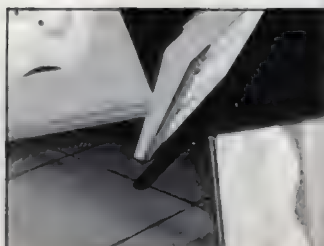
某アニメ会社に、西久保氏とほぼ同時期に入社。当方、企画文芸部。彼、演出部。その後、何度かコンテを巡っていさかい……その後、西久保氏、フリー。

「ゴールドライタン」で再会。あの不滅の「世忘れます」の担当。その後、麻雀の付き合いが1～2年。当方の貴重な副収入となる。

1982年の「みゆき」でジョイント。

※　※　※

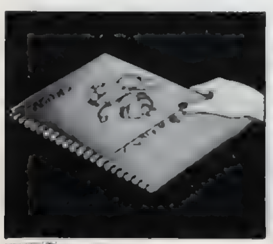
反省　ほとんど酒と遊びだけの付き合いの様にみえますが、実は……ウーン！否定しきれない。



▲天野氏のイメージ・ボードより



▲ファンタジックに



▲街角のメルヘン



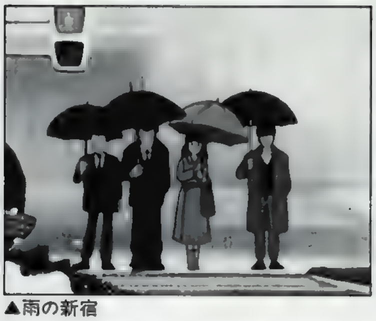
▲また、リアルに

企画から完成へ！その道程を追う

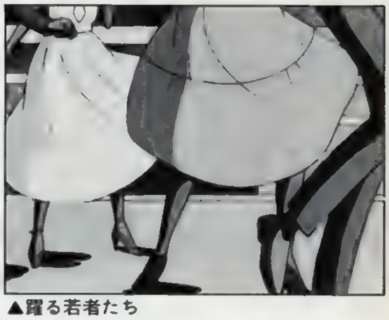




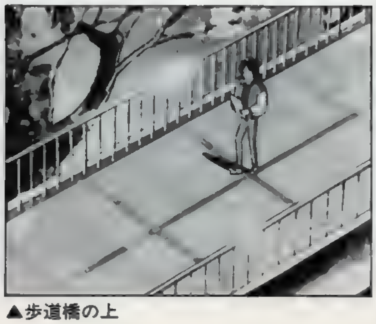
▲ラスト近く、公園の裕子



▲雨の新宿



▲躍る若者たち



▲歩道橋の上



▲人々はいつもと変わらずに

インサイド・レポート

1983年
10月吉日

ミュージック・アニメ・ビデオ企画の話が持ちあがる。企画はフリーで。

ヤッタ！アニメ人生10年（人間35年）、オリジナルで好きなものを作れる!!

1983年
11月初日

数年前から暖めていた企画が、ピーンと脳裏をかすめる。

そう！首藤氏の処女作〝18才のメルヘン〟なのダ。

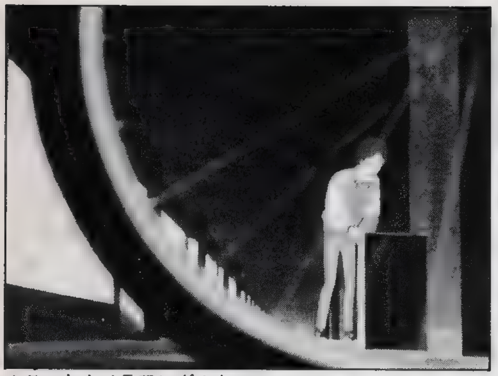
数日後、西久保氏、首藤氏と打ち合せ。西久保氏…「みゆき」で試みた音楽とアニメのドッキング。自分の中で醸成していたアニメ表現方法等、この企画ならやれると大乗り！

1983年
11月15日

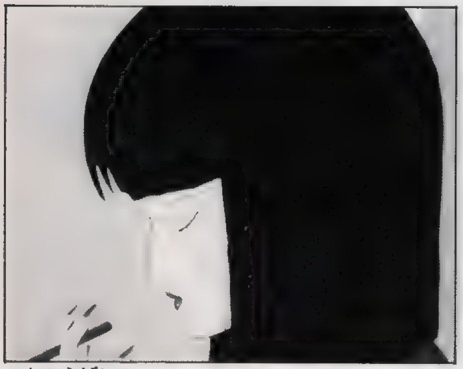
正式に〝18才のメルヘン〟に企画決定！西久保氏、首藤氏と改訂シノプシス打ち合せに入る。それと共にタイトルを仮題「街角のメルヘン」とする。通称「街メル」。

1983年
11月16日

「街角のメルヘン」INSIDE


▲こったカメラアングルも


▲秋――メルヘンを話す浩


▲ものうげに…


▲ポスターの前で待つ浩


▲ポスターの前の裕子。髪が美しい

音楽、バージンVSに決定!

1983年11月25日

美監・小林七郎氏、美術・小林プロに決定。

作監・田中平八郎氏、原画・アリプロ、遊佐和重氏、桜井利行氏に決定。

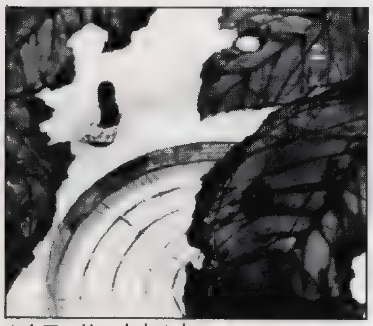
1983年11月30日

キャラデザイン・天野氏に決定。

音響・松浦氏に決定。

1983年12月4日

改訂シノプシスUP。それを基に首藤、西久保両氏とシナリオ打ち合せ。

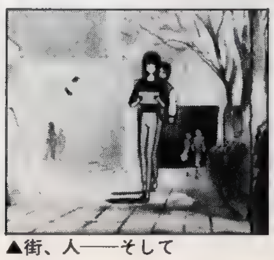

▲人工の池、木立の中

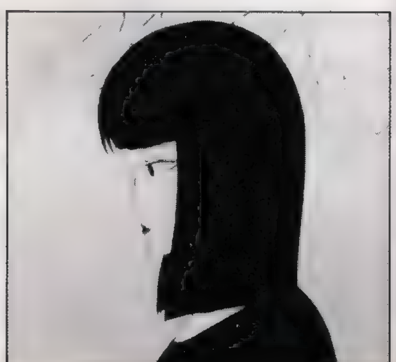

▲公園だけがふたりの場所

新宿3丁目……18時〜翌朝5時迄、両氏のホットな意見交換。当方、飲みながら聞いている。

余談……深夜2時頃、スナック・その二・の天井からネズミのぬいぐるみが落下。シャレの好きなマスターの産物か……ところが数秒後、動きだしたのです。な、なんと本物のネズミだったのです。


▲裕子のタバコに浩は驚く。何せ同い年!


▲街、人――そして


▲裕子にとって浩とは!?

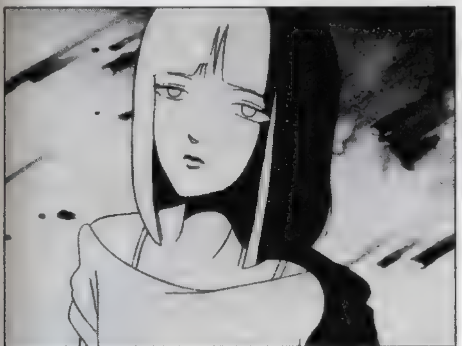
我々、これこそ街のメルヘン!こんなコンクリートの街でもちゃんとりっぱに生きているんだと妙に感動!

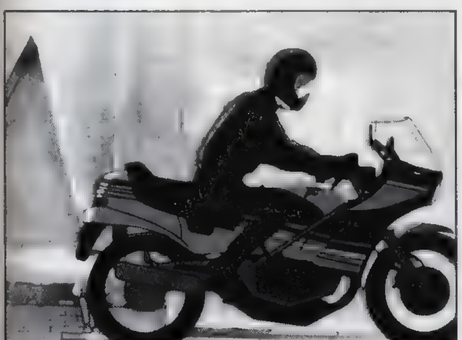
P.P.すごく可愛いくて高貴なマスクのネズミでした。（ホンマカイナ）

企画から完成へ！その道程を追う


▲警官のシルエット


▲コーラのカンが転がる


▲裕子の目の表情が美しい


▲走りすぎるバイクもリアル


▲公園へ浩の手を引いて走る裕子

1983年
12月10日

音響監督・宗方氏、担当・貫田氏がスタッフに加わった。

1983年
12月15日

シナリオ第一稿UP。直しの為、籠城！「街メル」の舞台、西新宿が一望に見えるワシントンホテルに首藤・西久保両氏と共に宿泊。予算の関係でシングルに3人。ウーン、狭い！

窓から裕子と浩の歩く道を眺める……今迄漠然と頭の中にあった二人を、具体的に舞台に立たせる作業が始まった。またまた、ストーミングが深夜に及ぶ。


▲メルヘンの世界へ——飛ぶ！



▲裕子と浩は地下道で待ちあわせ

午前2時、最上階のラウンジで休憩。深夜の西新宿……これが意外とファンタスティックなのですよ。

午前4時、ほぼ直しのライン決定

三者のコンテンタス成る。

（余談）首藤氏、酒を買いに外に出る（ホテル内の自動販売機は高い）。遅い！30分後、しこたま買い込んで戻る。なんと、この街には酒屋がなく、タクシーで行ったのです（結局、高い酒になりました）。


▲水面を下から上へ見る

9時、目覚めると……シングルベッドで抱き合う様に寝ている西久保氏と首藤氏を発見！（注・私は床に寝た。背中が痛い）

1983年
12月22日

シナリオ決定稿UP。コンテIN。オールスタッフ決定。

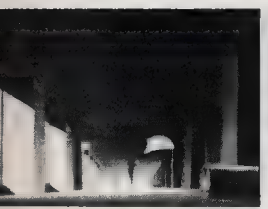
1984年
1月13日

小林氏、アリプロの面々他で裕子と浩が歩いた道を巡る事にした。そして、例のハンバーガー・ショップ

「街角のメルヘン」INSIDE



▲ファンタジックな夏の夜空



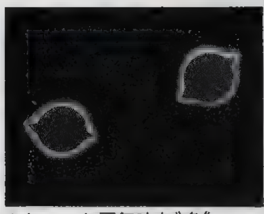
▲そのむこうを裕子



▲風に舞うポスター



▲街を凍らすコウモリ



▲ちょっと不気味な"冬"



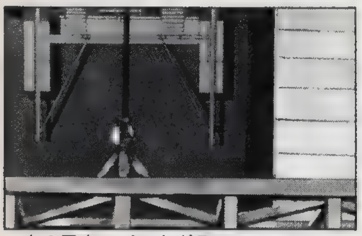
▲つながれたふたりの手



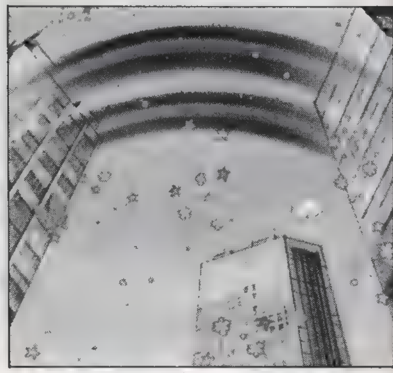
▲花ビラを受ける



▲人工の滝と裕子



▲走る電車のパンタグラフ



▲春の精の降らせた花、そして空には虹

で記念写真。《注・小林氏は、この日以外も単独で、何度もスケッチに行ったそうです》

1984年
1月15日

コンテUP。いよいよ実作業IN。素晴しい美術ボード、キャラシートなど着々とUP。

スタッフの志気もここで一気に盛りあがる。

1984年
1月末日

キティ・フィルム内でパブリシティ・プロジェクトが組まれ、全社的バックアップ体制が整う。

具体的には、情報誌に強い小島嬢、実写畑から小野嬢。そして、ビデオ会社から荒井氏が加わり、万全の構え!



▲浩を見つけて……



▲外へむかう浩

1984年
2月15日

キティ・フィルム本社にて「街メル」製作発表が盛大に行なわれた。初めてのオリジナル・アニメ作品ということで、業界の注目度がヒシヒシと伝わってくる。

列席したメインスタッフの方々の顔も引き締まるのがわかる。



▲裕子に近づく警官



▲夏空へ



▲近づくパトカー

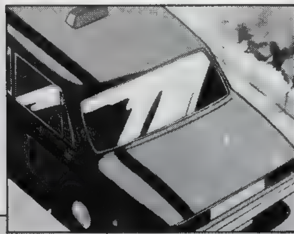


▲ちょっと悲しそうに……

企画から完成へ！その道程を追う



▲夜の公園にて







▲落書きのむこうをカサをさして



▲追手をまく裕子



▲冬のイメージ。女の子も人形に……

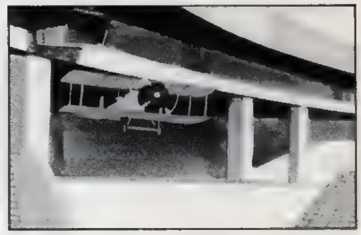


▲地下道を歩く人・人・人





▲裕子の指



▲立体交叉をくぐる複葉機

1984年
3月5日

声優オーディション始まる。オーディションのポリシーは、浩と裕子の年齢と同じであること。数度に渡ってオーディションをし、浩はスンナリ、永瀬くんに決定。裕子は、藤田紗江子くんに決定。

二人とも声だけの芝居は初めてなので、マイクの前に立つ前に、何度も松浦氏の事務所で特訓！

この頃からスタッフの徹夜が続き5月の連休はもちろんの事、5月末まで、休みなしの臨戦体制に突入！

1984年
4月26日

ラッシュUP。

1984年
4月27日

いよいよアフレコ。11時スタート、テレビ・シリーズ2本分で、予定は16時UP。

だが、慣れない二人は、なおかつセリフが極端に少ない分だけ、非常に難しく、午前1時までかかる。

整音のスタッフの方々、若い二人、本当におつかれ様！といく筈だったのだが……。

1984年
5月8日

ダビング前のセリフ転がし……一瞬、松浦氏、西久保氏、そして私の表情が曇った。

完全にこちらのミス、裕子と浩のキャラクターを意識する余り、若い二人の個性を殺してしまった。

慌ただしく再アフレコの調整。

関係各位の方々に多大な迷惑をおかけしました。スミマセン。

1984年
5月14日

再アフレコ、無事終了。



▲休み時間も台本を読む



▲アフレコ中のふたり

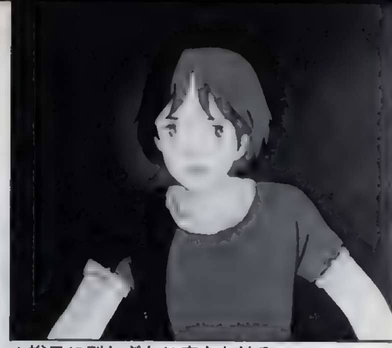


▲ジャンプ！

「街角のメルヘン」INSIDE



▲再び春——桜の下をゆく浩



▲裕子に別れぎわに声をかける



▲何か心に秘めたことがあるのだろうか!?



▲雨が歩道をぬらす



▲風がふく

1984年 **5月22日**

ダビング終了。

1984年 **5月26日**

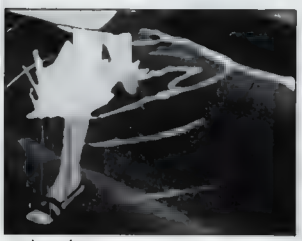
初号完成。
スタッフのみなさん、おつかれ様でした。



▲バイト先へ急ぐ



▲チンピラ



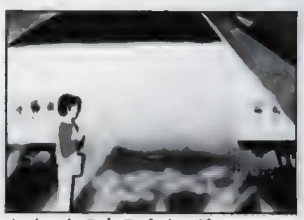
▲水の中に



▲サンダルうらない



▲秋——夕暮れ



▲ノートの中のイメージ



▲冬のコウモリ



▲群衆の中のひとり

企画から完成へ！その道程を追う

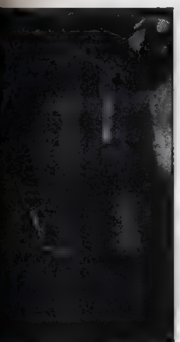
どうしても書きたかった独り言

私は、アニメをほぼ10年……環境に恵まれたせいか……沢山の作品に加わる事が出来ました。ド素人の私を育ててくれた某プロダクションの方々、そしてテレビ局、スポンサー、代理店、出版社、脚本家、演出家、それぞれのジャンルの友人達、そして、何よりもいつも縁の下でアニメを支えているスタッフの方々のお陰で、今日迄頑張ってこれたのです。



▲地下道——浩とゆきかう人々

実写をやりたかったのですが、いつの頃からか、アニメ大好き中年になっていました。営業的な協力体制も含めて、スタッフひとりひとりが力を合わせなければ成し得ないアニメに、とことん惚れてしまったのです。



中の少女

特にアニメの制作現場は、このテクノロジーが進んだ現代では考えられない程、非能率的であり、個々の能力、体力、ねばりに依存しなければならないのが現状です。

それ程、頑張って、頑張って生み出しているアニメーションなのですが、ここ数年、いろいろな意味で行き詰まっている様に思えてしかたがないのです。

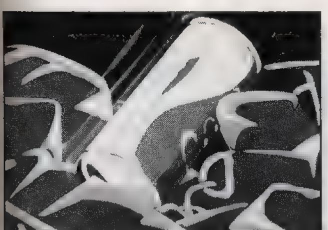
生意気な様ですが、そんな状況の中で、アニメのフィルムとしての可能性をもっと拡げ追求したいと考え「街メル」を始めました。

ミュージック・アニメ・ビデオ——この方法がベストとは思いませんが、ひとつの方向性である事は確かだと思っています。

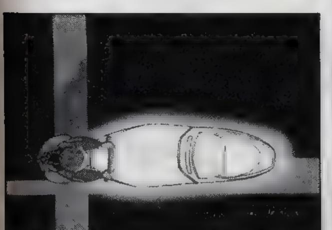
このビデオに、そんな我々の精神が、どこまで貫ぬかれているかは、自分で判断しずらいですが、ビデオというFORパーソナルな市場においては、まだまだ、いろいろな形で冒険できると思います。

そして、それには、我々作り手と大きなパワーを持つアニメファンの方々とのキャッチボールなくしては有り得ないと思っています。

このビデオを見た方、どんな意見でも構わないですから、感想を送って下さい。もしくは、こんなアニメを作って欲しいということでもかまいません。



▲動きはじめる空カン



▲光る靴。少女はみがきつづける



▲ちょっと冷淡な裕子

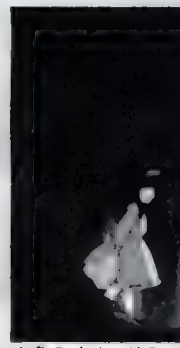


▲アフレコに集まったスタッフのみなさん。

「街角のメルヘン」INSIDE



▲急ぎ足の浩


▲冬のイメージの

そんなところから新しいアニメーションが始まると思っています。
我々もファンの方々も、もっともっとアクティブになるべきでは……と考えています。
最後に「街角のメルヘン」のスタッフの方々、また、何らかの形で参加して下さった方々、そして、この本の出版社である近代映画社の皆さん、また、直接編集に携わった湘南工房の皆さん、本当にありがとうございました。


▲桜と高層ビル


▲夏の夜　オーバーラップするふたり


▲12時のシンデレラ!?


▲はだしでレンガの上を……


▲サンダルで天気を占う

企画から完成へ！その道程を追う

試写会アンケート

Q「街角のメルヘン」を御覧になった感想は


▲会場で感想を書くファンのみなさん

全体的に、ほんのりした画像で良かったと思います。今までになかったような感じだったので面白かったからです。また、気にいっちゃったシーンは、花ビラの落ちるところやサンダルを蹴りあげるところ、ロボットと人形の女の子が遊んでいるところ、最後の春のところなどです。それに、セリフが少なく、音楽が多かったことも印象に残っています。
(田中浩二郎・15歳・東京都漫研連合所属東海大高輪台高校)

頭で理解させるというよりは、感覚で理解させるというもので、勿論こういう類のものは初めてで、ものすごく新鮮でした。四季が巡る中での二人のパステル色の恋がキレイだった(うらやましかったりして)。背景の水彩ぽさ(水彩なのでしょうが)が、透明感あって二人を浮びあがらせていた。
(石川利次・20歳・神奈川大学アニメーション研究)

私が、日頃、見たい見たいと思っていたアニメにかなり近くて(そのものとは言いませんが)非常に楽しかったです。演劇の一形態という形の多かった最近のアニメと違って、アニメーションそのものを見せる部分が多かったので、とても嬉しかったです。本当に、こんなメルヘンが見たかったんです。いいアニメを本当にどうもありがとうございました。(特に良かったのは、ネジ巻き人形とロボットの幻想シーン)ただ、冒頭の英語とフランス語の発音が悪かったのは幻滅でした。それと、動きが少し悪かったところがあったので注意してもらいたかったです。
(松上康子・18歳・東大SFA)

凄く良かった。思わず泣けてしまいました。平面的な絵で、やたらと動かさず、構図や色彩で見せているのが良い。女の子の演技(声の)など無表情というのか、あまり感情をこめてクサイ芝居になっていなくて(芝居というか、ストーリーを見せようとしているのではないので)凄く良かった。TVのアニメなんかだと「動き」と「ストーリー」と「背景」がバラバラで、単なるマンガで作ったドラマなのだが、このビデオは、それらが三身一体のアニメーションになっている。背景も、おさえた色が上品で、もの凄くよかった。全体的にイラスト的な雰囲気がして、TVのいかにもアニメっぽい絵のアニメを見慣れている私には、凄く新鮮でした。音楽も、始めはちょっと静かな絵と反対みたいな感じがしたが、慣れてくると凄く絵に合っていて、魅き込まれてしまいました。
(市岡小苗・20歳・武蔵美術大学アニメ研究会〝謎の幻燈団〟)

最初に感じたのは、初めの部分で、自分がアニメ雑誌などで見た雰囲気とは違っていたことです。音楽がとても楽しかった。このアニメには、二面性というものを感じたが、少年と少女の場面でバージンVSの曲が流れると、かなりの違和感があった。もう一面の『みんなのうた』ふうのアニメは、見ていてとても気持ちがよく、画面がとても美しかった。確かに新鮮だったのは事実だが、斬新すぎて戸惑ってしまったのも事実です。
(片平昌利・20歳・千葉工大アニメーション研究会)

設定が新宿副都心ということで、作品全体としても、そのイメージが非常に強く押し出されていたように思う。特に美術に関していえば、そういう雰囲気作りをするために、非常によくできていた。音楽に関していえば、独特な感じであったとは言えるし、それがまた作品に独特な雰囲気を与えていたが、少なくとも『いい』といえるようなものではなかった。むろん『悪い』と思っていたのでもないのであるが……個人的には、非常に思い入れができる作品だった。というのは「都会にも季節がある」などという会話は、私にも非常に共感するものがあるからである。
(荒木和彦・18歳・早稲田大学アニメーション同好会)

従来のアニメーションと、何となくひと味もふた味も違うところがある。この手のやつをもっとやってもらいたい。音楽と映像の不釣合いな所が多少あった様な気がする。それでもいい！スタッフの皆さん、ありがとう。
(三木茂・16歳・東京都漫画研究同好会)

映像がとてもきれいで素晴しかった。歌と合う所が良かった。
(梅原稔弘・18歳・神ア連)


▲入口で。後ろの壁にスチール


▲大盛況でした！

音のメルヘン

★『街角のメルヘン』全編に流れたバージンVSの音楽は全部で17曲。ここには、テーマ曲『エアプレイン』以外の16曲を全曲紹介（テーマ曲は134ページを参照）。そして、これらの音楽と音響にたずさわった松浦音響監督に思い出を語ってもらった！

ベスパップ・スカウト

The evening sun color marmalade is flowing down over the highway,
and when mother calles out "GOHAN-DESUYO!"
Boys are wandering home sweating in their muddy clothes
after playing in the baseball ground, carrying their baseball gloves
and bats on their shoulders.
Always we've heard melt in air the theme song of a T.V. drama
…Do you remember that one? HORA!…
When we were young… No, isn't true-when we were children.
The children of our children l'enfant de l'enfant de l'enfant…
La chanson que nous entendrons encore dans un laintain futur
et qe nous n'oublierons point.
-Our sweet recollection- ⁂ ⁂

ぼくらは東京の子 (Vesper-p-Ves Silhouette Zone)
誰もが黄昏の (Vesper-p-Ves Silhouette Zone)

胸に輝く　星を忘れず
すみれの襟に　いつも希望の
地球のまわる　七色の音 (Vesper-p-Ves Silhouette Zone)

○と△のすみれ屋根　誰もが黄昏のすみれ団

ぼくらは東京の子 (Vesper-p-Ves Silhouette Zone)
誰もが憧れの (Vesper-p-Ves Silhouette Zone)

胸に輝く　星を忘れず
すみれの襟に　いつも希望の
地球のまわる　七色の音 (Vesper-p-Ves Silhouette Zone)
トワイライト・トンネルのミュータイム　誰もが憧れのすみれ団



音楽、SE、セリフそれぞれが語る主張

『街角のメルヘン』は、音もファンタジック。バージンVSの音楽は、アニメファンには『うる星やつら』などで、もうおなじみだろうが、彼らの演奏姿勢そのものが、アニメーションの持つファンタジーに通じているようだ。『街角のメルヘン』では、17曲がそれぞれのシーンに合わせて流れるが、音楽ファンにとっても、画面と音でつづるこの作品は、十分満足がいくことと思う。





アニメーションの音といえば、この他にはセリフとSE（効果音）があるが、特に苦労したのはセリフ――つまり、アフレコだったという。

セリフそのものは、非常に少ないのだが、それだけに、その少ないセリフの中に、さまざまの感情をこめなければならないわけだ。このため、主役のふたりは、ひとつのシーンを、何回もやりなおすということになった。アフレコの終了時が、夜中の2時というのもうなづける。おまけに、宮田プロデューサーの日記にもあるが、ふたりの味を出すために、もう一度アフレコをやりなおすということにもなった。それだけ、作品の音の部分が大切にされているといえるだろう。

『街角のメルヘン』は、天野氏のキャラクター、小林氏の美術、西久保氏の演出、それに松浦氏の音響が一体となったものだ。画面にもメルヘンがあり、音にもメルヘンがある。『街角のメルヘン』は、そんな作品だ。



さらば青春のハイウェイ

真夏の光を飛ばしてハイウェイ
午後の砂浜 KIRAMEKI　ドライビング
あふれる微笑グッドバイブレーション
あの胸へ　愛の胸へ

真夏の光にはじけるビルディング
青空めがけてジャンピングジャックローラー
TOKIMEKI　微笑グッドバイブレーション
あの胸へ　愛の胸へ
向かうハイウェイ　夏のかげろうのハイウェイ

いつかみた海の光　輝く日に　輝く日に

誰かがいつでも走ってる
青春のハイウェイを走ってるのかい

ここでお別れだ Bye-Bye インターチェンジ
さらば夏の日　KIRAMEKI　サンセット
忘れぬ微笑グッドバイブレーション
あの胸へ　愛の胸へ
告げる Bye-Bye 夏の終わりの Bye-Bye

いつかみた夏の光　輝く日まで　輝く日まで

Good-Bye My Friend Adieu And I Love You
Good-Bye My Friend Love You And Love You
Smile

誰かがいつでも走ってる
青春のハイウェイを走ってるのかい

夢のラジオシティ

cho {DAN DROP CITY POP
DAN DROP CITY POP

こよい君への愛が流れる
ラジオ耳寄せ聞いているかい
どんな時でもどこにいてさえ
聞こえるだろうソングサイクル

※ラジオになってソニックラブコール
ラジオシティガール　恋の街角

椰子の木陰へ　リラの並木へ
ラジオになって星を渡って
歌ってあげるよどんな歌でも
張りさけそうなアンテナネットワーク

※くりかえし

夜空ルージュに　こがし飛ぶよ
時計コスモス　ハートビートポップ
突然なのさ　恋してしまった
すぐに踊ろうレイクサイドで

※くりかえし
cho　くりかえし



ときめきのナインティーン

浮気なレディ
あやまちだらけ
な・な・ないちゃいけない
I'ts my baby　ラリパップ

トキメキ　Feel So Good　浮気なパーティ
バルコニーからイブニング・スター私もそろそろイブニングドレス
トキメキ　Feel So Good　浮気なパーティ
私はミラージュ浮気なルージュ　追いかけるのはあなたの勝手

電話くれても
ぼくはいないよ
お・お・お尻を出して
かみついて　ラリパップ

トキメキ　Feel So Good
バルコニーからイブニング・スター私もそろそろイブニングドレス
トキメキ　Feel So Good
私はミラージュ浮気なルージュ　追いかけられても知りません

歳は　19です！
(etc…)
うそです



恋のダイヤモンド・リング

夜のカメレオン　ビロオドの服を　ぬぎすて
口笛ふいて　メトロのしじまをよぎる
Miss Diamond Ring　君を見つけた街
Miss Diamond Ring　夜をころげおちて
気がつけば　摩天楼が　笑い出す　星もない街

踊るサキソフォン　マニキュアの銀を　とぐのさ
くちびるかめば　メトロにおもかげ　消える
Miss Diamond Ring　夜をころげおちて
Miss Diamond Ring　ひとりころげおちて
名を呼べば　摩天楼に　こだまする　星もない街

※{Miss Diamond Ring　夜をころげおちて
Miss Diamond Ring　ひとりころげおちて
名を呼べば　摩天楼に　こだまする　星もない街

※くりかえし

サブマリン

HOTEL　花屋　カフェシアターに　床屋　灯りともりだすころ
茶色い星のカフェマボロシかファンタジアがなりだすころは
こうもりがさのまぶたもうるむ波の朝顔夜のグラモフォン

ちゃいなクォーター隠山カジノで美女が衣を脱いだり着たり
サブマリンのうろこが踊る天体望遠鏡のよな目で

※ごらんよいかずちの屋根の上（ネモネモ…）　デコレイションケイクの屋根の上（ネモ…）

黄色い煙小びんが舞ってモロッコ模様カクテルバーで氷雨の紳士はまなす博士わかれ大海戦中

踏地から屋根への怪盗紳士並居る敵を横目でちらり
スペインラザアの逆なでうけてヒステリックハンケチ震れ止む

※Refrain

茶色い星のカフェまぼろしかファンタジアがなり止むころは
サブマリンの連続艦隊海底ケーブルかんだよな歯で

※Refrain



音のメルヘン

クレイジー・ダンス

赤道直下に何故だかゆで釜　カッカ　カッカ
人間ブイヤベースがメニューだ　カッカ　カッカ
ライオン狩りの探検野郎が　ワンサ　ワンサ
人食い閣下もゆで釜なでなで　ダンス　ダンス

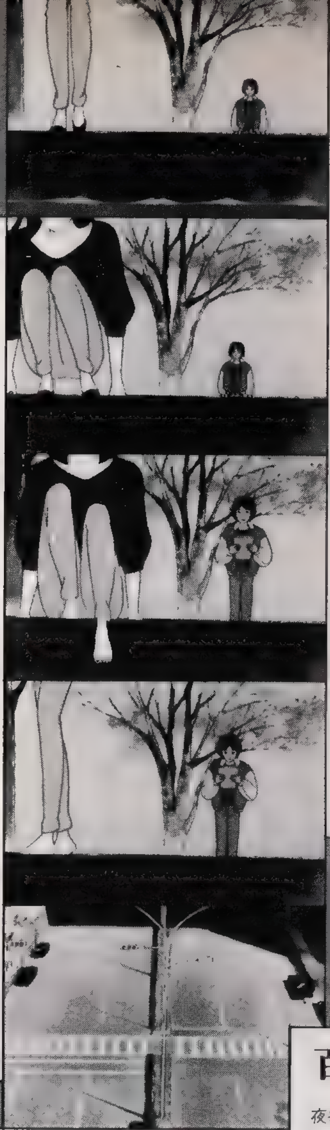
月の明るい夜は淋しいから
食べてしまったら終しまいだから
１人だけ食べ残しておこうかな

ブイヤベースが美味しく煮えるよ　ダンス　ダンス
ナベナベ熱いよ助けて酋長　カッカ　カッカ
ライオン狩りの探検野郎が　ダンス　ダンス
人食い閣下もゆで釜なでなで　ダンス　ダンス

月の明るい夜は淋しいから
食べてしまったら終しまいだから
１人だけ食べ残しておこうかな
クレイジーダンス　ロンリーダンス
クレイジーダンス　ロンリーダンス

ブランディドラムが遠くで煽るよ　ロンリー　ロンリー
ラバさん逃げましょすべってころんで　ロンリー　ロンリー
ジャングル抜けたらエスニック・ファンクの　ファンク　ファンク
ハート切なく唇熱く　アッチ　アッチ

月の明るい夜は淋しいから
１人だけのダンスは淋しいから
２人で踊ったパリを偲んで
クレイジーダンス　ロンリーダンス
クレイジーダンス　ロンリーダンスクレイジーダンス　ロンリーダンス



ムーンライト・コースター

※ムーンライトコースターめざせクレーター
闇夜とばして
ムーンライトコースター描けスペースループ
In To The Darkness

ぐずぐずしてると　おいてかれるぜ
Q転直下のパラダイス
どきどき大好きムーンライトコースター
不思議がいっぱい　Start

時の流れ止めて　夜空を抱きしめて
まばゆい星の影うたうよ

※くりかえし

手を振るあの娘が遠い昔のようさ
まばゆい星の影廻るよ

※くりかえし

ビュンビュンとばすと光が光り
一気に上昇パラダイス
でこぼこでこぼこムーンライトコースター
不思議がいっぱい　Go A Round

星の流れ染めて　夜空を抱きしめて
まばゆる星の影うたうよ

ピカピカタクシーボーイ

Hey タクシーボーイ　まんが映画の星くず逃げだした
Hey タクシーボーイ　カクテル酒場じゃ　三日月踊ってら
Midnight　街角は　ピラミッド・マジカルショー
Midnight　お月さん　あの娘に　とどけてよ
Hey ピカピカ・タクシーボーイ　どこでもやってくれ
ピカピカ・タクシーボーイ　ゆくあてもないのにさ
Hey タクシーボーイ　バックミラーじゃ　三日月おどけてら

Hey タクシーボーイ　タップダンスで　星くずおいかけろ
Hey タクシーボーイ　ポーカーフェイスで
Midnight　街角は　ピラミッド・マジカルショー
Midnight　お月さん　あの娘に　とどけてよ
Hey ピカピカ・タクシーボーイ　街中かけめぐれ
ピカピカ・タクシーボーイ　ゆくあてもないのさ
Hey タクシーボーイ　バックミラーじゃ　三日月踊ってら
タクシーボーイ　ラビットダンスを　あの娘と踊ってら

ピカピカ・タクシーボーイ　街中かけめぐれ
ピカピカ・タクシーボーイ　ゆくあてもないのにさ
Hey タクシーボーイ　バックミラーじゃ三日月踊ってら　ピカピカ・タクシーボーイ
ラビットダンスを　あの娘と踊ってら　ピカピカ・タクシーボーイ
バックミラーじゃ三日月踊ってら　ピカピカ・タクシーボーイ
ラビットダンスを　あの娘と踊ってら

百合コレクション

夜毎夜毎　夢に咲く　百合の君
百合から百合　ささやく花言葉
高原の停車場の　汽笛ふるわせて
ゆめうつつのまま閉じたつぼみを　抱きしめて
オペラホールの丸屋根の上で　視つめていましたね
砕けてしまった土星のように　淋しい星でした
それでもあなたと　歩いた星ですね
サヨナラは　It's only
モウイイノサ　百合 Collection
それでもあなたが　ほほえみ咲くかと
サヨナラは　It's only
モウイイノサ　百合 Collection
ふりむけば　秋空に昇る星

一秒一秒ごとに　変わる君
一雨一雨ごとに　そよぐ百合
マッチボックスに　ともる夜の影
夢うつつのまま触れたくちびる　抱きしめて
ラストシーンにくるくる踊った　北極星を見た
シネマが終われば街明りもない　淋しい星でした
旅の果てに　訪ねた星ですね
サヨナラは　It's only
モウイイノサ　百合 Collection
それでもあなたが　ほほえみ咲くかと
サヨナラは　百合 Collection
ふりむけば　秋空に沈む星

デパートメントストア

ショウウヰンドゥに並べられた恋人
着せ替えられて　アヴァンチュールに燃える
口紅売り場　ドレス売り場　さまよう
夢はいくつも　並べられているのに
売り歩く人の悲しみは倉庫の中で眠るだけ
ショウウヰンドゥのマネキンに恋をして

デパートメントストア　窓の上は　アドバルン
潜水艦双眼鏡で覗いてる
DEPARTMENTSTORE　DEPARTMENTSTORE
DEPARTMENTSTORE　DEPARTMENTSTORE

指から指へ　ダイアモンド　すりぬけ
メゾネットの貴婦人達の指さき
ステレオ売り場　ベッド売り場　さまよう
夢はいつでも　彩どられているのに
売り歩く瞳の翳は　化粧直しの窓辺から
バアゲンセールのアドバルンに乗る

デパートメントストア　窓の上は　アドバルン
潜水艦双眼鏡で覗いてる
DEPARTMENTSTORE　DEPARTMENTSTORE
DEPARTMENTSTORE　DEPARTMENTSTORE





ロンリー・ローラー

夏の夢の終わり告げる　星座輝くプラネタリウム
見上げるビルディング屋根から
ローラースケーター　アクセルスタート

ハイウェイとアスファルトの
星も見えない東京だけど
アンドロメダからカシオペアへ
きらめき巡るプラネタリウム

街角ながれる恋のメロディー
おもいでこらえて
プリズムローラー　アクセルホィーリン
悲しみとばしてあの娘の街まで
つむじ風をまいて
プリズムローラー　ロンサムホィーリン
He's only lovely only Skateroller roadrunner
カシオペアからポーラスターへ
なおも巡るプラネタリウム
ひとみつけたスペクトラム
ランナウェイサーティ　アクセルスタート

じき告げる冬の星座
磁石のようにあおぎ見上げ
涙ぐんでる東京から
くだけてはじける　ロンサムエクスプレス

夜空を流れる　夢に見たミルキーウェイ
おもいでこらえて
プリズムローラー　アクセルホィーリン
ハイウェイをとばして　あの娘の街まで
夜霧をつきぬけ
プリズムローラー　ロンサムホィーリン
He's only lovely only Skateroller roadrunner

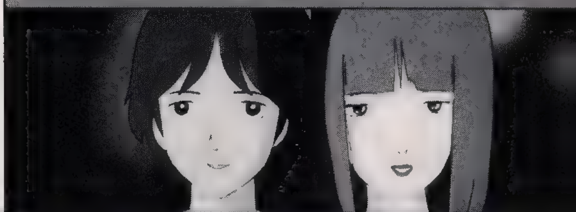
ブリキ・ロコモーション

車輪も煙もブリキになって
最後にあきられ　最後にすてられ
運転手だけがキューピットになって
涙も流さず　あの娘はプリーツ
始まるショーウィンドショー　はじける森と町
（シュワットベイビー　ロコモーション）

車裳も切符もブリキになって
最後にあきられ　最後にあきらめ
運転手だけがキューピットになって
ホテルはリッツで　あの娘はプリーツ
始まるショーウィンドショー　はじける海とビル

運転手だけがキューピットになって
ホテルはリッツで　あの娘はプリーツ
始まるショーウィンドショー　はじける森と町
（シュワットベイビー　ロコモーション）

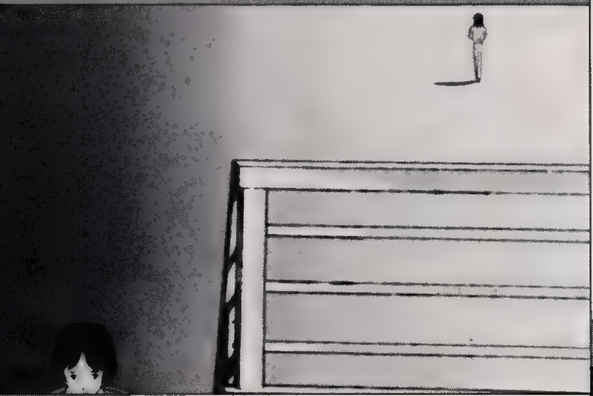
車輪も煙もブリキになって
最後にあきられ　最後にすてられ
運転手だけがキューピットになって
涙も流さず　あの娘はプリーツ
始まるショーウィンドショー　はじける海とビル
（シュワットベイビー　ロコモーション）







音のメルヘン





シンデレラ・ラッキー・ロッキー

シンデレラベイビー　Wanna See You Again

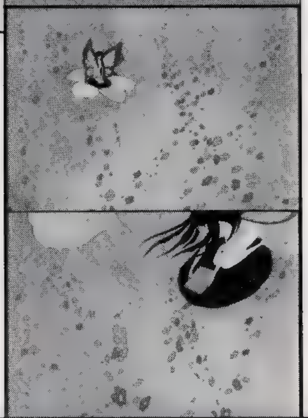
Wake Up Make Up Hurry Up Dress Up
And Gonna Back Your Home

シンデレラベイビー　時計がなるよ
車はカボチャに　あんたはもとに

輝く瞳　みつめてるのに
時計はまわる　あんたは帰る

シンデレラベイビー　どの街歩く
忘れものだよ　ブリキの夜空

Syndellera Lucky Rocky Everybody
Loves You



サントワ・マミイ

街に出れば男が誘い
ただ意味なくつきまとうけれど
この私が行きつくとこは
あなたの胸　他にないのよ

サントワ・マミイ　風のように大空をさまよう恋
サントワ・マミイ　悲しくて目の前が暗くなる
サントワ・マミイ

楽しい夢のようなあの頃を想い出せば
サントワ・マミイ　寂しくて暗くなる
サントワ・マミイ

X'マス・フィードバック・スペイスマン

And Christmas Carol Overcoat (オーバーコート) No (ノ) ERIDE (エリデ)
And Christmas Candol　フィールドバック　MY LOVE　スペイン

電報「モミノ樹サワグ　嵐ケ丘ニ立チ
　　冬ノ嵐　ヲ待ツ星　ヲ指ス
　　宇宙飛行士ノ帰り待テ」

And Christmas Carol Overcoat (オーバーコート) No (ノ) ERIDE (エリデ)
And Christmas Candol　フィードバック　MY LOVE　スペイスマン
スペイスマン
電報「モミノ樹サワグ　嵐ケ丘ニ立チ
　　冬ノ嵐　ヲ待ツ星　ヲ指ス
　　宇宙飛行士ノ帰り待ツ」

「街角のメルヘン」を終えて

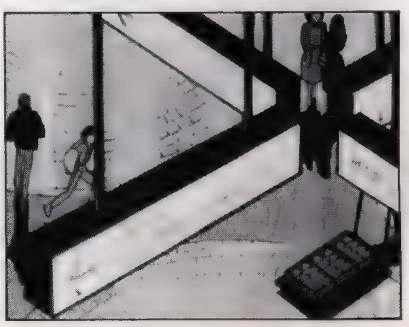
音響監督／松浦典良

この作品は、企画頭初からヴァージンVSの音楽に乗せてつづるという設定になっていたので、今回は西久保監督のイメージ展開のお手伝いをする形で参加させてもらいました。

音響現場から見ると、ヴァージンVSのプロモーションビデオ的な要素も否めないので、ダビングでは西久保氏共々、どうしようかと悩んだところもあり、18曲のすべてがいい形で映像に乗ったかというと、う〜〜んというところもあるのですが、ひたすら情感的になりそうなところを、あえてヴァージンVSの音楽でスコンと抜くかんじで独特の叙情を表現出来たようにも思います。

この辺が見る人の好き嫌いの岐れ目になるかもしれません。セリフも説明的な部分は極力削られており、行間のための気持が必要で、アニメ初出演の2人にはむずかしかったようですが、アテレコずれのない、いいかんじで演ってくれています。





ともかく、たいへん趣味のいい映像への音付けにたずさわれて嬉しく思います。

そして何よりも……涙なくしては語れない宮田氏の苦労や、西久保氏のゲッソリこける程がんばった姿を思うにつけ、このテープがじゃんじゃん、又はそれなりに売れてくれると嬉しいのですが。そして次の機会には、ピンクフロイドのザ・ウォールのように攻撃的、衝撃的なものもやってもらいたいもんであります。

'84・6・22　松浦典良

テーマ曲&挿入歌リスト

エアプレイン

作詞／あがた森魚
作曲／あがた森魚
編曲ヴァージンVS

鰯雲をくぐり抜けて
双葉の羽にはさまれて
キリリと結んだマフラーなびかせ
あの懐しのドーヴァー越えて

パラシュートも風になって踊った
ライ麦とブドウ畑の上で
クルクルまわるプロペラ歌った
あの懐しのドーヴァー越えて

羊の群が遠くに遊ぶ
運河のはね橋がゆっくり上がる
なにもかもが遙かに見えて
クルクルまわるプロペラ歌うだけ

サーチライトも夜空を待っている
ライ麦畑とブドウ畑の上で
真っ赤な夕陽に瞳をこらえて
あの懐しのドーヴァー越えて

アップルシャンデリア オレンジサングリア
カクテルライトがぼくらを待っている

真っ赤な夕陽に瞳をこらえて
あの懐しのドーヴァー越えて

He's only lonely higher, blue sky
Over the rainbow,rainbow,rainbow....
He's only lonely higher, blue sky
Over the rainbow,rainbow,rainbow....

ヴァージンVS紹介

ヴァージンVSは、リードボーカルのA児がリーダー。実はこの人『赤色エレジー』をヒットさせたあの！あがた森魚。当時のファンが見ると"エ〜ツ、ウッソー"という変身ぶりなのだ。で、ヴァージンVS（これはヴィズと読みます）というと『うる星やつら』や『翔んだライバル』などテレビシリーズでおなじみだが、そのサウンドは、ファンタジックなのだ。しかし、残念ながらヴァージンVSは1月26日、新宿ルイードで解散コンサートを開いて、今はない。彼らのサウンド復活を望む。


▲ヴァージンVSは7人編成。A児のボーカルと、コーラス、ギター、ベース、ドラムス、キーボードで演奏

『街角のメルヘン』に流れるヴァージンVS BGMと画面が“メルヘン”の世界を広げる

挿入歌曲目	作詞	作曲	編曲
ベスパップ・スカウト	ヴァージンVS	ヴァージンVS	ヴァージンVS
ときめきナインティーン	ヴァージンVS	ヴァージンVS	ヴァージンVS
エアプレイン	あがた森魚	あがた森魚	ヴァージンVS
恋のダイヤモンドリング	あがた森魚	ボブ・ブラス、アル・クーパー アーウィン・レビン	鈴木慶一、ヴァージンVS
夢のラジオシティ	ヴァージンVS	ヴァージンVS	ヴァージンVS
さらば青春のハイウェイ	ヴァージンVS	ヴァージンVS	ヴァージンVS
サブマリン	ヴァージンVS	ヴァージンVS	ヴァージンVS
ムーンライト・コースター	ヴァージンVS	ヴァージンVS	ヴァージンVS
密林熱鍋(クレイジーダンス)	ヴァージンVS	ヴァージンVS	ヴァージンVS
百合コレクション	あがた森魚	あがた森魚	鈴木慶一、ヴァージンVS
ピカピカタクシーボーイ	あがた森魚	あがた森魚	鈴木慶一、ヴァージンVS
ブリキ・ロコモーション	ヴァージンVS	ヴァージンVS	ヴァージンVS
ロンリー・ローラー	ヴァージンVS	ヴァージンVS	ヴァージンVS
デパートメントストア	あがた森魚	ライオン・メリー、あがた森魚	鈴木慶一、ヴァージンVS
X'マス・フィードバック・スペイスマン	ヴァージンVS	ヴァージンVS	ヴァージンVS
シンデレラ・ラッキー・ロッキー	ヴァージンVS	ヴァージンVS	ヴァージンVS
サントワ・マミイ	Salvatore Adamo 訳詞／岩谷時子	Salvatore Adamo	ヴァージンVS









RADIO CITY FANTASY

ジ・アニメ特別編集



協力	キティ・フィルム ポニー 整音スタジオ ビデオラムダ

編集後記

●この作品の話を聞いたのはもうずい分前のことでした。アニメ界の中で親しくさせていただいている、というより飲み仲間の宮田氏、首藤氏、天野氏、西久保氏等々が、自分たちが作りたい、そして何の制約もない、アニメにしかできない作品を……と熱く語る心に共鳴し、ひそかに協力をしたいと願っていましたが、こうした本を出すことで少しはお役に立ったのかなァと思っています。皆さんありがとうございました。　(高野)

●感動しました。天野さんの浩と裕子もいいし、小林さんの新宿のビル街の四季も最高！おまけに、音楽は、バージンVSとくれば、ファンの僕としてはいうことなし——とまあのりまくったわけです。のったついでに：舞台となった新宿に行ってみました。浩と裕子の歩いたように、中央公園までと思ったのですが、なぜか反対の東口に出てしまい、そう、あの有名なゴー○デン街へと、僕の足はむかったのです。(ウ〜ン、メルヘンじゃ)　Niy

●『街角のメルヘン』が一冊の本になりました。ビデオ・オリジナル・アニメとしては、初の快挙です。あの淡い色彩の画面や、光と音のメルヘンシーンが、この本に再現されればと思ってがんばりました。できるだけ、多くのシーンを、できるだけ美しく、やさしいメルヘンの心をという気持ちでした。それをくんでくださった『街角のメルヘン』の宮田プロデューサーをはじめ、スタッフのみなさんに感謝を！　戸的あき

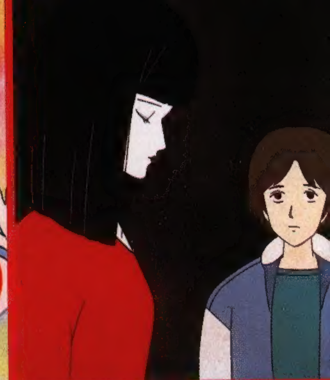
ジ・アニメ特別編集
RADIO CITY FANTASY
『街角のメルヘン』

ジ・アニメ臨時増刊
昭和59年7月30日発行
編集発行人　小杉修造
発行　株式会社　近代映画社
〒105 東京都港区西新橋2の7の4　第20森ビル9F

定価　1,200円
印刷　大日本印刷株式会社
製版　光版社
写植　K・Kワールド写植

















メルメン世界が街に広がって…

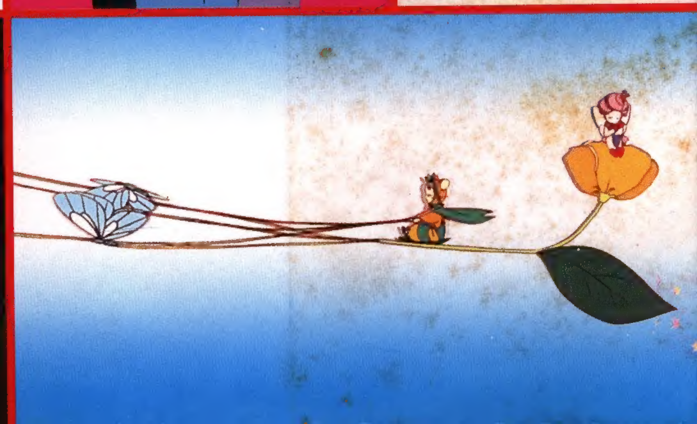
『街角のメルヘン』は、浩と裕子の四季の物語。春から夏へ、夏から秋へ——季節の変化の中にファンタジーが展開する…！







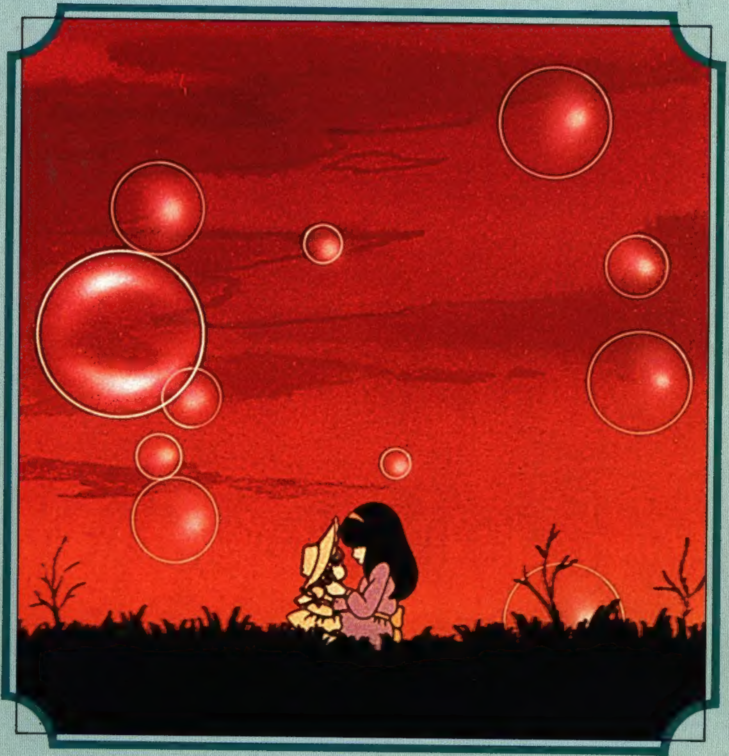




昭和59年7月25日発行 第6巻第11号通巻72号

RADIO CITY FANTASY

街角のメルヘン



発行・近代映画社

雑誌コード 05318—8

定価1200円